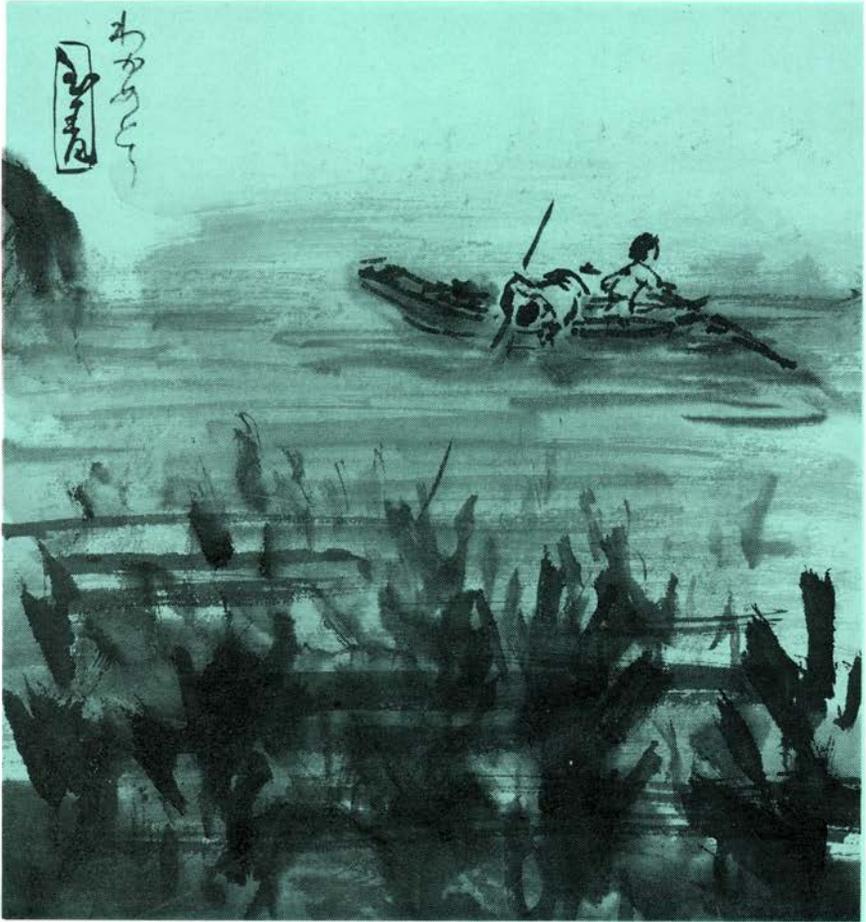


川柳塔

昭和六十二年一月二十五日 創刊
昭和六十二年二月一日発行（毎月一日発行）
大正十三年 通卷七一七号



日川協加盟

No. 717

二月号

麻生路郎
麻生葭乃
中島生々庵
追悼川柳大会

日時 昭和62年7月5日(日)
場所 高野山 普賢院

電話 ○七三六五(六)二二三一 番

兼題

「水草」	山内 静水選
「福寿草」	高橋 操子選
「金魚」	野村 太茂津選
「暈」	小松原 爽介選
「大空」	去来川 巨城選
「書齋」	磯野 いさむ選
「二階」	西尾 栞選

●詳細は追って誌上に発表致します

川柳塔社

橋高 薰風
寺尾 俊平
時実 新子
同期の桜出版記念句会

日 時 昭和六十二年三月八日(日) 十二時三十分

開場

会 場 兵庫県私学会館(神戸市中央区北長挾通り)

四丁目三番地十三)四階ホール

電話 ○七八・三三一・六六二三

国鉄元町駅東口北へ五十メートル西入る

会 費 二千円

◇課題及び選者

愛 橋高 薰風選
葦 寺尾 俊平選
門 時実 新子選

*各題二句・午後一時出句しめきり。(投句拝辞)

表 彰 各題 天・地・人・五客

◇記念講演 「俳句からみた川柳」

俳人・文芸評論家 坪内 稔典氏

◇川柳談義 薰風・俊平・新子を中心会場皆さん

と川柳について語り合うコーナーを設けます。

薰風・俊平・新子

同期の桜出版記念句会実行委員会

御命日

西尾 栗

新年のご挨拶を申し上げて舌の根の乾かない中には、はや二月になった。二月は昔から逃げるといって、商売人は商売にならない月で、あまり歓迎されない月である。川柳界も之というて大会もなければ記念会もない淋しい月である。やはり酷寒という時候に左右される人間の身体の手手からであろう。

大阪で雪の降るのは建国記念日の二月十一日前後にきまつたように一度降る。その後、三月の奈良のお水取り位まで風花が午後の街に舞うのである。

この二月は私達川柳塔にとって洵に哀しくも淋しい忘れられない月である。それは、前主幹の中島生々庵先生の歿くなられた御命日が二月十七日であるからである。

先生の生前、よく承った話であるが、先生は毎月三日京都の西大谷へお元氣な

時はお一人で、老齢になられてから奥さん御同伴で、臥床されてからは、あんなにお傍をはなしたくない奥さんを代理で御命日の三日には、必ず雨が降ろうが風が吹こうがお詣りされた御孝心には全く頭の下がる思いである。

それ許りでなく、先生の過去帖には、中島家は勿論のこと、中島家に勤められた有縁の方、医師会の方、川柳界の方の歿くなられた方々の御命日がぎっしり書かれていて、朝々の仏前の礼拝をされたというお話を伺ったときは一同感動した

ものである。

こんなに御孝心の深い、又歿くなられた有縁の方々の菩提をお弔いになる温かい御心には、後進の我々は川柳以外に学ばねばならないと感銘しているものである。

御先祖のこんなに立派な温かい御心に對して、万分の一の御報恩を念じて、来る七月五日の高野山の御法事と記念川柳大会を、厳肅且つ盛大に開催致したいものと存じ、皆々様の御協力を切にお願いして二月の言葉と致します。

初詣で御菰樽にも手を合せ

初詣で和顔愛語のご挨拶

狒犬をくるくる廻るかくれんぼ

丹前や七十八歳人嫌い

新年の挨拶塵紙交換氏

座右の句

諭されて言葉の鞭に耐えしのび

私の句

地球儀を廻すと平和な国がある

永倉 僕 川

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

冬鳥と共に……………	西尾 栞……………(1)
川柳塔(同人吟)……………	黒川 紫香……………(2)
自選集……………	西尾 栞選……………(4)
■川柳太平記(105) 川柳の群像 笹本英子……………	東野 大八……………(32)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十九丁)……………	黒川 紫香選……………(36)
水煙抄……………	黒川 紫香選……………(36)
二賞候補作中間発表……………	西田 柳宏子……………(53)
秀句鑑賞 「同人吟」……………	小島 蘭 幸……………(57)
水煙抄……………	橘高薫風選……………(58)
愛染帖……………	

冬鳥と共に

黒川 紫 香

私の住む武庫ノ荘からゆつくり歩いて一時
間程の所に昆陽ノ池がある。

大阪からだと阪急伊丹からバスで市役所前
に行き、歩いて十分位である。此処は関西で
も冬鳥が多く飛来するので知られている。

年中、水鳥が居て市からも保護され餌も与
えられている。寒くなると冬鳥が訪れ市民の
眼を楽しませる。白鳥は勿論のことカモ類ヒ
タギ、ユリカモメ等その種類も多い。それが
一年中居る鳥と交るのだから時には湖面を覆
うように見える。

皇居の濠で有名になったカルガモが一番多
く群れ泳いだりヨチヨチ歩く格好が可愛い。

池の周辺に金網が張り巡らされ野犬等の外
敵を守るようにしてある。観賞のために湖面
へ突き出し作られてある棧橋には餌を貰いに
来る水鳥が重なり合っている。

パン屑、せんべい、穀物類等見物に来る人
が持参して投げる餌も多いが、白鳥類は葉っ
葉を好むそうである。投げ与えられた餌を一
番すばしくとるのはユリカモメで飛翔しな

〈女性コーナー〉 茴香の花……………	小出智子選……………	(62)
軽みとは……………	岩井三窓……………	(61)
詩人の年齢……………	竹内紫鑄……………	(64)
私たちの虹消ゆ 嗚呼岩田美代さん……………	阿部柳太……………	(72)
川柳と母……………	岩田時哉……………	(73)
悼 岩田美代さん……………	西山 幸……………	(74)
初歩教室……………	阿萬 萬的……………	(66)
「野心」……………	田中正坊選……………	(68)
一路集「秘密」……………	岸本豊平次選……………	(68)
「背く」……………	藤田頂留子選……………	(69)
柳界展望……………		(70)
本社一月句会……………		(75)
各地柳壇へ佳句地10選／有働芳仙……………		(79)

■2月各地句会案内 91 ■編集後記 93

座右の句

灯台の夕陽神話を抱きよせる

私の句

子と遊ぶ父に肩書きなどいらぬ

(緑之助)

竹 治 ちかし

がら体を回転してつかむ。小柄な鳥ほど上手に餌を捨てるが体の大きい白鳥は動作ものろまて殆んど他の鳥にしてやられる。「白鳥さん、かわいいぞ」と子供達が同情して嘆く。そこはよくしたもので長い首を使って棧橋の縁に突込んで餌をねだる。

こここの鳥は共存共栄である。同じ種類だといがみ合ったり、愛情を交わすためかつついたりするが、他種とは喧嘩はしない。みんな入り交りながら賑やかに暮している。水鳥だけでなく鳩、雀等の地上鳥も来ているが、咎めるようなことはない。面白いのはアヒルが居ても不思議ではないが、誰が放ったのかニワトリが二、三羽仲間になつている事である。空高くトンビが舞い湖面を狙つてときどき急転直下降りて餌をとるが、魚或は昆虫等らしく鳥達を襲うようなこともない。その近くを悠々と水鳥が泳いでいるのだから愉快である。

じっくり観察していると飽きない。種類によつて動作も表情も鳴き声も違つが、みんな此処に居れば邪魔されないという豊かな心を持つているようである。天国でもある。

休日になると沢山の家族連れが来るが荒らされることもなく、それに物売り売店等目障りなものもなく池と緑の木、そして碧い空があるだけで自然が生きている。

だから思い出したように私はここを訪れる。



西尾 栞 選

富田林市故岩 田 美 代

昂ぶりの余白に残り火描きなぐる

もしもという私が翔べた白昼夢

想い出を廻そう椅子に正座する

十二月似顔絵美人に描かれる

逆転があるまで幕は降ろさぬぞ

ふんざりをつけて来たのかコーヒーが熱い

居座りの鳥が少し白くなる

岡山県 土 居 耕 花

老妻の頬がこけてく進化論

七福神掛けて貧しいテクニク

粗品と書いて粗品が持つて行く

混浴の吃水線を心得る

幸せの紙は女のふところ

頭痛膏張って晦日をカムフラージュ

パンザイと書いて晦日の日記閉ず

岡山県 嘉 数 兆 代 賀

信号の青から今日がはじまりぬ

忘れたい過去がまなうらから消えぬ

手鏡も嘘が上手になりました

もうゼニの話に飽いた冬苺

雨滴すら最後を光る欲をもち

十指に余る倅せ亡母がくれました

愛されてすこしとぼけたババサマで

名古屋市 越 村 枯 梢

七十の恋を笑うか星月夜

ずり落ちた父の眼鏡にある安堵

恍惚の母はあどけなく笑う

看護婦のやさしくなってくる不安

小春日の陽差しに老いを労わられ

目玉焼潰れて朝の重い靴

煙の出ない煙突一本溶鉱炉

松原市 谷垣史好

開いても開かぬ二月の箱のふた

ロボットも男 異性が欲しかろう

テープカットに五人も並ぶことはない

ボクシングジムに通っている出前

町内会婦人部出すぎではないか

手袋をどこに忘れた冬の恋

桜井市 岩本雀踊子

一族の掟がからむ冬木立

逃亡記父が残した冬帽子

生い立ちの貧しき母の泣き黒子

聖戦に死に損った軀なり

均等法ときどき妻の口答え

神様との約束事の借りがあ

八尾市 高杉鬼遊

お歳暮の酒もおわりになる二月

らくがきのつもりが個展までひらき

馬鹿な真似するカラオケが難しい

ねぎ買うて帰る家族が一人いる

遺言状金貨いちまい誰にやる

生き死にのまん中へんでめしを食い

倉敷市 野田素身郎

冬枯のベンチいつもの人が来ず

Kよりも少し頑張ってみて社を辞めよ

利く方の左手を挙げさようなら

俺には俺の妻には妻の忘年会

十二月僕を追い越す人ばかり

一時帰休風が冷たい歳の市

伊丹市 檜谷寿馬

宗教家ぶって動かぬ冬の蠅

小春日のフトンへ模様となる落葉

撫で肩のひとも風切る十二月

勲章は来ず辞退の言葉出来たのに

友情や炭とめざしとカンテキと

十二月中に離婚もたくあんも

竹原市 小島蘭幸

跡継ぎがないおいしいとうふやさん

炬燵の上のみかんがいつもある夫婦

輪の外の父よカレーライスを食べなさい

病院からの電話を待っている父で

有給休暇妻と珈琲でも飲むか

懐中電燈怪しいものじゃありません

倉敷市 小野克枝

ひと色の雪をほめ合う共稼ぎ

満腹になると大きな声の父

聞き慣れた音を忘れて行く月日

額かぬ母へ田圃を売る話

足音を持たぬ忍者のような恋

確実にボンボン時計の鳴る暮し

弘前市 波多野五楽庵

十戒を犯した日から雨になり

指人形涙の色は見せられぬ

鬼灯に愛の言葉はいりませぬ
春になるまでは和解をしておこう
部屋中に思慕の切り絵を貼りつめる
珈琲ルンバいつもは好きな曲なのに

美禰市

安平次 弘道

銀杏散って冬の構図を確かめる
血圧の話わびしい日向ぼこ

雑兵の父の生き様には勝てぬ

善人の仮面を拾うけもの道

マイペースで渡る世間の風当り

一期一会悲しい夢は捨てましょう

兵庫県

遠山 可住

女手のない組板が乾いてる
私にもあるのよ妻の誕生日

天井の二月のハエの無辜主張

良妻の手本ときどき隙も見せ

年金生活行書あたりで暮さんか

均等法女が寄って飲む話

熊本市

有働 芳仙

五十米あとから女房来てる筈
酔わせたいつもの酒だなと思ひ

好きですという一言へしゃべり過ぎ

お月さんもひとり私も一人一本道

手を握るだけで燃やしてくれぬ人

代診の日にしか来ない女があり

米子市

小西 雄々

感情線二泊三日の夢に揺れ
将来も自由席では困ります
子に頼る将来ばかり女郎花
裏表話せば長い私小説

他人には拍手をさせぬ鶴を折る

学歴を比較するから嫌な椅子

松原市 玉置 重人

自画像のちよつぱりここが気に入らぬ

均等法女が多いパチンコ屋

塗り剥げて隠しごとない夫婦箸

妻と娘にギョーザの息を咎められ

上醍醐煩惱捨てる汗しとど

二級酒の地酒でウマの合う話

島根県 堀江 正朗

耳鳴りがとんとん昔語りかけ

徳利が少し太った酔い機嫌

シクラメン僕には僕の彩匂う

こんなとき笑顔をかえす妻に負け

サイレンを上げ空から昼になり

妻にだけ聞かせる愚痴で笑いこけ

京都市 松川 杜的

短足のモデルも欲しいシヨールム

心ではアリガトウと妻に言うている

現実には悪が栄えるドラマです

白髪をかくす帽子なら妻よ買え

旅情とは終着駅の海の色

十二月棕欄竹の葉も拭いてやる

米子市

林

瑞枝

冬ざれの遠野をわたる父の唄

田周をひたすら走っている私

菊活けて母は小さく小さく舞う

鶴を折る爪を染めてはなりません

自分史のページに水車小屋の音

笑い茸食べて浮世の垢をとる

豊中市

安藤

寿美子

冬日和はえとりぐもも蠅もいて

エプロンの上にエプロン十二月

落葉帰根梢は春の夢を抱く

冬の縁蜂にもうっかり者がいる

お年玉欲しいよってに生きててや

窓ガラス拭いても外は冬の霧

和歌山市

西山

幸

新しい日記と風を聴いている

花道の約束はない女下駄

毒舌の毒を信じている電話

待ちあぐむ私自身が重くなる

これやこのゆくもかえるも女ゆえ

一人取り残されそうな発車ベル

鳥取県

川崎

秋女

真すぐに私の瞳を見る猫という

安楽椅子漕いで豊かな午後という

顔ふたつ持つと女が強くなる

草いきれ女がふたつ乳房抱く

おしゃべりな女が落してゆくニュース

やがて来るその日にこっと笑ってやろ

冗談に近いところで生きている

ピンクの似合う男で油断出来ないぞ

小春日へ性善説を信じよう

疑えば果なく続く冬景色

青空の下で逢えない人がいる

別々の想いを食べる夫婦箸

留守ごとの鍋がなかなか煮えてこぬ

山茶花のたった一夜を散り急ぎ

無器用に生きてさよならまだ言えず

ややこしい話題にいつもいる女

取り込みへ酒特級の火事見舞

民間人事早春の社内を駆け巡る

視野いっぱい南の風の中にいる

お日さまがいつも見たはるからウソがない

鉢植がふえて困る南向き

お隣もそのお隣も留守でマンション

恐い者いなくなつて敵つくる

小ざれいにくらして女を忘れない

立ち消える話がつづく師走風

八尾市

宮西

弥生

和歌山市

福本

英子

大阪市

津守

柳伸

大阪市

津守

柳伸

うたた寝を起す勇氣がない発車

しきたりに触れぬひとりのお元日

健康がとりえ細腕繁昌記

雨の日のペンがひとりで行り出す

水割りも彼も程よい星降る夜

島根県 錦織文子

金婚の舟で漕ぎだす海がある

金婚へ来世のちぎりも賭けましよう

あの日から千羽の鶴を折りはじめ

秋のペンやさしい言葉を知っている

逝ってからいい人だったとみんな言う

そして秋口笛に乗る童唄

尼崎市 春城年代

亡母によく似たこだまが返る枯木立

早晩の訣れを抱いている椿

胸三寸に納めてからのもの狂い

黙んまりの冬木立から抜けて来る

短日やしやがれた声のわけも言い

阿弥陀くじ人のさだめもこのような

寝屋川市 稲葉冬葉

さざんかの垣根背伸びをくり返す

どうでもよいがつまらぬことを覚えてる

叱られていた夢に枕を裏返す

番犬の好みで吠える倦怠期

核心を突いてくるから外される

百態を許し明日の縄をなう

近江八幡市 前川千賀子

お揃いはキライ園児も新人類

サンタさん来るから花のパジャマ着る

ジングルベルに浮かれ約束してしまふ

街はずれ貧相なサンタ折り返す

二十階から見れば静かな暮れの街

凍天にやさしくなれるベレー帽

富田林市 藤田泰子

持ち味を生かす女の塩加減

人妻に門限がありクリスマス

秋空の放牧 羊雲と遊ぶ

海満ちてさびしい島に舟が着く

初笑顔白衣の天使から賀状

誕生日せめて病夫にあずき粥

米子市 林荒介

空蟬の爪も風雨に耐えている

走らねば影がわたしを置いて行く

数え唄鬼も一緒に掌をつなぐ

人形と問わず語りの夜をかさね

待ち針を打って負け癖いとおしむ

草も枯れはつきり見える向う岸

玉野市 小谷仙山

半顔を照らして左義長餅を焼く

初詣で車は遅々とそれもよし

年玉の差を弟は気に入らぬ

影法師今日のお前は先を行く

損得は言うまい古稀を三つ過ぎ
反省をして居りますと居直られ

唐津市 久保正敏

マニキュアの乾きが遅い雨の午後
一滴の墨が拉がる猜疑心

人が逝く祭り囃子の風の中

避けられぬ流れが男の道にある

干支にない亀を兎が嗤う年

泣く女があるかと思ひ死を思う

大阪市 北勝美

消しゴムに色鉛筆の意地つ張り

木枯しに風の姿を見てしまふ

御用聞き裏へ廻って如才なし

病床の口にとり越し多過ぎる

病妻へ強い言葉をくり返す

あべこべの世話に返ってくる弱音

大阪市 黒田真砂

若松に生きる素直さ教えられ

診察の結果が白と出た安堵

生きて居る伴せ初春の髪を梳く

又一步ふみ出す初春の空の彩

行く雲に語る想いの幾山河

終章が見えかくれする儘に暮れ

尼崎市 春城 武庫坊

繩のれんとトップになれぬ顔並ぶ
不況風もろに船場を通り抜け

蟋蟀のあとは第九がやって来る
雑音は気にせず赤いタイ締める

鍋煮えてもうけ話が中断し

老人カルテ智能程度は書いてない

榎原市 岩井本蔭棒

新人類雄も負けずに化粧する

胎内で静かに眠りたいある日

プリンスでなくてよかった繩のれん

出雲路のうさぎ神話の顔で居る

目隠しも耳栓もして土耕す

真実を語れば粗野な口になる

松原市 小池しげお

返事が二つあるので深爪して仕舞う

招待状もう寝返りは許さない

刑事のように着替えてガードマン帰る

ネクタイをゆるめて課長まだ叱り

初孫が立ったかそうか靴を買ひ

高校へ「誰のおかげ」で行っている

柳井市 弘津柳慶

マンションに住んで無口な人となり

年始客もなくて炬燵で酔いつぶれ

あの人がと近所の人も裏切られ

子の才能見きわめきれずに詰め込んで

シューベルトの余韻に酔うて拍手する

灰皿の煙が風邪の方に向く
島根県 西村早苗

ふんいきに酔うて女の手にさわる
靴はいて坐つて客がまたしゃべる

大あくび誘いをかける二月の陽

ほんとうを言うたベンチの曇さがり

笠岡立 松本忠三

年寄の冷水言わせておきましよう

古里が甥の時代で遠くなり

わたくしが言うたでしようにしてやられ

お利口ねママの言葉にだまされぬ

上戸には悲喜交々の酒であり

堺市 中川滋雀

何くわぬ顔で私を誤魔かそう

一蓮托生ひらき直つて馬鹿になる

木枯しの約束湯豆腐待っている

まだ呆けていないナムムギ早言葉

金の要る話へ聞かす咳払い

堺市 高橋千万子

裏切れぬ私の小指病んでいる

一コマのマンガ社説よりきびし

着道楽浮いた噂がつきまとい

荒っぽい投売りの字も十二月

七五三バス待つ人をほほえませ

倉敷市 稲田豊作

夫婦喧嘩の合間に子供叱られて

説教が趣味の伯父来て正坐する

青年は決意を部屋に貼りつける

反省の夜更け自虐の刑にあい
罪一つ懺悔してから千の善

東大阪市 斉藤三十四

初日記国旗を立てる約束す

約束は口先だけの酔い心地

乾杯の音頭をせかす外野席

顎ひげの白さは善人自認する

中流の顔で内職いそがしい

東大阪市 森下愛論

十二月またも第九が抒情生む

赤い羽根ほんちっぽけな仲間入り

ズッシリといかぬ十万円金貨

仕事なく気ままに起きてネギ刻む

笑えない事を笑つて自嘲する

守口市 羽原静歩

ちははの戒名時には読み違え

マッサージ効いているよういないよう

漫才の笑いおもしろうて哀しゆうて

ねんねこの女も来ている針供養

幼稚園

節分の鬼も笑つて掲示板

今治市 越智一水

肩の力抜いた暮らしへ孫がよる

子の嫁が決まり夫婦で温泉に浸る

餅もよし酒はなおよしおらが春

元旦の心通りに下駄が鳴り

きしむ世に松竹梅の心知る

今治市 矢野佳雲

命とはこれか光って落ちる露
空咳を合図に他人通夜を出る
出稼ぎの村におぼろな昼の月
時雨来て見残す寺の二つ三つ
急用で来るのにムカデ暇がいり

下関市 石川侃流洞

カタカナラツシユ旧人類を襲にす
テレビゲーム孫に本気でも勝てぬ
スイッチボタン溢れ女房趣味の会
方便の嘘を許している仏
鳳仙花はぜる私は熟れてます

兵庫県 辻文平

振り出しに房る鼓動が音になる
脇道のはころびを縫う笑い皺
不可能を可能にさせる札の束
言い勝った後のレモンが齒にしみる
悔い一つ静かに響く弥陀の鐘

倉吉市 奥谷弘朗

金婚にダイヤを贈る夢がある
初めての出会胸さジーンときた
バラ色の将来ばかり言う保険
近頃は野心も消えて粗大ゴミ
赤い爪女が男を打診する

平田市 久家代仕男

エプロンの端に包んだ貰いもの
子も不惑父の頑固を愛おしむ
均等法課長のお茶は誰が汲む
気がつけば優越感が宙に浮き
大根は捨値大根肥りすぎ

呉市 林野甦光

無駄を買う楽しさ犬も脂肪過多
何が気にいらぬか時計屋の振り子
切り子ガラスの夢に女が迷いこみ
裸婦像の微笑へ雪も溶けかかり
出初式去年と同じ事をやり

大田市 藤田軒太楼

初産に大の男の神頼み
ライバルに先行された日のあせり
孤独をば苦にせぬ老いの菊作り
孫三つ電話の声も大阪弁
どうせまた三日天下さ放ときな

島根県 小砂白汀

訛そえグルメの味が生きて着く
熱出して堆肥は土にかえりたし
快く墓地の用意もして初代
恋もする正座もします角砂糖
脇役に徹してめだつ紅しようが

奈良市 宮口笛生

女下駄履いて男が家に居る
何もかも追われっぱなしの十二月

正月を迎える墓の花替える
そうめんの細さに乾く三輪の冬
冷凍の魚の味に馴らされる

東京都 増田次章

逆境といつても食べるに事欠かず
なんとなく今日は怠けることにする
優越感に同情の面かぶり
悲しい時は悲しいことばかり浮かぶ
自制心不足と他人事だから言い

島根県 堀江芳子

真ん中で吐ける意見は温かい
ご飯粒へ正朗さんの指確か
山茶花をほめて南の風を恋う
酒の爛これが平和というものか
疼くもの抱いて日記は閉じられる

唐津市 仁部四郎

遺伝子の詩が聞える年の暮
厄介な脳細胞を俺も持つ
錠剤に黙って水を添えた妻
お銚子を小切る口調が母に似る
人間が二人いるから悪がある

唐津市 田口虹汀

小春日や鳶が鷹の子連れて来る
泥水の味を知ってて飲む清水
朝馳けの足に崩るる霜柱
一期式会言いたい事は言わしとく

元旦や鏡に抱負大写し

松江市 恒松町紅

円高に追い打ち雨の十二月
飽食でおせち料理の味が消え
古きよき余韻を残す城下町
大正の父で忠臣蔵が好き
雇用均等やっぱり女爪を塗る

松江市 柳楽鶴丸

露天風呂嗚呼再出発の初湯かな
新人類へ残す日記を書き初め
波が消す二人の書初砂浜に
割箸が真つ直割れた新年会
屋根裏の部屋は脳みそつくとこ

松江市 舟木与根一

喜劇の面取り揃えている夫婦
歯医者眼医者馬齢重ねて年の暮れ
あやとりが壊れぬうちに隠居しよう
沖繩にて(二句)

終章の塔を巡りし日の無口
激戦の丘で大和の風に会う

和歌山市 堀端三男

教え児が孫を背負って逢いに来る
雑踏の中で孤独におそわれる
見栄張っているなと思うのし袋
花を買うゆとり出来たと娘の便り
駅前広場で拾う人生譜

和歌山市 若宮武雄
呆気なく又とない日が暮れ果てる

男やもめへかあさんぶった娘の電話
子の荷にはならないように掌を合わす

金婚のたからは子等の六家族
一人暮しへ容赦はしない冬の風

和歌山市 内芝 登志代

抱き上げた孫に早春輝いて
冬のバラ温い話が聞きたくて

着倒れの京に育ってジープンで
日曜のプラン狂わす不意な客

好きですと言いい出しかねて今日も暮れ

和歌山市 松原寿子

素敵な人と夢ではなかったフルコース
朱に映えて掟を破るシクラメン

鮮明な余韻がにくい別れ道
編み針で愛を繋いでゆくように

さあ大変愛の微熱がまだ続く

和歌山市 神平狂虎

心の中に落葉の走る街がある
裏返しておこう心が渴くから

星のない空が男の胸にある
風を愛せよと谷川俊太郎

口笛を聴いているよな冬の星

和歌山市 福井桂香

コーヒーを入れては愛の歌捜す

もう許す気になつてゐる酒の爛
アカシアの咲く頃逢いにゆくと書き

密会と聞けばカメラで追いたがり
さあ五十二アロビックス始めるか

冬空に嘘がくずれないまま暮れる
無理をして作つた余裕を温める

物腰が匂う女将は和服好き

扁額に開祖の僧の声を聴く
賀状書く間も喪の葉書三、四枚

悔いのない試合と解説ほめちぎる
婦警とは見えぬ私服のネックレス

カーテンの柄新婚と解る窓
マイカーで帰れるふるさと道が出来

仲裁の顔たて折れておくけじめ

米子市 石垣花子

街に出て鳥は少しづつ飢える
バラのトゲ枯れても人を寄せつけぬ

あぶく銭掴み歯車軋み出し
あすという約束はもう出来ませぬ

火の国で火を噴く歴史繰り返し

神護寺潮温泉(二句)

温泉の宿の訛なつかし神楽舞

山の温泉の温みに浸るクラス会

米子市 菅井とも子

高槻市 辻 白溪子

京都市 都倉求芽

雪の夜は無言で遠い子を想う

母さんの手つきになつておむつ干す

アンカーが受けたバトンは重すぎて

米子市 青戸田鶴

家事だけで終る私を笑う風

寝ころべば草もやさしい小春日よ

箱一つ身の置き処考へる

敷藁の中で眠ろう花の苗

冬木立みんな祈りの影になり

米子市 田中亜弥

風止むと權がだんだん重くなる

雲のわく山故郷にたんとある

坂道でやさしい鬼に助けられ

箸かんで少女は孤独にたえている

空青く途中下車などいかがです

米子市 野坂なみ

縁の下でそのまま生きる母の石

ほつれ糸まず片端を見つけよう

手作りのお返しでしたありがとうございます

冬木立ぼつくり寺へ願かけに

気がつけば亡母の祈りの翳に佇つ

米子市 寺沢みどり

月がきれいで走りたくなる兎の子

湯豆腐の白さへ鍋も光らせる

不揃いの椅子も家族の個性から

割り切れぬ数を残して黄昏れる

ある思案今朝は胃袋干しておく

米子市 政岡日枝子

ひとりぼつちにすると思はれてしまふ針

小石でも私の掌には重すぎる

へそくりもせずに質素な母の独樂

あなたより先に死んでもいいように

もし喪主になつたらどんなことを言う

米子市 沢田千春

遠い日の想い出捨てて冬木立

思いきり走つて海で亡母を呼ぶ

檜山の草のんびりと花をつけ

薬草を干してる家の縁小春

戦いの爪跡顔を出したがる

米子市 光井玲子

みかんころろ炬燵が好きでたまらない

パソコンが走るロボットも負けられぬ

草萌える日までよろこび預けよう

この椅子を檜山までも連れて行く

あたためた珠がてのひらからこぼれ

寝屋川市 江口度

ふぐの肝ばくり山茶花散っている

総務課長も遅刻しました今朝の霧

よい知恵が欲しくて煙草に手をのぼす

カード族やがて火傷をするだろう

俺に似た枝葉一番後で散る

寝屋川市 宮尾 あいき

虎の孫産んだ嫁御は兎年

お宅パンパスいいえおむつよ嫁をほめ

肩叩く孫さえこの頃打算的

おごる人類三原山憤怒

お手洗借りに御役所の門くぐる

寝屋川市

柴田 英壬子

牡丹雪うさぎの初春をひき立てる

妻が塩抜きした数の子だけ食べる

齒につまる肉もめざしもご辞退す

地球儀のどこが安全地帯だろ

三寒四温つばみに声をかけてやり

岸和田市

福浦 勝晴

ええ事がなんにもなかった除夜の鐘

山門をとぎして僧侶は何を読む

茶室から出ると女はかましい

生きる老いる稼いで飲んで食べて寝て

死ぬのにはもったいないほど上天気

岸和田市

清野 こう

日曜日多忙病床見舞客

病院のベッドでけんかして夫婦

妻に意地張ってベッドは子に素直

お隣りの病室妻を看とる老い

葛城の山ひだ霧に夕ぐれる

西宮市

林 はつ絵

わたしとの戦に勝ち目見えてくる

夫が咳しあしたは妻がして

遠会釈もみじ一枚舞い落ちる

旅の夜の台湾美女のものがたり

ここからライバル襲めて冬おわる

西宮市

草刈 墮駄

夕ぐれの散歩酒屋の匂いする

ゴルフ場掘れば縄文の墳墓出る

廃線の鉄路が朝の散歩路

パイプルを読んでがみつひ質屋いる

山の湯で仲居しみじみ赤坂出

西宮市

西口 いわゑ

約束を果しただるま髭がのび

コーラーの一気呑みなどやって見る

窓越しに話をしよう木枯しよ

二人共平凡という星の下

洗たくの好きな女でよう翔ばず

富田林市

田形 美緒

サンタにも予算ありますプレゼント

山茶花の白にあげたいぬくもりを

見栄ばかり香り忘れた赤いバラ

美人ならもつと優しくなれたのに

おでん鍋囲む仲間に忌憚なし

富田林市

松本 今日子

もしもしは私の事か乗車券

献血車ジングルベルのド真中

歩いてもじつとしてても税の上

中年はそっぽむかれたピラ配り

一ランク落してやさしい人に逢う

大阪市 河井庸佑

発想を変えれば何でもない疑惑
定退も秒読みになる日のあせり
精いっぱい生きる姿を子に見せる
子の笑顔わが家に春が戻って来
ほっとした一瞬のすき突いてくる

大阪市 江城修史

白旗はまだまだ古希の坂のぼる
巡る四季素直に妥協して生きる
ほんとうの友のひと言糧とする
酌ぎ足してながなが愚痴を聞く羽目に
わが視野に規格に合わぬ嫁が住む

大阪市 天正千梢

鳥海山は銀 地酒うまくなり
滅びの美学平家のかたをもち
一日のひろいもの朝からいい天気
年末への充電山の湯につかり
旅立ちの二人神話に酔うている

大阪市 藤田頂留子

十大ニュース悲しい記事が上位占め
年末も新年もない救急車
物あまりドラマやたらにぶっこわし
時間調整なじって次の駅で降り
きさらぎの風に値札をまた下げる

大阪市 本間満津子

雪月花宴の人は変れども

師走風喪中のはがき五六枚
傷心へ黙って両の手を握る
母さんの席まん中にある平和
言い訳を考えていて通り過ぎ

大阪市 神夏磯道子

つつましい二人つきりを羨まれ
年金の暮しを叩く冬の雨
衝動買いせよとカードが奨めてる
紅葉散り眠りの深い日がつづく
元旦や右も左もない国旗

大阪市 鍛原千里

真冬の苺に嘘が二つある
羽根布団馴染めぬ育ちへ長い夜
嵯峨野路は悲しきまでに冬の色
冬色に染めて落柿舎物想い
祇王寺は悲しき女の落ち椿

大阪市 板東倫子

良い夫婦年金暮しになってから
ドラマ見て泣いた自分にうろたえる
御神火の怒りに人智すべもなし
装えばふとシャンソンが口をつく
達者だけが取柄で侍せだと思ふ

岡山市 川端柳子

戦争がよかったなどと言わせない
ね返りに淡い記憶のよみがえる

食卓は何時もバラ色夫婦箸
消費は美德今更急に言われても
精神修養そこに一輪花開く

鳥取県 土橋 螢

一月の雨の終りは雪となる
おとおんな愛していれば遠まわり
美しい女の隣の席が空き

俺の終焉に驚よ啼いてくれ
春一番のスタート君のうしろから

鳥取県 新家 完司

えにしかな土鍋囲んで笑いあう
わたくしの爪の垢ならたんとある
武者人形いくさは果てしなく続く
地下街に吹いているのは死んだ風
風邪ひいたらあきまへんで水掛不動はん

七尾市 松高 秀峰

二十一世紀孫に夢ありお年玉
婚約の指輪が光るクラス会
嫁が来て本当に無口の父となり
紳士録載る父だった七回忌
雪だるまいじめを知らぬ子に育ち

倉吉市 野中 御前

スリッパが足より先に走りだし
廻り椅子旧人類をはなさない
たそがれて干された胸がうずきだす
まだ少し未練が残る憎いから

これも縁イミティションを買わせる

竹原市 森井 菁居

長女二十歳下宿へ電話長くなる

親も子も休止符は無きいろは坂

花鳥風月愛すも仙人にはなれぬ

呑んだ夜は妻の多弁に逆わず

二女の珠算熱（二級満点合格（日本商工会議所））

よくやったやったとビール飲み干しぬ

豊中市 田中正坊

情報化社会うさぎの長い耳

プライドはとくに捨てたループタイ

つながれてつないで老いる夫婦岩

冬木立アルバムの顔ひとつ消え

青春の夢いつまでもジキタリス

大和高田市 岸本 豊平次

良い方に考えながら待つてみる

中流の上の顔して同窓会

どの科でも老化現象と軽く言い

ポリーナスは未だかと銀行も気をつかい

酒ぐらい飲める男と好きになり

姫路市 人見 翠記

银杏落葉踏む大学の石畳

木守柿村は一気に冬に入る

落葉掃く箒は落葉の話する

生姜湯を両手に包む今朝の霜

制服を脱いだナースにおじぎされ

宝塚市 丸山 よし津
レールからはずれドラマを書き直す
残る日は少しと知ってた遺稿集

良人像優しさだけで足りるのか
スーパァーが殖えバーゲン競う街

人間の驕りに三原山怒る

大阪市 大塚 節子

弧高よし細き下弦の寒の月

霧深く墨絵の城とツインピル

風邪の子に祖父が造った雪兎

秋深く公会堂を描く夫婦

明日からはダイエット今日食べておこらう

八尾市 宮崎 シマ子

負けるが勝ならばいつでも勝ばかり

老いて子に医者に従い楽になる

吾妻連峰雪と紅葉のハーモニ

十六基にもみじせぬ葉が散りいそぎ

時移り会津の気魄商魂に

松原市 佐藤 藤子

年の瀬を毎年せかす仕掛人

娘とは良い友達になつてゐる

待たされてばかり片目の達磨さん

困ったことに女の勤が冴えている

向い風女がかぶるヘルメット

弘前市 田中 叶

一日や子にも言われて入る風呂

販売機もとの静寂にかえるなり
人がみな見てるその児の親が来る
つまらない男と堕ちてゆく速さ
ゆく秋の景色に止めてある車

出雲市 吉岡 きみえ

冬バラに思いを寄せる月の暈

不覚になる程酔うたら悪女かな

ひや酒が妙に美味い失意の日

言わないと約束くれた風の私語

病人へ明るい本を置いて行く

出雲市 石倉 芙佐子

ちぎり絵の中では蝶を寄り添わす

仮面二つ並べて女まだ迷い

痛い程わかると肩に優しい手

人生の節目節目に雪が降る

夜更けて光源氏は眠りこけ

尼崎市 奥山 美智子

祈願して靴をきちんと揃えている

年賀欠礼かすかに走る痛みかな

とっさの時も折り目正しい人である

旅や旅駅には駅の顔がある

いついても暮らし上手な嫁である

島根県 榊原 秀子

姥ざかりわたしも夢をもつ一人

大根を引き冬晴れの空あおぐ
揚らない凧ふらふらと意気地なし

せかせかがすぎる過ぎると言いきかせ

島根県 榎 みどり

塩風に忌あけの心洗われる

みあかりの蓮のうてなにおわす亡姉

伴せな余生仏の顔光る

何も彼も気楽になつていく浄土

島根県 松 本 はるみ

上野公園(一句)

上野山もののふの声鳩の声

森閑としていて独り庭もみじ

折鶴も翺びたくなつた四面楚歌

黒豆がふつくら煮えた安らぎよ

島根県 松 本文子

でこぼこの十指を合わす大晦日

少し明日見えてうっすら紅をひく

人の世のはかなさを問う木守柿

けんけんをして木枯しがやってくる

島根県 北 川 民子

忙しや眼科脳外科歯科耳鼻科

呆けたね呆けなさつたで笑いいい

太鼓腹ある日しよんぼりしているよ

ねんねこへ雪が降ろうと風吹こと

唐津市 浜 本 久仁於

一人降りひとりを乗せて寒い駅

筋道を通せば謀叛の旗になる

捨てられた姿で羅漢の目が笑い
還暦の兎の耳は聞き上手

唐津市 浜 本 義美

初詣神は徹夜で願い聴く

追いつめられてから神様を拜む人

妻も娶らず子よこれからをどう生きる

ふるさとに麦踏みをみぬ冬景色

鳥取県 森 田 熊生

大の字に寝て空白の時といる

仲直りする一言がみつからず

欲が欲生んでつきから見はなされ

責任がないので酒席知恵を貸す

鳥取県 林 露 杖

手がかりのみんな空しく帰る孤児

単身赴任帰宅拒否症になりそ

墓建てて不孝の穴を一つ埋め

一周忌黄泉に雪積む音とどく

鳥取県 金 川 満 春

喜寿金婚済んで余白のマイペース

草に寝て今の平和にある疑問

顔役が二人町長板挟み

喜寿過ぎて空気の様な妻と居る

鳥取県 松 下 たつみ

芋の葉のしずくころころ妥協せず

親と子の絆に期限などはない

返り血のない批判なら誰もする
結論を延ばす努力で身を守る

鳥取県 さえき やえ

椅子捨てたその後はきかぬかたつむり

そこ抜けの笑いがもれる草の屋根

我が子ならとうにゲンコをやっている

かなしいことだ百姓バカにする知性

羽曳野市 佐野 白水

敷落葉妻の手を引く京の坂

低金利影響する程元もなし

生け垣を通して師走の世相見る

老夫婦互いに情報持ち帰り

羽曳野市 中村 優

音痴だが気兼ねはしない反戦歌

ちちとはは私は父の味方です

天皇の金貨に中流覗かれる

悪徳が囁く僕の電話帳

羽曳野市 田中 隆二

人間を大切にする本を買う

定年の宴左も右も居る

弁解はしない覚悟で席につく

火の彩を見たくて約束してしまふ

寝屋川市 平松 かすみ

花束を抱いてしみじみ佳き日なり

靴ペラもちゃんと揃えて新世帯

子沢山自慢になった昭和初期
小さいが円満そうな重ね餅

寝屋川市 堀江 光子

温かい手編み仕上り遅くとも

写経するいつか時雨の寺となり

好き嫌い写真もいつか褪せはじめ

意外にも傷の深さを知る別れ

寝屋川市 岸野 あやめ

来世紀生きてる自分が恐くなる

午前様乗せてタクシーよく稼ぎ

お位牌に再審無罪告げたとて

ツインビルに降れば雨さえよい眺め

大阪府 山根 いつを

何しても俺に似よつてあかんア

べつべつの説りで夫婦口げんか

お守りもぎょうさん受けていた事故車

畳だけ替えて家内はもとのまま

大阪府 長谷川 春蘭

毎日を万歩計から救われて

赤信号黄色い銀杏が散つて来る

張り替えた障子へ孫の手がのびる

あんなことあったあったも人生譜

大阪府 坂口 公子

ブラックで無理してのんでる自称通

剛腹だがやっぱり裁かないことにする

真中に位置して笑顔を二分する
好調へはめをはずした赤とんぼ

岸和田市 原 さよ子

方言で話すと民話生きてくる

励ましているが不安な手術前

叱ってはいるが負けてる看護人

若さとは思った様な恢復期

岸和田市 島 崎 富志子

カリンの実たわわ果実酒思いたつ

誕生日ケーキ二人で持て余し

マル優廃止涙ほどでも気にかかり

老いがきて互いに気づかう夫婦です

岸和田市 古 野 ひで

生き伸びただけの哀しい冬の蚊よ

雑踏の流れに自分を見失う

夜なべする手もはずみます子の寝顔

今生きるこの倅せを握りしめ

岸和田市 芳 地 狸 村

傷癒えて筆のたのしみふえてくる

狒犬と一緒に写す七五三

口裏を合わせた話ぎこちない

ふぐちりが宅急便でくる師走

箕面市 坪 田 紅 葉

病む人と話す言葉に行きづまり

欠点はあるが二人の性がある

人生に残る未練の綿帽子
落ちつけば似たもの親子もめるはず

高石市 浅 野 房 子

紅葉をふんで老女とはぐれ鳩

散策の小路落葉が追って来る

老夫婦昼は出前のそばですみ

犬や猫可愛がり人に疎まれる

諫早市 原田メイシユン

他人の空似つくった笑顔もてあまし

悪口に合槌を打つ義理があり

強盗もどうぞどうぞと自動ドア

給料をとりあげるのも内助の功

神戸市 仲 どんたく

共白髪はぐれて一人の旅となり

単身の朝煮凝りが待っている

板前に命あずけて冬のなべ

移植待つメスに脳死が急かされる

神戸市 山 口 美 穂

人の世のしがらみわらう冬の月

日記帳老母病んでから白いまま

小さな夢抱きゆっくり五十坂

袖一つ思うことなし湯にひたる

岡山県 二 宗 吟 平

泥棒の事が気になる師走風

硝子戸を切って戸締りあけて入り

泥棒の天下御免のやるせなや
泥棒のゆっくり稼げる共稼ぎ

岡山県 小林 妻子

芒野のお辞儀に鎌の手が止まる

七坂の一つは無事に越えた春

禁煙へ灰皿憎う憎う見え

新聞も半分程は新聞紙

西宮市 野 呂 鶴 汀

何気なき立ち居振舞いの暖かさ

増水で三途の川は渡れない

相殺のつもり土産置いてゆき

古里の味が広がる四畳半

西宮市 奥 田 みつ子

トップより二番手をゆく面白さ

美しい溜息もらす二人づれ

反省の二字が目につく十二月

落葉たく炎の高き恋なかば

浜田市 中 川 幸 一

わたしだけ悪阻に悩む均等法

アメリカの女神は知らぬ原爆碑

相談のない相談役も役のうち

驚いてすぐに忘れる空の事故

浜田市 佐 々 木 裕

七変化男と女の仲がある

ワンカップきつとにらんだ顔は妻

やつれてもやつれた色気を持つ女
ライバルも酒に酔うたら同期生

京都市 山 本 規不風

やさしさに負けてはならぬひとといる

鍋料理嫁が心の芹の里

他人とはいえぬ情けはかけないで

人妻と恋はしないが好きさひと

倉敷市 藤 井 春 日

美しく老いて味ある雪月花

何よりの宝心に宿る円さです

打寄せる波にやどかり狼狽てる

中年女エアロピクスでまだ痩せぬ

和歌山市 牛 尾 緑 良

追善の名で一日が暖かい

何不足なくて無駄までこぼす口

暖かい土を信じる枯落葉

人妻の恋はお酒を注ぎこぼし

倉吉市 渡 辺 独 歩

ピカソにも青の時代が渦巻いた

中流の冬は爪先から冷える

今年こそ勸忍袋に芯入れよう

君が代のさざれ石を基礎に打つ

宇部市 平 田 実 男

割れるよな拍手身障児のゴール

土地を売り遺影の淋しい目に出合う

いやいやのシートベルトは緩く締め
エンゲージリング重たい日もありき

出雲市 園山 多賀子

奥嵯峨の土女の涙で培われ

老醜を勞わり合つて背の丸み

笛吹いて踊らぬ日とや運勢欄

組のリズムも四面楚歌の鬱

西条市 片上 明水

干すことで農家追われる初冬の候

社を辞めて遊んでいます冬帽子

そのままで日が暮れそうな冬の蠅

ビル街の冬道幅が広く見え

八尾市 山下 みつる

頑張って駆けてみようか兎年

保険屋は魔術師みたいな口をきき

クリーンヒット息子に可愛い嫁がくる

御隠居と呼ばれてからが腰軽い

河内長野市 井上 喜醉

国労をなぶり殺してレール錆び

ポケットへ入れて置きたいエチケツト

よそ様の話へ妻は横を向く

カマキリよお前の死顔は見たくない

堺市 柿花 紀美女

夢に見る母の生家の石榴の木

菓の下過保護にされた寒ばたん

子供等と物差し違い遠くいる
糸切れた子等へ心配倍になる

豊中市 奥田 満女

春ですと踏まれながらに犬ふぐり

春愁の別れことばもなく訣れ

女医がいて待合室に花が殖え

梅一輪名もなき里の老夫婦

仙台市 川村 映輝

三原山やっぱり島の宝なり

無芸だが大食せずに八十三

上が死に下まで死んで一人ぼち

国鉄を食った白蟻の断末魔

桜井市 河合 茂雄

首筋が痛む単車のヘルメツト

ゴールインしてから女らしくなり

半分は妻を頼りに歩く道

正座して泣いた涙に嘘がない

町田市 竹内 紫錆

社員食堂しだいに論客が残る

句会盛ん井戸端会議昇格す

暁闇を空港めざす老夫婦

邦訳の第九いつの日歌われる

出雲市 園山 よし子

あしたまで寝かせて呉れとガンの母

ふる里は友情いっぱい柿いっぱい

何時迄も子の目に父はLサイズ
お日様の落書き背なの水着あと

高知県 赤川 菊野

涅槃像ここは中国懸空寺
運命ならひとり暮しを大切に
喪の帯の下で女の鈴が鳴る
眉引いて女仮面をいくつ持つ

土佐市 中内 朱坊

定年の帰農豊かな土が待つ
定年の甘えを土が許さない
公僕の惰性を土に叱られる
国鉄が商法変えたカラオケ車

芦屋市 竹中 綾珠

マラソン選手ここが辛抱の持久力
たまにする洗濯もよし縁小春
ポストまで往復するも運動よ
薄塩や厨の嫁のサジ加減

高槻市 竹内 花代子

一日を病んで仏飯気にかかり
押し花を入れて友へ冬便り
二泊して妹ストレス置いて去に
快眠快食米寿の艶へする安堵

交野市 山本 テルミ

賽銭へ小銭を選っている財布
いい月夜無性に娘に逢いとうて

優しさに触れて長生きしたくなり
静かなら静かでのぞく孫の部屋

川西市 松本 ただし

木枯しや静かに交さん相聞歌
焼棒杭火吹竹が欲しくなる
内角の和が決っていて翔びきれず
気苦労があつてエンマが待てと言う

枚方市 二宮 山久

タイムカード押せば社員の顔になる
愛少しほしくてテレホンカード入れ
財布底叩いて情け買つてみる
この宴は酔つてはならぬほうの席

出雲市 原 独仙

割勘の中に酒豪が一人居る
ある日ふと無意味な長生きだと思つ
食うて寝て寝て食う虫の多過ぎる
お隣は医者で三軒目はお寺さん

大阪市 中西 兼治郎

喪服着て若さをじゆずの色にみせ
お目出度い米寿あの世が近くなり
仕事中笑つてならぬ霊柩車

大阪市 塩田 新一郎

藪椿次第に細い嵯峨の道
冬の雨半分ぬれて去来塚
駅伝に切替え孫をアンカーに

大阪府 町田 達子

仏像に未知の世界を古都の旅
利殖法など一席昼の客が去に
ときめきの過去がちらつく南の灯

と

大阪府 北山 悟郎

喧しい妻が居るから家平和
クレヨンに童心が呼ぶ赤を塗る
皆の者付いて来るのは妻一人

大阪府 吐田 公一

寝る姿起きる姿も見せぬ母
背くこと知らないロバの荷の重さ
雑魚寝から人の温みを知り始め

大阪府 古川 美津枝

盲点か都会の朝にある死角
背かれた人をさがしているテレビ
レモン安女心のひとくふう

大阪府 渡部 さと美

百歳の僧の慈愛とする握手
スケートは狗の走れる姿して
敏感な生きものの体重計の針

大阪府 寺井 東雲

左利き臨時停車は赤のれん
エレベーターあなたは駄目とブザー鳴り
引退の潮時ファンよくわかり

和歌山県 天満 三千代

いの一番夫へ土産の長寿箸
余白ない頭脳へメモ帳加勢する
柿の葉を寿司に活かした柿どころ

和歌山県 山川 克子

小粒でも山椒小股も切れ上り
改善の余地があるので見逃がさぬ
砕け散る波の悲鳴を聞いたかや

和歌山県 後藤 正子

雪になる予感逢いたい人がいる
うしろから声掛けてほしい雨の駅
ノンストップで駆けても思い届かない

島根県 石田 清泉

宇宙より先にマグマに攻められる
墨痕が冴えて色紙の古稀の詩
太り気味の女将だから愛想よく

島根県 岸本 輝水

酔った振りしたばっかりに逃げられる
横文字の読めぬ女に騙される
偶然も次元の中の出来心

出雲県 板垣 夢酔

てて無しのタマゴを女あたためる
恋に親捨てた昔もありました
方向舵主役が二人居て迷い

出雲県 小玉 満江

美田売り先祖へ感謝の青だたみ

今日の服少しのぼせた色にする
火傷せぬうちにカラスは森に去ぬ

出雲市 小白金 房子

豆叩く老母に師走の陽が急ぐ
切り張りの障子に師走の陽を貰う
出かせぎの父に暦もうすくなり

出雲市 竹 治 ちかし

上げ底と知ってる冷たい眼に負ける
年の瀬の嫌味はきつい本音入り
アンブルの力を借りる年の暮れ

姫路市 大原 葉 香

政治学の教授に政治やって欲し
地平線明日のドラマは知っている
勝手口の客には敬語などいらぬ

姫路市 松 浦 輝 月

カラオケのトーンが上り一人醒め
来年の選挙がのぞく忘年会
飼箱を見れば淋しいペットの死

姫路市 丁 坪 サワ子

娘は自家用父自転車の御出動
大根の煮える香うれし老いの鼻
父権とは父は子供に馬になる

吹田市 茂 見 よ志子

白い息並び帰郷のバスを待つ
差し向いおしゃべりするは妻ばかり

窓ガラス拭いて陽春迎え入れ

吹田市 園 田 文 子

今頃は寝るには早し旅の宿
手づくりの秋田八丈ドラマ秘め
勝気さを喪服に包む未亡人

静岡市 永 倉 僕 川

鈍行に乗って落ちつく旅心
酔っている言葉は凶器になる恐れ
円高へ初春の船出が座確する

静岡市 渥 美 弧 秀

病床の姉の窶れた言葉選る
北風小僧今夜は亡姉よ寒かろな
振り上げた拳が孫に裁かれる

茨木市 井 上 森 生
(盛雄改め)

兎年今年の餅の搗き加減
鰯酒にまろいはなしにまろい味
晩秋の津和野ゆったり鯉の里

西宮市 瀬 尾 六郎太

老後には晴釣雨読欲しいもの
弁慶に牛若もいる京の町
いつ帰るとも知れずセッセと夕支度

東大阪市 崎 山 美 子

割勘の頭数にとさそわれる
老化する五体へむなし若づくり
気持まで老化はさせぬ好奇心

老眼鏡ゴマ塩の髭知る鏡

岡山市 井上柳五郎

またきょうも飲んでしまった休肝日

木枯しに水炊き恋し酒恋し

岡山市 岩道博友

愛嬌を振りまく不びんな子を送り

病み上りもう内祝独り言

寒行の手にホテルのピラ渡す

和泉市 西岡洛醉

片肺の今日もどっこい乗り越えた

雑魚だったけど大海を泳ぎ切り

宿の下駄いい音で鳴るフルムーン

福岡県 横地雅風

切手買う窓で菊の芽貰うて来る

霜解かす太陽に畑が甦り

柿すだれ老婆の汗が吊るされる

高知県 曾我部裕

ボーナスの度にやる気の失せる鬼

父さんが今夜もいない十二月

手を突いてまでは借れない自尊心

羽咋市 三宅ろ亭

荒れる夜鰯おこしなら我慢しな

音無しの構えの雪だ貯めるだろ

晩飯もそこそこ新刊届けられ

豊中市 上田登志実

空想に必ず浮ぶ顔があり

男二人妻には言えぬ話する

いい知恵が浮かばないので床屋行く

兵庫県 藤後実男

マンションに住みつき円い空がない

美しい嘘に約束して帰り

住みなれた路地に明日の詩がある

川西市 野村静雄

マニキュアが剥げて心を覗かれる

孝の真似しきりに母の泣き賜う

金動く所へ動く人の情

倉吉市 渡辺菩提句

だだだど枯木伐られる人事でない

煙草屋が煙草止めたと煙草売り

丸坊主撫でられてお利口さんになる

貝塚市 行天千代

券当り金貨を買って見たものの

鏡掛け色褪せました五十年

酷使した身体労わる寝正月

兵庫県 中田白李

倅せな夢には彩がついてない

薄情な男が名前を大事がる

詩を作る婦人と話して心足る

米子市 茂理高代

釘一つ抜けばやさしい人なのに

草枯れやかなしいほどに我に似る
言い訳が嫌いで罪を一つ負い

神戸市 山片 紀雄

きな臭いにおいを選ぶ北の風
ニュースよりドラマで泣ける妻の居て
北からの客でにぎわう冬の池

奈良県 宮川 古都路

運転へ命あずけた北の旅
輸入米止めて粟よむ内地米
新人類女パートの労働歌

加賀市 細呂木 魯木

父老いて叱る迫力弱くなり
個性の強さが女の別れ途
延ばされた個性が列を乱してる

境港市 細木 歳栄

きらめいて直立不動の霜柱
不倫とは思いたくない腕の中
その虫は防げなかつた築地松

富田林市 新開 千代女

秘めた恋佗助だけが知っている
あの時にもしもあなたに先逢えば
吉報が届いて急に食すすみ

弘前市 斎藤 劼

蔦舞う人の愚かさ知る如く
盆栽の落ち葉をつまむピンセット

塵一つ拾った腕が軽くなり

島根県 藤原 鈴江

神様も思案に困る鈴を振り
昂ぶりを抱いて眠れぬこともある

和歌山県 寺田 裕美

それぞれの落ち葉の私語を踏みしめる
出来心試す仕掛けが置いてある

富田林市 片岡 智恵子

地球に居て地球忘れて暮らす日々
露地菊が咲いてまことの季節感

高槻市 川島 諷云児

老いの意地人の情に背をむける
回れ右できぬ浮き世の丸木橋

鳥取県 羽津川 公乃

したたかに女替芯持っている
ぼつくりと母へそくりに触れず逝き

姫路市 釣 遊光

負けられぬ負けるものと六十路過ぎ
自分史は書けぬ古傷多く持ち

岡山県 山本 玉恵

泣けるだけ泣かしてくれる厚い胸
月がとってもきれいと言うて来てくれる

岡山県 直原 七面山

妻には負けとき
浜に來て恋は燃え

自選集

二ヶ月の寒さに負けぬ傘寿かな
手の温みまだ覚えてる女に逢い
寒いから行くことにする北の国
便箋の端に似顔絵画いてくる
風邪ひいたぐらいで見舞い届く幸

黒川紫香

招き猫右腕だんだんだるくなり
年の瀬をお椀の舟でみごと越え

児島与呂志

風は意地悪ほったらかしの風車

市川鈴魚

女だけ世界にだんだん男がし
とも角も男はいやしいままに老い
リズムだけわかつているのに詩を忘れ
男とは蟻螂だったかも知れず
振り返る日々に妥協などしない

工藤甲吉

父は筆頭屋敷の桐が太くなる
亡き母に償い七草粥を炊く
しつかりと刺す針山は母がいる
柚子の香に息災だったそばの味

本田恵二郎

アメリカの米と案山子も闘う気
御神火は国が亡びるぞと叱り
モノを訊くにも年寄は年寄へ
曲がり曲がりこは我が家の細道じゃ
泣く方も泣かれる方も樂でなし

大矢十郎

心棒役ズーと勤めて妻老いぬ
部下はみな年上ばかりという出世
縁の糸結んでくれた人やさし

年頭の所感などなし旅プラン

二代目に父突き捨ての歩で終り

還暦や亡父の齡まで三十年

ポーナスを出せず貰えず小商人

宿とつてから親戚へ寄る旅情

サムライが味方に一人居てくれる

鯉口をいつも弛めて従いてくる

冥加哉いつも味方の息吹き吸う

冒険か試行錯誤か体当り

サムライに俺の介錯任しとく

勤皇の未だ捨て切れずよく売れる

庇う気で居るのに彼は我を通し

風無情夫婦の仲を割きに来る

肩越しに覗く二十一、二の後から

割込みはさせぬ背中に意地を見せ

堂々と七十ですとまだ言えぬ

君が代を寝ころび俺も変り果て

トランプで占い来てほしほしくない

帰ろかな呑んべえばかりに囲まれて

おしめしてあげる私の旦那さま

野村太茂津

窓を打つ風冬を告げて鳴る

暮れの街ひとのぬくもり風に乗る

初詣幸せの音こだまする

今年まだ仕事ゆるめぬ初詣

幸せを押し頂いて春の酒

藤井明朗

長野文庫

湯豆腐をほめれば齡をたたみかけ

しゃがませてのぞきこませてやぶこうじ

じいちゃんと言われ負け惜しみを覚え

日々多忙また一と息を入れる味

修学院離宮にて

そのかみを踏む飛石の畏けれ

初もうで行けるとこまで車椅子

例外なくよい年にして来る賀状

背をむけて心の中で燃えるもの

職退いてからは物置応接間

さらば喜寿まだ上らねばならぬ坂

おとといの絵に逃げこんでいませんか

不意に鳴らされて楽器も取り乱す

水粉千翁

米澤暁明

山内静水

八木千代

飽きもしないで海の絵ばかり描く仲間
雪一面 神を憎んだこともある

冬の絵を画くれんしゆうをしようかな

風当り生きてしあれば恥多し

弱点を知りすぎてゐる涙壺

諦めることをおぼえた溝の幅

二月の風弛んだ籬を締めに来る

浪速節お笑いぐさになろうとも

駅前をめし屋で聞いたええ話

まだ運が向かずに露地で焼くサンマ

底辺に二本の箸がある強味

運を天に任してからは運が向き

裏切りへ出世を焦る妻がいる

達者で長持ちさせとって背を伸ばし

気負うても老化防げるわけでなし

粗食ながらもバランスを考えて

苦劳かも知れぬ長生き出来そうで

ホカロンの支援できつい冬を越し

マジックは手際法螺にも上手下手

小出智子

月原宵明

金井文秋

尼緑之助

十二月風に押されてたどりゆく
円高は泥にもぐったムツゴロ一
子定表見つめて炬燵眠くなる

傘寿今 日本風の風に手をかざす

物音に耳だけ動いて猫こたつ

思い出が亡母につながる夢二の絵

すばらしい嘘が信じてくれと言う

孫に知恵借りてわびしさふとよぎる

ほけないでネと子や孫に頼まれる

妥協案 父の口から出て終る

一点を見つめて進むことにする

人肌の真珠の吐息聞いている

ふところの寒い日雨が降っている

湯どうふへ昨日の話ばかりする

旧婚旅行お地藏さんが多すぎる

ほんとうに死んでしまった死んだふり

七十と三十の恋指相撲

串カツの串の数にも負けている

滝落ちる容赦のなさは死のごとし

藤村女

正本水客

橘高薫風

笹本英子

東野 大八

○意地強き女へ運のそれていく 英子

○泣く女泣かぬときめてから強し //

笹本英子（旧姓西村）は明治43年2月28日

鳥取県西伯郡上長田村（現西伯町）の生れ。

生家は一町八反の農地・山林をもつ農耕と製炭の兼業農家で、父儀三郎は村会議員をつとめ、家はこの両親に祖母、六人兄妹の英子は

第五子で、一家九人家族。父は公職にあるため留守勝ちで、祖母が一家を切り回したため

英子の母は田畑山林、製炭に苦闘を続けた。

長兄は16歳で夭折、次兄正雄は隣県の名門校島根高等へ進学。なかなかの秀才で同校を卒業すると大阪市の住友銀行に就職。昭和5

年英子はこの兄を頼って弟と上阪したのは20歳の春。弟は天王寺中学に通った。そして英

子は大阪砲兵工廠の工員となった。

英子が川柳の道に入ったのは昭和9年のこ

とで砲兵工廠時代である。長宗白鬼の指導を

受け、小島損得、松田一榮女を識り「番傘い

ざよい会」の会員となつて、以来川柳に心を托し、生涯これを心の支えとしてげいししい自己燃焼を続けることになる。

昭和10年春、弟が天王寺中学を卒業、社会

人となったので、英子は五年ぶりに生家へ帰つた。そして翌11年5月松江番傘創立十周年大会に出席。岸本水府、近江砂人、志方蝶二

らと親しく句作の席を同じくした。

○母に似た欠点母がなぐさめる 英子

○青春を楽しむ如く嫁き遅れ //

昭和12年11月27歳の英子は、隣県の島根県

能義郡布都村（現広瀬町）宇波に嫁ぐことになった。夫の名は農業笹本勝三。

「私は縁あってこの宇波の貧しい農家へ嫁ぎました。オカメの面の様なオールドミスは誰も相手にしてくれないので、私は諦めてまいました。何の涙かその前夜、大粒の涙は今も忘れることはできません（英子手記）

笹本家は五反八畝しか耕地がなく、嫁いだ

夫には先妻の残した四歳の子がいた。つまり

後妻であった。英子のこぼした大粒の涙とは

貧農へ後妻となつて嫁ぐ諦めの悲しみの涙か

もしれない。こんな英子にさせたのは、日中

戦争勃発、戦火の拡大が背景にあつた様だ。

嫁いで間もなくのこと、夫勝三の弟が八歳

と六歳になる二人の子を連れ、神戸から訪れ

「妻を失って困っているから預ってくれ」と

いう。英子はこのため忽ち三人の母親となつ

た。その時、既に英子も妊つていた。

「その後、義弟は行方知れず、義父は中風になり一歩も動けず、幾年か病床の人でした。母はその父がよくなるよう焦つて、いろんな

人を迎え、病氣平癒の祈願のため拝んで貰いました。そんなある年、大杜町のお爺さんが

拝んでいると急に母が発狂、続いて夫も発狂。不意に弟も帰ってきて発狂。私は全く途方に

くれました。泣くにも涙が出ませんでした。でも夫の方は軽く、母と弟は入院させました。弟は二年、母は四年経って病院で亡くなりました。夫はこれが動機で二十年勤めた役場を退職せねばなりませんでした。大東亜戦争の最中に私はいばらの道を歩きました。すべて宿命と諦めて堪えてきました。(英子手記)

これらの手記は、英子をモデルにした「日本の底辺」(未来社刊)の著者溝上泰子島根大文学教授にあてたものである。この溝上教授と英子の出会いは昭和27年であった。英子の口述をメモした溝上教授は、英子の家の三人の精神障害者のことにふれねばならない点をためらった。しかし英子は、教授宛の書簡にはつきりと「発狂」と書き、つぎのようなことをその手記の中で書いている。

「仮名でということを抑有りましたが、私は本名でお願いします。何も他人様にはかわりのないこととして、当時、精神異常者がいたことは村中誰一人知らない人もなかったのですから……。神の試練として、宿命として生きてきましたこと、誰憚ることもございませぬ。今にして思えば、あの様な過去をつぶさに句にまとめておけばよかったです後悔していません。夫への愛情や、病気を覆う気持が勝

って句材にもせず深刻な句は残っていません。とるに足らぬ人生をお書き下さいましたこと感謝の念でいっぱいでございます。

○過去みんな忘れて花の数をやむ 英子
○何かよいことがありそつ夕焼ける 〃

英子は溝上教授が「日本の底辺」に、笹本英子の項を設け、執筆して貰うことに感謝し、以来二カ年間、心をこめた長文の手記を、実に24通も書き送っている。上述の手記とはその書簡の抜文である。彼女は教授との出会いによって、自分の魂の在り様をみつめ直し、次々に襲ってくる試練に立ち向おうとの気概のうちに、生きる光明をそうした手記の中で見出そうとしたらしい。

「逆境の中で英子さんを生かしたものは川柳であった。この眼がどんな暗いジャングルのなかに陥った時も、英子さんに出口を与えたのである。」(「日本の底辺」より)

「火と燃える情熱はなくても忘れることなく時にふれ折にふれての川柳は、わかりかけるほど、またわからないことばかり、

○たすねゆく句の深淵の底知れず 英子
○人の世の分け行く道の果てもなく 〃

「女の子(先妻の子)も昨年嫁がせました。今までの仕事は私の人生の余分なしことの上

うでございました。貧しさはつきまといましても親子水入らず六人暮し。長男が十七歳、次男が中学一年、あいだに女の子が二人。子供に手がからず手伝ってくれるようになりしました。今日も長男とたんばへ堆肥を運びましたが、あれが背負うほど、どうしても背負えませんでした」(昭31年教授宛手記)

英子は昭和39年8月14日脳出血で死去。享年54。夫勝三が大本教信者のため、戒名は「英子昆女」

「五十余年の生涯を苦難と闘いつつ、つとめて明るく働き続けた英子。婦人会長。民生委員。青年学級講師。体協幹部。青年団参与等々各種公共方面に足跡を残し、みんなから等しく親しまれた英子。せめて還暦位いは祝わせたかった。」(夫勝三の英子弔文)

○ラウレター書かぬ息子をほかゆがり 英子
○娘の恋のすすむ七夕立ててやり 〃

この句が英子絶筆。昭和40年松江番傘は笹本英子句集「土」を刊行、序文題字は水府がその死の四日前に書いた。昭和55年完全復刻版発刊。(参考文献・「評伝笹本英子」山根臯人||松江番傘連載)

★次回は「松尾馬奮」

俳風柳多留廿六篇研究 (二十九丁)

小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
石田晋一・多田 光・南 得二

故岡田 甫

494 桜煮を重詰メにする花の宵

小野||桜煮は、蛸の足をうすく輪切りにしたのを、たれみそで煮た料理。これも桜と花と縁語で結んだ句。

多田||賛。

さくらにハ蛸も本意なおくり号 拾九三

岡田||同。

495 梅干や干瓜の邪魔其角する

小野||其角は、元禄六年六月向島稲荷社で雨乞いのため、

夕立や田を三囲の神ならば

との一句を詠み、大いに雨を降らしたという。

この事を詠んだ句で、梅干や干瓜はそれこそかんかん照りの上天気にしてこそ美味の漬け具合になるものだが、そこへ急に雨が降って来ては取り片づけるのに大騒ぎをしたことであらう。

本多||賛。

梅よほし瓜と中の郷大さわざ 二二三

多田||賛。岡田||同。

496 人の田へ水を引かせたのハ其角

小野||前句と同工異曲。我田引水はままあれど、雨乞の句によって諸人に田に水を引かせ

たのは流石其角ならではという所。

八木||賛。「我が田へ水を引く」の逆説。

石田晋||同。「人の田」は「他人の田」で、

「我田」の逆を言つたまで。

多田||同右。岡田||同。

497 金屏風ことしはどれと御手あつさ

小野||祭礼(特に神田祭、山王祭)に店頭を飾つた金屏風は、多くは借物を用いたのに対し、金屏風が幾双もあり、今年はどれにしようなどは正にお大尽である。

本多||金屏風はやはり山王祭、神田祭にたてる屏風でしょう。「御手あつさ」は、取扱い

水煙砂

黒川紫香選

熊本市 大川幸子

松三日地下足袋ずらり干してある
晩酌で明日は寒波のニュース聞く
ころがされ落葉は風のおそぶま
信頼があるから道はずせない
いいじゃない旧人類で生きるのも

今治市 野村京子

少女の瞳に童話の森は風ばかり
逢いに行くヒール小石を一つけり
ちぎり絵をとともうらやむ水中花
マリオネットの糸に罪なく切れた愛
大樹の陰で女の午後をもてあまし

佐賀県 寺中三枝子

雪降れば地酒を提げた友が来る
井の中の蛙でひとり言ばかり
おしゃれして少しわがまましたい妻
ふたたびの愛へ素直に鈴を振る
愛人ごっこ哀しおとなのゲームかも

熊本市 永田俊子

その溝を越えたらと思う夢ひとつ
コーヒーをブラックで飲み議論好き
言い負けてよかった炬燵が暖かい
美しい雪が足もと狂わせる
意味のない笑いが恐いふところ手

八尾市 高杉千歩

絵具皿妖精たちがチイパッパ
年越しの豆何遍も数えてる
平凡という幸福を筆にのせ
内輪もめ聞いてしまった袋帯
一喜一憂生きながらえて葉包紙

藤井寺市 赤木和子

疑えば際限もなし冬の景
冬に咲く花に拍手を贈らんか
阿修羅の相をかくす鏡を遠ざける
天に星地に人間のエゴイズム
そしてここも羽根を休める場所でない

尼崎市 田中晴子

オムレツをこがす癖もつフライパン

重宝な男で本音掴めない

見ぬふりで力不足の身を悔む

逆境に人のなさけのあり余る

消し忘れた過去にときどき夢で会う

熊本市 宇野昭代

後添いの若さに少しわだかまり

旅に出てやさしい顔になっている

背もたれがはずれてどんでん返し食う

どうとんでみても大地に帰る足

メンバーが気になる旅に送り出し

堺市 桜沢あかり

冬苺過保護で味が物足らぬ

間違ひ電話一方的に通り返し

図書館で手垢のついた本を読む

見逃した特徴を知らずアナウンス

莫迦にした一円玉に救われる

岡山県 黒住美穂子

さからわぬ微笑み女の保身術

何事も人におくれて爪を噛む

伏せ文字で内緒日記にかいておく

小指親指みな恵まれて指鳴らす

父無口咳の一つが物を言い

久留米市 鶴久 百万両
神に背く男ありけり女体恋う

ワイングラスの底に元気な亡母が笑む

手みやげが効き迷惑な顔をせぬ

吹けば飛ぶ歩の根性を学ぶべし

終列車着くたび亡父の影を追う

長岡京市 木本如洲

森の小径に世間を知らぬ鬼がいる

お喋りの柵から転げ洋酒瓶

海鳴りが遠く聞こえる鉄の街

結論をとことん避ける春の椅子

気まぐれな言葉は明日を軽く見る

竹原市 信本博子

メモ一枚捨てないでいる彼の文字

不燃焼体に悪い燃え尽きろ

飲ませたい飲ませたくないコップ酒

浮雲よ夕焼け小焼けまたあした

狸の眼あれで騙せるはずがない

和歌山市 桜井千秀

依怙地さで今浦島に甘んじる

ゴミ捨てる場所にされてる吹きだまり

体裁を保つ弱さで出おくれる

見通しがよくて覚悟がすぐできる

先輩が向き替え時々通せんぼ

大阪市 清水康恵

約束が枯葉のリズムで散っていく

川底の石の話も聞いてやろう
三面鏡つくり笑いと知っている

冬の海一羽の鳥の死に出逢う
流れには乗れなくなつた古時計

名古屋市 藤井高子

伝説の中で炎えてる雪女

情一つ断つてうなじの風凍る

口うらに嘘が少うし透けて出る

グウ・チョコキ・パー パーばかり出してゐる無策

二匹目のどじょうを詐欺師予約させ

羽曳野市 吉川寿美

神を捜し仏たずねてゐる樹海

風葬や語りつくせぬ疵のあと

戒律のあくまで雪は白くして

いくばくの情にとける傘の雪

雪まろげ去り行く人の名は追わず

兵庫県 脇田米朝

泥鰌より蛭がおもろい安来節

ただそれだけでよい二人の散歩道

やさ男ノックアウトがしたくなる

ユーモアで部屋の空気を入れかえる

張り替えのきかぬ障子が耳でなる

大阪市 上田柳影

何事も約束事と母泣かず

燃えてゐる女ことさら美しい

三浪は許されませぬ夜食盛る

銀杏もう冬眠に入る御堂筋
パレットの上にも並ぶ冬の色

喪の家を包むは霧の思いやり
冬の部屋紫の花うなだれる
新人類何に反応するのやら
裏切りののろしに非ず落葉焚き
葬儀屋の前で老後の話など

高槻市 笠嶋 恵美子

鼻すじが亡夫に似ているモンタージュ
ローソクをともしせば夫が近くなる
胸の中4Bで亡夫描いてはる
以心伝心きつと向こうも嫌てはる
八方美人の決して離さぬヤジロペー

高槻市 河瀬 芳子

柚子の実が目立ちはじめて牡蠣ほしや
カーズらりうちは社員がみな若い
空んじた勅語でウマがあう屋台
酔うたのかみんな美人に見えて来た
翳雲揚げば柿がまだ残り

熊本県 高野 宵草

病院のことばで札状書いてゐる
手術室の風が必死になつてゐる
麻醉からさめると太陽の匂い
手術無事終る妻と目を交わす
手術十日人間らしい顔になる

西宮市 紀市 郁 栄

宿直に鍋やきうどん運ばれる

尼崎市 丹下 玉子

毒消しに仁丹一粒飲んでおく
牛売って一家会話の無い夕餉
掃除する仕草が消えぬ嫁の忌に

滋賀県 安田 志津

ポインセチア真赤にもえて忌が明ける
立てつづけの別れにゆれた年もゆく
賀状こぬ淋しい初春への煮め炊き
ゆきずりの人でも恋し一人旅

八尾市 西尾 美与

五十年添うて空気の様な人
バスツアー鳥取砂丘に人を蒔く
風邪らしい俺は寝るぞと玉子酒
ロソクにゆれて美人の易者居る

尼崎市 山田 保蔵

心齋橋ひとり歩いてあほらしい
へソクリをねらう電話にねばれる
厚化粧のおばはんタコヤキ食べてはる
押し売りにねばられている落し蓋

広島市 流 奈美子

一期一会今日も余情を持ち帰る
熱カンで祖父しあわせの顔になり
もみ消したタバコがノーと言ふ返事
ふり向けば私の影だけついてくる

倉敷市 田辺 炎六

生き伸びて少し気だるいカンナ屑
妻の留守ひとりぼっちの音で暮れ

秋深し秋刀魚の腸まで焦がし
暁天の窓に旅愁が覗く宿

岡山県 矢内 寿恵子

美しく老ゆる願いの十七字
煩惱を預けて高野の山降りる
格別の事なき年で福とする
ストレスを溜めて亡夫に逢いにゆく

熊本市 黒田 緑

フィクションの隙間でほっと息をつき
山峡の分校の子の標準語
デジタルに過去も未来もない数字
お茶漬けの味をグルメの舌が褒め

吹田市 井上 照子

想う夜のヒーヒー眠り妨げる
過去ひとつ告白できる場所がない
倅せが木の下にある福寿草
白無垢を着たのに他の色を恋う

京都市 松川 芳子

幸福と想う母娘の口喧嘩
老いの背を気にして歩幅はかどらず
小走りにおちやこ師走の祇園町
先走りばかりしているお人好し

竹原市 石原 淑子

冬の陽に夢を見ましたほんのりと
山茶花に北風小僧が目くばせる
恋人のまんま離れて夢夫婦

子沢山日々好日に多忙なり

尼崎市 千金良 みち子

ヨロヨロとゴキブリが出る寒い朝
移り香を惜しみて枕干さずおく
若作りしてもトクホン匂つて来

六十で身の振り方を考える

鳥取県 土橋 はるお

跳んで火に入って男にしてみらう

石橋を叩く論者がいて困る

旅先で妻に手紙を書くロマン

此の頃は俵に入れた米がない

兵庫県 東浦 砥代

愛のあるはなしに熱い茶をいれる
旅に出る荷をときめきの手で結ぶ

おだても鏡は歳を隠さない

実年の夜をコケンが目をつむる

佐賀市 古川 一徳

小心の鬼で逃げ場が見当らぬ

猫の爪染めておんなの気が重い

護符一つ抱いて決心固くなる

自分史に女気はない三八銃

守口市 森川 まさお

ガイドブックどの地方にも小京都
病む妻の抜毛をそつとつまみあげ

鍋物にするのが惜しい葱の白

浮浪者が銀杏の枯葉かき集め

トップには一目置いている教師

告白が演技でないか確かめる

忘年会妻の予定もぎつしりと

あんばんが好きと言うので気を許す

守口市 結城 君子
豊中市 辻川 慶子

朝刊のちらしの重さ十二月
木枯しに石焼き芋の声を聞く

時どきは相づちほしい冬の夜

新調はセーターだけのお正月

西宮市 松本 一郎

閑居してからストレスをためている

古希迎え女の演技まだ続く

末っ子に最後の期待かけている

みちのくにやつと果した妻と旅

熊本市 北川 一進

領収証取って良かった身の証し

半分はベッドで区切る2DK

一枚の辞令家族を二分する

綻びを見つけ女の針と糸

尼崎市 鈴木 良征

誘惑に負けて戯曲を描き変える

日が暮れて鬼が帰ったかくれんぼ

口臭を消して挽歌を口ずさむ

愚痴に明け愚痴に昏れゆく老夫婦

東子市 小山 悠泉

年金になつても減らぬ父の酒

村おこし祭とことん派手にする

過去帳に一度は載つた生き残り

心まで老いたくはない詩集読む

貝塚市 池田 寿美子

野水仙の小径をゆつくり語り行く

方程式では解けぬ心の中

蟹罐のバーゲンに並び娘に送る

善人も悪人もたからくじの列

静岡市 澤田 きん

それなりに恵まれて居て吐く不満

何時からか小さい反抗する幼児

独り部屋読書へ不意の蜘蛛の客

露天風呂恥じらう肌を山に見せ

京都府 木村 たけし

島原の太夫が好きな鏡餅

年金の生活を守つて十二月

風向きが午後から変わる街歩く

夕焼けの街で明日の職思ふ

兵庫県 奥野 テル

頑に菊と対話の冬仕度

生きて行く戦にちびた靴をはく

背の丸み束ねた髪も小さい老母

木守柿おとぎ話の種を抱く

米子市 足立 由美子

子の心わたしの色で染めている

少しだけ私の意見のべておく

雪の日のコーヒー茶碗温める

発芽まで藁の布団かけてやる

鳥取県 黒田 くに子

泣いている子へ柿一つ取つてやる

徹夜の机ラーメン鉢が置いてある

空想はたのし美人になつてゐる

木枯しが吹いて枯野に闇がくる

愛媛県 八塚 三五島

方言の温さ友情疑わず

辞書に無い言葉に温いもの貰う

どちらかがバランスとつてゐる二人

無人駅別れ言葉を聞いている

寝屋川市 太田 藍子

年明けて昨日と違うおらが町

晴れた日はふとん干したい共稼ぎ

鍵かける程でもないが宝物

デパートの顔になつてゐるアルバイト

静岡市 片平 静代

負け戦だったが心晴れて居る

手を叩く味方のような顔でゐる

湯上りの油断へ月に覗かれる

百人一首今年は二人でやりますか

静岡市 北村 かず

補聴器をかければ雑音良く聞え

川柳会仲良しでいてみんな敵

指切りの孫へ玩具は桁違い
絵馬の数多くて神ももてあまし

旭川市 朝倉大柏

持ち替えてまだ言い訳の電話口
その辺が限界と知る捨て台詞

鶴千羽点滴の音見つめてる

ある日ふと男としての子と対話

弘前市 真喜内 實

出稼ぎを洗る背雪にたたかれる

妻が背を流すと雪になるだろう

新しいブランを練った掘炬燵

津軽衆らしさを雪の底で練る

蓑虫も今夜の雨は冷たから

竹原市 岩本笑子

一日が始まる看護婦の笑顔から

今日も晴れ車椅子も外に出る

両の手の温もり我が家へ一歩二歩

尼崎市 森安夢之助

老母一人雪も深からる年の暮れ

忘れた頃に敵の矢が飛んで来る

婆さんに一本とられた物忘れ

ことづけが一つポケットへ残っていた

鳥取県 津村八重子

鳥取県 津村八重子

仏心でさとせば鬼ももろくなり

子沢山夫婦そろってのんき者

霜の夜星もちかちかふるえてる

計算に早い男でうとまれる

泉佐野市 大工静子

甘酒に未練残した瑞宝寺

秋深む人雲の上にあり山の宿

山壁にくまなくはえて寒椿

しゃがみ込み初芽ピンセットでつむ

尼崎市 吉永伊三郎

最初の子動くお腹で式を挙げ

円満に話がついて行くドラマ

母喋り父は黙って家を建て

独り言聞くとはなしに風媒花

新発田市 上鈴木春枝

本好きな母にとられた新刊書

見送ってぼつんと私だけの靴

念入りに手料理作る雨の午後

海南市 三宅保

戒名に父の気骨が消えている

寄る大樹落葉を拾うことばかり

隙間風防いで世間が遠くなる

岡山県 千原理恵

女の冬白菜漬けもリズミカル

南天の赤冬の陽ざしに照れている

ひよっとこの面でおどけている悲哀

鳥根県 小田川智重子

ロボットの身の上ばなしを聞ける日も

暖房がきき過ぎました鉢の梅

肝心な時に夫はいてくれず

和歌山市

森

茜

追伸を消してきっぱり封をとじ

自画像へ許す言葉がふえていく
ごめんなさいすんなり言葉でてこない

西宮市

秋元 てる

夢散歩しゃべるのは何時も私だけ

夢散歩落葉のきれいな道を選ぶ

二人共自立していて仲がよい

十和田市

阿部 進

隙のない上役という肩のこり

だまされた振りして相槌打っている

聞き捨てのできない寝言聞かせられ

和歌山市

田中 輝子

手内職しながら聞いてくれた愚痴

少し肥り煮物が甘く成ってくる

十二月区切りをつけた事ひとつ

広島県

藤解 静風

指文字がガラスの窓に泣いている

葱刻む女の背なにかたい意地

集会所隅の方から埋まって来

河内長野市

大西 文次

老妻の言うことご無理ごもつとも

そもそものお会い古びた珈琲館

そそわを郵便受けに気づかれる

尼崎市

的場 十四郎

手造りと思えぬ妻のチラシ寿司

新品の靴ずれたむ旅の空

宅配が急いで師走の風となる

兵庫県

森脇 和子

おしゃべりの好きなインコと馬が合い

おにぎりの好きな子丸いほっぺして

もう少し待てば来そうな福の神

八尾市

鷺見 章

南天の眼つぶらに雪兎

単身に馴れ鼻唄の洗濯機

喪の家を残して路地の小暗がり

大阪市

今西 静子

目をとじて吊皮の話聞いている

自画像は少し明るい彩にする

雪しんしん二月の夢は北の国

唐津市

浜本 ちよ

きまぐれな風に身を焼く一途な葉

枯葉いま風にすべてを任せ切る

秋を着て出かけもせせずに秋が過ぎ

唐津市

相葉 あき

生き字引段々インク薄くなり

濡れ事を他人の前でする芝居

ジヨロ持った鬼を見付ける気象台

高槻市

芦田 静江

落葉焚き残照ぬくい雲に乗る

大根焚き湯気に満ち足る百日紅

楼門を登らせ夕陽ショー見せる

鳥取県 太田幸枝

木枯しに押されて街を走ってる

セールのつらさ凌いだ脚庇う

愛ゆえに女の性は狂い出し

岡山県 後安ふさえ

初孫の家中騒ぐ誕生餅

底抜けに明るい母でお人よし

妻となる人を誘ってみかん狩

岡山県 牧野秀香

吾が町は無災過疎など言の外

探しても出て来ぬ私の知慧袋

三億円強奪犯人超人級

岡山県 松本元江

上弦の月も鋭き冬の天

種火残り火囲うて春の風を待つ

抱かれて泣きたし今宵の一人部屋

尼崎市 尾宮弘治

小さくても母には似合うイヤリング

故郷を守って母がさんま焼く

落葉焼く僧の手を借り写真撮る

鳥取県 山根八重

再会へちよっぴり未練よみがえる

好きだった人とつないだ掌の温み

一日の幸念仏をくり返す

大阪市 亀井円女

焙じ茶でひなたぼこする年になり

チューハイを覚え独りの夜も楽し

泥遊びさせてくれない今のママ

鳥取県 田村きみ子

産声に大黒柱しやんとする

ライバルの枯野を覗くメガネ買う

雪おんな吹雪の夜は紅をさす

青森県 福士トキ

十円ではと奥の院声がする

目覚しに尻叩かれるみじめさよ

祝日の街を霊柩車が通る

唐津市 山口高明

防人の血筋を引いて鯨追い

見舞客帰ればむつくり起き上がり

片言に通訳要らぬ母である

茨木市 堀良江

犬連れた人と犬好き立ち話

まだ達者です坂道で二人抜き

几帳面にとうふ浮いてるおみおつけ

広島県 田村新造

雪のシベリヤ

日本へ帰れる船に夢で乗る

吹雪く日はノルマ達せず日が暮れる

気がつけばまだ生きていた鉄格子

堺市 宮本かりん

点滴の窓から作業衣を眺め

足並を揃えて不安消している
還暦へ何か相談してゐる子等

岡山県 清水 悠貴女

掌に載せる小さい善意の赤い羽

言い足りぬ言葉へ冷たい風となる

ひまのない幸せ趣味の夜が更ける

大阪市 井上 白峰

水に浮く一円玉にも血が通う

蹟いて沈黙続く日の焦り

旧友の訃報に靴の重さ知る

箕面市 椎江 清芳

禁煙の手持無沙汰に眼鏡拭き

世話やいて母すき焼に手をつけず

世は無情昨日の覇者の晒し首

静岡市 三浦 つね

電柱の支線を借りるへチマ蔓

秋祭り神社の森が浮き上る

だぶだぶも流行なればそれでよし

西宮市 上嶋 ふさ子

枯葉散る師走の町もあわたし

クリスマス子はプレゼント待っている

日曜も母はやっぱりに先起き

大阪市 川原 章久

落書の巧みな諷刺が効いている

目覚めたら沖見る漁夫の懐手

貼り変えた襖しみじみ十二月

今治市 月原 つくし

冬のバラくれる男の手の温味

人形と語る日多く恋進む

人赦すそして私も赦される

大阪市 横山 為子

七転び次の八起きで楽隠居

背かれて泣く立膝に風しみる

野良猫のまつわりついた温い家

富田林市 大澤 三四子

もし愛の告白聞けば笑うでしょう

そっと咲く花の中にも心あり

あの人の胸に挿したいバラの花

静岡市 大村 美智恵

実年は出歩きたくない暮の街

げんこつの飛ぶ父であり恐かった

船酔いが大島遠く感じさせ

鳥取県 西川 和子

うるさくて達磨に足が欲しくなる

凧の糸切れて世の中見え始め

くじ引きに弱い私の当りくじ

島根県 森山 英子

立ちのいた駅前広場の広さかな

役付けて定年退職強いられる

恩給を押しただいて供花をひな買ひ

吹田市 山田里子

ヘッドホーン母の小言ヘリズムとり

太りたいやせたい人にあるページ

朝の霧雲海にして大阪城

鳥取県 鈴木ふみ子

昔話をつなぎ合せて呆けはじめ

山削りまたまた団地出来ました

経験と育児書つなぎすくすくと

岡山県 平田たけよ

もう春だ少しネクタイ派手にする

新しい言葉にとまどう老いの耳

正月をあれこれ里の宅急便

尼崎市 木下義嗣

約束を破る男に愛想つき

峠から見れば確かな里の家

適齢期見合する度又迷う

唐津市 筒井朴竜

ひそひそと内証ばなしか他人払い

秘密裡にするから腹を探られる

沖釣りの偽装見破る監視船

静岡市 安本孝平

カルタ会祖母は暗記でみな拾い

引き出しの奥に青春生きている

野獣にもなれず内気で尻尾ふる

岡山県 池田半仙

近道を急ぎ交通止めにあう

上弦の月は心も和ませる

友見舞う我が倅せを噛みしめる

出雲市 久谷まこと

すき間風ゆれる心を見逃さず

一言が過ぎて戻りの橋が無い

ポーナスの瀬ぶみさかなに氣勢あげ

静岡市 青柳金吾

波の音亀の子だつてあせります

ポーナスに吾が評定を確かめる

馴れ馴れしい捨て犬に逢い目をそらす

和歌山県 田中隆積

浜塾事件に想う

公立より私塾栄える文化の県

盲点をつかれ慌てる塾悲し

知識だけ詰めて居直るエリート生

京都市 小林英子

さすが古都鳩もお行儀よろしおす

情熱もクールに秘める京なまり

マスコット丈に涙を見せておく

岸和田市 三輪通彦

華やいだ声で娘の里帰り

政治家に嘘の手口を教えられ

肩書きがとれて気楽に生きられる

尼崎市 佐藤美代子

とうもろこしの粒に手が出ぬ義歯ばかり

雑兵で無実を信じ動じない

夜勤終えツララのひかる町を抜け

藤井寺市 福元 みのる

老人マガジンやがて出版するだろう

くゆらせば女扇子で返して

のれんから首だけ入れて満員か

米子市 川上 より子

手文庫の手紙がさわぐ季がめぐる

早々と寒梅からの招待状

隔てなく川を抱いてる母の海

泉佐野市 真崎 浪速子

パパの後紙ヒコキが追うてくる

真ん中にあるのが独りよくしゃべり

本堂の一部に僕の寄付がある

田辺市 染道 佳明

六十の手習い義父のダンス熱

還暦の義母に旅行の話など

中流の生活に食費が高高い

ロスアンゼルス市 加藤 明美

夫立て自分の株も上げる妻

伝書鳩家族のもとで羽休め

世界平和唱える裏で秘密兵器

松江市 吉田 笑子

窓開けて寝ぼけた鳩の目に出合う

火の衣ときには女着て見せる

ビルの谷風を哭かせている深夜

米子市 小村 てい子

下手な嘘ざぶとん返し猫といる

ひとり病む白い障子に片笑くぼ

傷のある茶碗の仲のいい縁

呉市 蔵重 成人

ロボットが相手弁当まざるなる

弁当を食べて子供が褒められる

どろ船にのせる味方がきつといる

河内長野市 植村 崑代

人柄が絵葉書にあり見舞われる

どの家も同じ屋根して雪の朝

靴下の穴ふと戦中を思い出し

鳥取県 久野 野草

ライバルに勝つ筋書を書いて消す

ライバルが笑いの中に刀とぐ

父の足歩けばいくさの音がする

和歌山県 山田 久子

瞳裏の想いは遙か童唄

おくやみの言葉すらすら出てこない

丁重なもてなし足がしびれだし

鳥取県 乾 喜与志

千両箱からドラマの石が転げ出る

鰯の骨も食べて御馳走様でした

竹トンボ削って孫の年玉に

今治市 渡邊 伊津志

背中見る視線も板について妻

自分との戦いきびしく病んでいる
命ある限り夢は持ち続け

真中の水おおらかに落ちる滝

大阪市 稲本 凡子

幸せな順に団地の灯が消える

愛媛県 西山 えつ美

かさかさと言たて走る落葉かな
秋の空二すじ三すじ白い雲

呉市 岡田 寿美礼

冷凍食品どっさり買って手ぬきする

巻紙で出してみたいなラブレター

清掃車帰ったあとに要るホウキ

大阪市 堀口 欣一

めでたさは天皇さまと同じ年

なつかしや御殿場あたり雪の富士

新世界舞台に桜京之介

島根県 喜島 ノブ

誤字書いて平気に出せる友がある

一片の善意に生きる今日の幸

同情の安売りはせぬ意地がある

高知市 北川 竹萌

歯車が合うて正月早過ぎる

帰る背に少し怒りの角を見せ

暗がりへ母の帰った灯が点る

島根県 坂本 雪路

縁側の日なたの夢へ冬の音

ローカル線廃止反対霧の中
不夜城のように景気のパチンコ屋

来る来ないコスモスぐらいの人を恋い
夕陽落つ犬のくさをたぐる妻

静岡市 久保 きぬ

保護色で育てて親は背かれる
無造作に言ってしまったて息をのむ

福岡市 吉川 一郎

新年号インクの香り心地よし

頼み事ノドにつまんで出て来ない

青森県 波 ただお

島根県 菅田 かつ子

花活けてくれる白衣の思いやり
唐津市 米倉 彩女

暴力で勝って心は孤独感
分量を手加減でする母の味

岡山県 福原悦子

セーターも古び私の冬深む
寒菊よ咲きたい儘に冬の陣

熊本県 鶴田謹爾

無駄なもの造って売って公害化
老婆の留守解放感と寂寥と

吹田市 西岡豊

館長のぞつくばらんに慕い寄る
まあ飲めに魂胆がある薄笑い

和歌山県 森三枝子

おみくじを結ぶ小枝を選っている
見合席娘の母がよく喋り

川西市 田中喜俊

藪医者と言われながらも増築し
学生さん席ありがとう腰が伸び

山口県 高崎雀声

可も不可もなく定年のきてあくび
軒に柿つるされ里も冬仕度

岡山県 土居ひでの

車椅子母に押された花だより
立候補匂う土産を握らされ

出雲市 入澤寿恵

お互いの良さが分った六十路坂

大樹から最後の一片風は挽ぎ

米子市 大田みさと

食卓で夫婦茶碗が照れてます
爪を噛みやつと結論出しました

大阪市 新井川青舟

ひとひらの雪に童心とり戻し
倦怠期虫一匹に惑わされ

静岡市 杉山やす

馴れ馴れしい顔でセールス上りこみ
裏口で浮き立つ様ない話

豊中市 一瀬福一

ポケットに夫の嘘がたとある
夕立に目より濡れ出す鬼瓦

和歌山市 青枝鉄治

ご無沙汰を常に詫びてる年賀状
洋食が出てもやっぱり箸使う

岡山県 江口有一朗

人の気も知らず女の長電話
実力もあつてチャンスに巡り会え

高松市 竹川憲一

新人類のきざしを孫も見せはじめ
防波堤ここから磯というけじめ

静岡市 大石たき

選び抜き買ったセーター少し派手
窓ごしに別れを惜しむ駅ホーム

藤井寺市 菊地繁男
辻棲を合わせてあるから嘘通る
おせちには妻の好みも盛ってあり

大阪市 島路太郎

検証のすまぬ現場へ火事見舞

海荒れてひとり酒場のとまり木に

桜井市 前山美恵子

お布団にたつぷり甘える日曜日

立ち食いのうどんもてる朝の駅

出雲市 高橋きよし

縁遠い姉で妹先き嫁ぐ

母となる覚悟決った母子手帳

岡山県 伏見すみれ

残り物さらえ母さん昼とする

ペートーベンもショパンも分らぬままに老け

大阪市 喜多佐津乃

お流儀の違い淋しい鉢も有る

流木も華道の瓶になって生き

唐津市 入江崑久夫

毛氈を敷きつめたよな枯落葉

三原山アッコ泣かせのヒステリー

愛媛県 石手武

花束に気障な男の甘いメモ

世渡りのうまさ特技にして泳ぎ

八尾市 椎尾公子

うしろから目かくしの手はシャネルの5
わからない顔香水で思い出し

岡山県 戸田種子

お隣の歳暮宅配色目で見

売出しののぼり師走の風にのり

島根県 ふなつ重信

暖房にごきぶり酔って顔合す

軍団という名が笑うへボ戦争

大阪市 平井露芳

民営化赤字六つに分けてやり

兎小屋本当の兎はかごで飼

大阪市 吐田純子

通天橋和服が似合う古都の寺

子のくれた誕生祝が光る指

静岡市 中川みつ

聞き飽きた過去の話を聞いてやり

初心者車を降りて安堵する

京都市 山脇正之

車窓から見る洛北の山錦

頼り甲斐ある子になって遠く住み

大阪市 榊本落児

参観日答えて母を振りかえる

螭螂の斧振り上げたまま枯れる

新潟県 高野不二

地鎮祭まだ半分の資金繰り

円高でもうける奴は黙ってる

唐津市 浜本治幸

生きすぎて保険も満期みなとどく

泉南市 坂根流水

月並みな嫁の料理も先ずほめて
気にしない呑気な女で丈夫なり

岡山県 杉本伊久栄

せり合った座席の隣こわい人
老人と米は倉庫にいっぱいだ
寡婦の小屋から小兎が跳ねて出る

鳥取県 乾隆風

タコ上げを忘れたらしい塾通い
円高で不況のままの年の瀬か

大阪府 宮下とし

だまされてやる見えずいた嘘なのに
横柄な電話机に足あげて

八戸市 島田昭治

宿題へおそい父待つ子供部屋
息のあるうちに勲章欲しかった

八尾市 小谷千年

戴帽式ナースへ決意改まる
会心の相撲をとれた負けつぶり

和歌山県 北山凡太

約束の時間に行けない二日酔い
連休が終れば財布かるくなる

静岡市 柳沢たま

死んで尚整列す兵の墓
気がかりを鼻唄に替え湯にひたる

八尾市 松下蕉露

八十路過ぎ別に可もなし不可もなし
お正月羽根つく孫の写真撮り

米子市 木村富美子

奈良へ来た地下鉄地価を上げただけ
一枚の写真に託す孤児の夢

奈良市 井上大

風船のふくれた夢が風になる
着ぶくれているは若さが寄りつかぬ

東大阪府 大平太郎

つるし柿今が食べ頃そつと手を
参道の落葉掃く老いたのしそ

岡山県 富坂志重

父に似ず母似なれども父思い
ポーナスが意外に軽く重い足

奈良県 和田萬里

彼女を奪う気もあつた青春
好き好きに生きて夫婦の和

静岡市 丹羽定次

売り言葉買わずに笑顔をお返しし
棟上げて木の香もうれし祝い酒

橿原市 西本保夫

会釈する奥さんまでが好きになる
御苦勞さんそのひと言で解散す

大阪市 富岡温子

言い訳が通りやれやれ午前様
銀婚で居直り互いに丸くなり
母の忌に仏壇整理父の遺書

新宮市 船越正

片仮名が多くて意味を取り違え
パーゲンのつかみ合いでふと出会い

島根県 岩田三和

一コずつ記念の金貨孫達に
おたかさん熟女も真似るイヤリング

大阪市 渡部トキワ

新しく人間産もうイザナミよ

式のあと羽織はかまで寝てしまふ

島根県 園山世似

冬の蚊のテレビ画面に暖をと
冬至来て南瓜柚子湯亡母恋し

奈良県 山村有佳

馬鹿らしくなったか金貨も売れ残り

桜島も負けじと人家へ岩を投げ

岡山県 後安江山

新聞配達小走りの音霜の朝
北の鳥着いて宍道湖にぎやかに

島根県 児玉幸子

夢を買うカードに夢をこわされる

友が来て甘酒美味し寒い夜

豊中市 三宅つえ子

パートでもやっぱり気になるポーナス日

豊中市 額田明吉

九十一歳未だ青春を謳歌する

したたかさたりずに母は早く逝き

今治市 山田宝保

アイデアの玖磨川下りこたつ舟
ひと時雨峰より峰の衣替え

大阪市 朝田晃世

父ちゃんの代理も出来て客の膳

届け出る前に数える拾いもの

島根県 今川三津江

棟梁が祝う銚子は小さく見え
山菜のグルメセットで三回忌

熊本県 立道善太郎

運不運あって世の中面白

椿の実あてもないのに拾っている

大阪市 松岡久留美

◆ジュニアの部
電話するこのころはくが長電話
たこ上げはうらの畑を利用する

枚方市 二宮正彦

落葉舞う晩秋の北御堂

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

西田 柳宏子

嬉し気に読む恋文に誤字当字

稲田豊作

字を喧しく言われた戦中派の私達からは何とも歯痒いことですが、当世新人類気質な平気で啞然とするような誤字、当字を書き、一方読む方も器用に読んでいます。

新人類人が笑わぬ時笑い

有働芳仙

ここにも新人類と言われる若人達の一面とどうか、常識の違いみたいなものがあるように思われる。

あがり目さがり目悪いことならずぐ覚え

佐藤藤子

その悪いことを教えているのはあなたです。よ、守り導くのもあなたです。

その先は言わぬ話に尾ひれつけ

田中隆二

中途半端に喋るから、余計話に尾鰭がついて、だんだん話が大きく真実から外れて行き

ますよ。怖い怖い…。

二人三脚妻のサインについて行き

行吉照路

円満な家庭、倅せな老夫婦の姿が浮び上ります。

菊花絢爛亡夫ひよっこり出て来そう

松本文子

折に触れ亡夫を想い出す夫婦愛…。しみじみ人の心を打ちます。

落ちこぼれどぐりそのまま根を下ろし

小砂 白汀

落ちこぼれには落ちこぼれの意地がある。零からの出発みんな味方に見えてくる

堀端 三男

危い、危い…そんな温かい周囲許りではありません。心を引き締めてからねば。

企業誘致あわだち草が待っている

石川 侃流洞

企業誘致…：仲々帯に短し褌に長し、誘致する側からも、誘致に進出しようとする側にも。そして徒らに造成された予定地は空しくあわだち草が一面に生え揃って、恰も進出企業を招いているようにも見える。

境界線モグラの知ったことでないし

安平次 弘道

隣地とのブロック塀が、ブロック半分はみ出していると血相変えて揉めている境界、何かある毎に境界明示や、それに立会い、等々

せち辛い人間社会をあざ笑う一句。

円高のマイナス許り声高に

増田 次章

都合よいことは素知らぬ顔でいる世の中。根気よく煮つめて亡母の味が生き

堀江 芳子

亡母の味が生きてくるまでの歴史が偲ばれます。

万灯を点けても闇がまだ消せぬ

林 荒介

禪の境地を垣間見る思いがします。万灯会の行事、明るいのは灯笼の廻りのほん一部分だけ、周囲は夜のとはりに閉ざされた暗さ、まして人の心の闇路は果してどんな灯が消してくれるのでしょうか。

ケチくさい亀にかまわずうさぎ獲る

安藤 寿美子

今年も沢山頂いたお年賀状の句に出る兎はどれも皆、亀に負けない兎、眠らない兎、ひと休みしない兎、愛される兎、可愛い兎、等々優等生ばかりでした。それ以上に土根性をもった超優等生の兎を拝見して脱帽…。

話は変わりますが、土居耕花氏の十二月号に載った虫六句、一月号の草花六句、いずれもたのしく読ませてもらいました。悟りにも似た川柳眼をもってみた自然との語りが見える。最後に悲しいことですが、これが遺句になった岩田美代さんの句を再掲してお別れとします。

プライドを気にする花で実らない

もらい泣き上手なハンカチ落ちている

(新年特集私の一句より)

そのうちに笑い袋も怒るだろ

合掌

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 61年 9月号

至 61年 12月号

路郎賞候補作品

正本水客

低い腰一本背負いでくる気かも 有働 芳仙
 鎧師の心の底にある平和 春城 武庫坊
 悪友という名で男信じられ 矢野 佳雲
 天国があつたら何か落ちるだろ 土居 耕花
 この夫に草書のかすれがちと欲しい
 惚気にもならん別れた人の事 山川 杜的
 他人だからとても理解がありそつで
 話しても分らぬ奴と思うて呑み 春城 年代
 旅帰り先ず仏だんの花を変え 有働 芳仙
 残り香を大事に座布団裏返す 高橋 千万子
 俺が来た道だ今から引き返せ 松川 杜的
 来年も生きるつもり電話番号 野田 素身郎
 高杉 鬼遊

母出好きあの世に行つて帰らない

北川 悟郎

霊柩車まだ曲がらずについて来る

田中 叶

仏壇の鉦を叩いて留守にする

中田 白李

野村 太茂津

低い腰一本背負いでくる気かも 有働 芳仙
 授乳するおんなの隙は見逃そう 林 はつ絵
 赤ちゃんの意見は聞かぬ紙おむつ 赤ら

玉置 重人

叱られてみたくて軽い嘘をつく

榎谷 寿馬

雑音も聞こえぬ部屋で落ちつかぬ

堀端 三男

休んでる仏を寺が来て起こす

土居 耕花

長男にもうかなわなから寝るぞ

小島 蘭香

生きてゆく痛みの針は受け入れる

牛尾 緑良

本当のやさしき語気が荒くなる 後藤 正子
 この夫に草書のかすれがちと欲しい

松川 杜的

芋虫に毛虫がとも偉く見え 谷垣 史好

函数を開き疑い深くなる 小西 雄々

他人だからとても理解がありそつで 春城 年代

残り火よ燃えて火となれ灰となれ 江城 修史

旅に出て古いわたしに手を振ろう 西山 幸

たいせつな余白へ好きな花を描く 林 はつ絵

紙おむつ小さなリュックでしよつてくる 安藤 寿美子

帰りにはいづもやへ寄る墓詣り 田形 美緒

暑中見舞十枚書いて昼にする 川崎 秋女

黒川 紫香

混んでいる店でうどんを待っている

遠山 可住

公園で貧乏ゆすりをして戻り
林野 麴光

朝顔も私も朝のうち元氣
宮崎シマ子

くどき方下手だったのでついて来た
西口いわゑ

大臣となれば寝言も慎重に
谷垣 史好

簾巻くことしも寂しい夏でした
前川千賀子

もしも私を疑う目に出合い
高橋千房子

先生の日記がみたい夏休み
小池しげお

遠い日に産んだ覚えのある女
春城 年代

村祭りこんな居った若い衆
坂口 公子

のびちぢみしながら影が離れない
沢田 千春

西田 柳宏子

左遷から成歩になって社に帰り

芋虫に毛虫がとても偉く見え
谷垣 史好

半分は亡夫に聞かす独り言
赤川 菊野

赤福をみながら提げず旅終る
奥山美智子

叱られてみたくて軽い嘘をつく
櫻谷 寿馬

正確に時計が合つて腹がたち
江城 修史

愚痴一つ聞いたことない父の汗
吐田 公一

弱虫で昨日と許り対話する
岩田 美代

一人では何も出来ない鬼が居る
松岡 三吉

テレホンカードあなたに恋をしています
中原みさ子

子の部屋があるのに父の部屋がない

田中 隆二

コオロギよお前も一句考えろ

土居 耕花

プライドが少しあるので靴磨く
玉置 重人

ジャンケンに勝つてお腹が空いてきた
松本はるみ

コスモスの主義を持たないにぎやかさ
藤原 鈴江

橋高 薫風

低い腰一本背負いでくる気かも

有働 芳仙

靴下も夫婦も片方見当らず
西森 花村

腹郁とマスクメロンの傷の跡
小砂 白汀

街につくと灰色になる海の風
宮崎シマ子

降りやめばもう父の手に傘がない
石垣 花子

闇無限眠くなる時寝ればいい
堀江 正朗

焼酎もオールドバーもくだを巻く
中川 幸一

風鈴が鳴り靈魂が通り抜け
田中 叶

誓詞読む終身刑と書いてある
小島 蘭幸

感情を押える月の蒼さなり
岩田 美代

病む女のグイヤがいたく輝やけり
西口いわゑ

辞職より罷免の方が箔が付き
月原 宵明

バラ活けてひとりほのほのして居ます
内芝登志代

善人に化けて疲れの出た狸
政岡日枝子

雪が積む礼儀正しく美しく
藤原 鈴江

川柳塔賞候補作品

小出 智子

指切りの指から抜けて来た噂
河瀬 芳子

何事もなかったように猫が居る
堀 いくの

夾竹桃あれやこれやの物語り
池田寿美子

定住と決めると風もあたたかし
上田 柳影

人の世の長し短かしどっこいしょ
藤井 高子

絵ばかりを描いてと亡母に叱られる
高杉 千歩

早咲きも遅咲きもある三姉妹
矢倉 五月

こわいのは他人頼れるのも他人
田辺 灸六

仏の瞳を涼しく思う夏の雷
木村たけし

露草のつゆのなさを真に受けて
小村てい子

助手席の妻は安心して眠り
大西 文次

つながれて連帯感のない真珠
赤木 和子

みの虫も事情があつてぶらさがる
森安夢之助

宿帳に弘前と書き親しまれ
斎藤 劔

野の花を束ねて心定まりぬ
黒住美穂子

割り切れぬ世を割り切った顔でいる
黒田 緑

饅頭屋の主人のことを憶う秋
堀口 欣一

高杉 鬼遊

ラストダンス絵になるはずの靴がぬげ

野村 京子

線香の煙に蠅も目をこすり

菅田かつ子

まっすぐに見たいものあり瞳を洗つ

福田 札子

新しい畳に古い妻と寝る

西川 和子

何事もなかったように猫が居る

堀 いくの

悪い人らしい話がしてみたい

赤木 和子

ポーナスを待っていたよに雨が漏り

矢倉 五月

デパートを吊り上げているアドバルーン

福田あや子

自販機の疑い深く落ちる音

笠嶋惠美子

お月さんむすめも他家の人になる

小村てい子

母ちゃんは留守父ちゃんは昼寝です

八塚三五島

省略化かかしは目玉だけにされ

宮本かりん

こわいのは他人頼れるのも他人

田辺 灸六

絵ばかりを描いてと亡母に叱られる

高杉 千歩

省略化かかしは目玉だけにされ 宮本かりん
仏壇の花しか買わぬようになり 小畑よし子
磨く歯が少なくなつたねとブラシ 田辺 灸六
もやもやをべラングいっぱい干しました 小田川智重子

河内天笑

割勘の連れはトイレに行つたまま

田中八太郎

裏切つた女に会釈してしまひ

木本 如洲

鶴を折る母の心が知りたくて

清水 康恵

古きこと覚え昨日をよく忘れ

松本 一郎

カブセルに入れてとつとく泡銭

上田 柳影

端正な歯科医の鼻が気にかかり

山崎 君子

長生きを疎まれている秋の蠅

信本 博子

いつもより大きく思う初日の出

松本 元江

百発の花火へ空が破れそう

土居ひでの

マイペース今日をゆつくり使います

植村 喜代

プーメランエデンの園へ行つたまま

寺中三枝子

ねぎ坊主堂に入つたる貌でいる

浜本 ちよ

りハビロへまいまい虫の小さな輪

乾 隆風

日曜日お金の話はよしませう

笠松 高子

字足らずを埋めるやさしい送りがな

桜沢あかり

賽銭の音だけ聞いた仏さま

森安夢之助

人が集まるとピラミッドができる

赤木 和子

ラストダンス絵になるはずの靴がぬげ

野村 京子

お茶漬けは向いどつして食べるもの

栗谷 春子

谷垣史好

世渡りが下手で夜店の本を買う

木本 如洲

何事もなかったように猫が居る

堀 いくの

秋の夜を岡本綺堂ものがたり

堀口 欣一

自信過剰となりの毬が来て弾む

福田あや子

人の世の長し短かきどつこいしよ

藤井 高子

微笑めばほほ笑みかえず絵の女

清水悠貴女

消しゴムを丸く使つて失語症

田中 晴子

折鶴を千枚折つてから叛く

木村たけし

有為転変今日も無策の靴をはく

吉川 寿美

指切りの指から抜けて来た噂

河瀬 芳子

背伸びする足をねらっている吹き矢

永田 俊子

手品師とおんなじ帽子買って来る

大西 文次

企みの行方を追えばあわだち草

高杉 千歩

坂みちの下りに冬の地図がある

木村たけし

砂時計そんなに慌てることはない

山田 葉子

ぬるま湯に溺れてならぬ母の辞書

東浦 砥代

毛糸解くこわれた記憶からませて

小林てい子

一日を詩人となりし空の青

小西 小雪

花道へ転がる父と母の毬

清水 康恵

ただひとりふるさとほよしただひとり

堀口 欣一

板尾岳人

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

小島 蘭 幸

人恋しひとりで渡る歩道橋

清水 康 恵

地上からいつも見馴れた風景も、少し高い所に立つと全く違った風景に見えたりする。私は、ハッとすく程美しい夕焼けを、大阪の歩道橋から見たことがある。黄昏の歩道橋をひとり渡っていると、一瞬、エレベーターの箱の中になった一人閉じ込められているような、とても不安な気持ちになるのだ。間引かれる前にとっかと根を張ろう

赤木 和 子

この句のしたたかさが好きだ。営業課などに勤務すると、成績が数字にすぐ表われるので大変だ。管理者も心得ているもので、全体の業績が良いと何も言わないのだが、少し悪くなると、「自分に向いてないと思う者は去れ」ということになる。適材適所に人員を配置するのも管理能力の一つであり、一枚の辞令に情は無用なのだ。

いくさ果ててお子様ランチに旗が立つ

藤井 高 子

日曜日のデパートの食堂は、家族連れが多く、にぎやかだ。一つのテーブルに、若い夫婦と、子供が二人座っている。ちっちゃな子は、たいていお子様ランチを注文する。食べるといふより景品の玩具やお菓子が目当てなのだ。日の丸の小さな旗をちよこんと立てたお子様ランチを、拍手で迎えたりもする——平和である。いくさ果ててとしたところ作者的感慨がある。

ポットからコーヒーが出る新世帯

宇野 昭 代

ポットからお湯ではなく、コーヒーが出たのが微笑ましい。明るい若いカップルの未来に幸あれ。

正体を見せぬふたつのペンネーム

舟 渡 杏 花

ジキルとハイドではないけれど、人間誰しも善と悪の両極端を持っているものだ。ふたつのペンネームを使い分ける——さぞかし痛快なことだと思ふ。

波風を立てて来ている赤い靴

児 玉 歌 子

なにか重大な事が始まるかも知れない。ひよつとして刃物沙汰?……しかし、どことなくふんわりとしているのは、「赤い靴」のせいだろう。

ひとつのこととことんやって路地住まい

桜 井 千 秀

ひとつの事が何であれ、とことんやれる人

は幸福だと思ふ。個性派人間が随分少なくなった現在、ほとんどの人達が妥協妥協の人生を過ごすことになる。それでも、自分の城を持つことは大変なことだ。「ひとつの事のために、家や土地を手離した」という話は、最近では全く耳にしなくなった。

立ち読みの足から冬が這い上る

吉川 寿 美

近頃は、大駐車場を持った冷暖房完備の大きな本屋があちこちに出ていて、立ち読みも皆な堂々とやっている。デパートの中の本屋もそうだが、防犯にはかなり神経を使っているが、立ち読みにはいたって大らかである。もつとも、立ち読み防止にビニール袋をかぶせて、味も素気もないところもあるが……。この作品は、街角の小さな本屋であろう。「足から冬が這い上る」という表現が決まっています、状況や時間の経過、立ち読みの心理をも見事に捉えている。ハタキを持った店主が、ぬつと出て来そうでもある。

泣けるだけ泣いて枕を裏返す

森 脇 和 子

十七、八歳の自殺が増えていると聞く。この作品のように、泣けるだけ泣いて「カラッ」と立ち上がるたくましさが見たいと願う。

逆立ちをする約束をしてしう

大 西 文 次

ものはずみとは恐いものだ。うっかり大変な約束をすることがある。逆立ちなんて出まっこないのに……。

愛染帖

橋高薫風選

富田林市故岩 田 美代
花びらが少し疲れた花言葉
いつかきつとこんな傷みも解るだろう
笠岡市 木 山 遠 二
寝たきりが目をつむつてる師走かな
妻の顔このごろ急に皺が増え
今治市 月 原 つくし
手を叩く妻がいとしいなと思つ
スマイルにつられて首を縦にふる
和歌山市 西 山 幸
忘れてはいないかばちやの馬車の音
忘れ縄電車よ春は遠からじ
寝屋川市 岸 野 あやめ
自立して酒の苦さも知りました
ふたりとも説めず喋れずシャンゼリゼ
茨木市 井 上 森 生
想い出す津和野目のない和紙人形
いつまでも愛の弓矢の戦なら
寝屋川市 堀 江 光 子
なに思つてか遅咲きの紅のいろ
かなしみを埋める土の外に無し

あげは蝶花に似合つた彩で炎え ふつきれぬ想いと秋の図書館へ 米子市 川 上 より子 帰つてこ羽衣はもう乾いてる 友ありて端を預けた縄梯子 米子市 青 戸 田 鶴 流れ去る月日散りゆく花の影 ありふれた話は聞かぬバラの花 和歌山市 後 藤 正 子 行方不明の紙ヒコキにあいたくて かすかな眩暈おさえ花屋の前に佇つ 米子市 光 井 玲 子 夕ぐれの海に漂う白い旗 米子市 八 木 千 代 駅までは送らず老母は塀に佇つ 米子市 藤 原 無 想 狂う日もある一合の水加減 豊中市 奥 田 満 女 幽のないは悪態つくに不自由で 青森市 工 藤 甲 吉 吹雪く日は津軽風流譚で昏れ 大口市 小 出 智 子 わたしは私風は気儘に吹いている 富田林市 藤 田 泰 子 灯を消すと白いほのおのかがりび草 羽曳野市 田 中 隆 二 木枯らしよどこかで亡父の咳がする 羽曳野市 中 村 優 晩鐘が聴えて耳が澄んでくる 八戸市 島 田 昭 治 棺持てば仏一瞬軽くなり	わープロで打つ遺言は知れている 岡山県 土 居 耕 花 木枯らしは忘れた影を連れてくる 茨木市 堀 良 江 奈落の底に沈んでいる煌いた一日 藤井寺市 赤 木 和 子 守口市 森 川 まさお 欠伸してた貧亡神が動きだす 高知県 赤 川 菊 野 孤の床でひとり逝く日の顔をすする 兵庫県 東 浦 砥 代 水に馴れ火に馴れ母の掌が温し 弘前市 波 多 野 五 楽 庵 鬼灯よおまえは秋の旅役者 愛媛県 藤 原 無 想 老僧に似し老患の眼に悟り 今治市 月 原 宵 明 傷つけば死が待っている渡り鳥 吹田市 後 藤 火 鳥 初にして娘老いゆく水仙花 米子市 木 村 富 美 子 今日からの私の汽車をさがす駅 和歌山市 神 平 狂 虎 愛に酔い潰れてしまえ冬いちご 岡山県 黒 住 美 穂 子 傷心の身に愛されし証し無し 名古屋市 藤 井 高 子 私の中の一人を説き伏せる 高槻市 河 瀬 芳 子 縛られる俵せ気付く時雨の夜 名古屋市 越 村 枯 梢
---	--

叙位叙勲翁は童心に還る

松原市 小池 しげお

電話口はつきり敵になつてくる

西宮市 林 はつ絵

神さまが時を設けて灯を給つ

富田林市 片岡 智恵子

仕合わせは疎く不仕合わせは深く

唐津市 田口 虹汀

悔恨の涙の色は真珠なり

唐津市 久保 正敏

傾いた儘で羅漢の深い笑み

西宮市 奥田 みつ子

トップ交代掃除の仕方まで変わる

弘前市 斉藤 劔

酔い醒めの水をあげましょシクラメン

鳥取県 新家 完司

ハーモニカ吹いているのはお父さん

宝塚市 丸山 よし津

野菜積んで女とわかるヘルメット

岡山県 松本 元江

キラキラと輝く虹がまだ見える

米子市 田中 亜弥

お隣の太鼓が今日は弱かった

和泉市 岡井 やすお

労働者中流になり矛錆びる

米子市 寺沢 みど里

いのち乞いしながら伸びる路地の草

守口市 羽原 静歩

歳月を拾い集めて寒牡丹

富田林市 田形 美緒

悼句 岩田美代様へ

夕焼け小やけ乗る人いない車椅子

河内長野市 植村 崑代

下の娘の留守はさびしいお洗たく

広島県 藤解 静風

蟹の泡言いたい事があるのかも

鳥取県 さえき やえ

逆縁に生きて見る絵が美しい

鳥取県 松下 たつみ

助走路で息切れがする鞋はずみ

島根県 板垣 夢酔

中国の豆で動ぜぬ家の鬼

堺市 桜沢 あかり

退屈を紛らしている軽い嘘

岡山県 清水 悠貴女

寄り添って安らぎを持つカスミ草

川西市 松本 ただし

木枯しは自分で寒い音を出し

広島県 田村 新造

海の蒼さよそこに大和が眠るのか

米子市 茂理 高代

高い樹をばかりみるから転ぶんだ

兵庫県 北川 とみ子

飾られた言葉に夢を少し持ち

美面市 坪田 紅葉

初恋を思い出させる同窓会

静岡市 渥美 弧秀

逝く姉へわらべ唄など哀しいな

吹田市 西岡 豊

肩書きの好きな男の浪花節

和歌山市 山口 三千子

一つ荷を下ろして花に水をやり

仔猫抱き夫の愚痴を語りかけ

倉敷市 藤井 春日

あんなのが来る宴会を考える

高知県 曾我部 裕

朝もやの奥から明けた郷の朝

守口市 結城 君子

大したことはないのに勿体をつける

羽咋市 三宅 ろ亭

息子も嫁も無口孫は私に似てるらし

寮屋川市 宮尾 あいき

帰るのが遅いと夫も出迎えず

藤井寺市 福元 稔

滔滔と述べて浅学非才なり

笠岡市 松本 忠三

ひとすじに禱りの中で鶴を折る

羽曳野市 吉川 寿美

近道の教えは乞わぬ蟻の列

米子市 小西 雄々

一步でも夢に近づく靴買いに

富田林市 松本 今日子

師の逝きし悲しき冬へ一周忌

岡山県 千原 理恵

正月の花を揃えてほっとする

岸和田市 原 さよ子

北海の流水思ふ多喜一の忌

豊中市 田中正坊

表彰に見えない縄が絡んでる

和歌山県 三宅 保

権謀術数トップの顔の太い眉

尼崎市 春城 武庫坊

新発田市 上鈴木 春枝

それぞれの本を抱えて入るこたつ

京都府 森川 春子
灯がつくとツリーのサンタ生き返る

尼崎市 春城 年代
売り家の山茶花咲いて散っている

島根県 堀江 芳子
正座して亡母の姿を懐しむ

島根県 堀江 正朗
ぶつかった瘤を電話で案じられ

高槻市 川島 颯云児
ずたずたの地図を歩いてきた夫婦

奈良県 米田 恭昌
ライバルに塩を送って遅れとり

寝屋川市 江口 度
山茶花散ったか蟹を食べに行こ

岸和田市 古野 ひで
顔見世にはなやく京の寺の鐘

唐津市 浜本 義美
趣味三味もはや肩書きなど要らぬ

奈良市 井上 大
陣笠の中に百万票もおり

福岡市 吉川 一郎
気紛れな人氣に自己を見失う

米子市 小村 てい子
草餅は老女の挽歌と言いたいな

島根県 小砂 白汀
農民の汗積み上げて献穀祭

岡山県 江口 有一朗
親子憩う療園昔の暗さなし

和歌山市 福本 英子
可愛い口でもめごとはかり持ち歩く

岡山県 土居 ひでの
瀬戸の橋渡る夢抱く初詣

岡山県 矢内 寿恵子
花道の無い人生の夢芝居

大阪市 亀井 円女
熱いお茶静かに含む除夜の鐘

米子市 菅井 とも子
来た道を語りあかして山の宿

大阪市 渡部 さと美
二人目の子のはまばらな写真帳

豊中市 辻川 慶子
お元日久々に着た江戸小紋

和歌山市 山川 克子
快調に進んでつまらないゲーム

岡山県 池田 半仙
朝霧の底から街の起きる音

大阪市 今西 静子
マイホームまほろばの土踏みしめる

米子市 野坂 なみ
青い蕾に断りながら間引いてる

西宮市 瀬尾 六郎太
秋夜長ついつい酒に手がゆきて

唐津市 相葉 あき
生き字引段タインク薄くなり

堺市 高橋 千万子
満員車半人分の席がある

愛媛県 石手 武
冬化粧村の民話が蘇る

愛媛県 八塚 三五島
女三人天下をとった露天風呂

大阪市 川原 章久

耳遠く皆に遅れて初笑い

茅ヶ崎市 山上 元孝
民営化迫り応対敬語調

米子市 政岡 日枝子
いい夢に替えて下さい夢違い

大阪市 北 勝美
一線を引いて同居の城守る

兵庫県 脇田 米朝
車間距離置いてほのぼの嫁姑

和歌山市 木本文子
なにもかもつつちゃらかして新春になる

和歌山市 青枝 鉄治
税務署を丸めたはずが追徴税

* 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「台所」 選者 森中恵美子

締切 2月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 2月22日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

軽みとは

岩井三窓

まったく含羞、はにかみながら書いているのだが、私も御三家の一人に入れられたことがある。軽味作家御三家、久保田寿界氏の命名である。数年前の、あぶその誌に、寿界氏が書かれた、軽味についての川柳論に登場する。それによると、中尾藻介氏と堀豊次氏と私がその御三家ということになるらしい。

さて、その軽みとは何だろうか。一番新しい中型の新潮現代国語辞典には「題材を平淡に表現する作風」とあり、三省堂の国語辞典は「おもおもしくなくて、身近な趣を主とする」とある。大型辞典の小学館「国語大辞典

には「庶民性、通俗性を高揚、深化し、軽快、瀟洒、直截、平淡、卑近なことを芸術化する」と。卑近な事象のうちに詩美をとらえた軽妙な風体」とある。

この二月に、中尾藻介川柳自選句集が上梓される。前述の辞典の説明では律し切れない、迫力ある千七百五十句の、まぎれもない藻介川柳が、十二ポ活字で整列、私達ファンの水年の飢えを一気に充たしてくれるのである。

藻をくぐり抜けて金魚はすぐ出会い
いのししが走ると山も走りだす
石はとけ照りつけられてもたれ合う
犬小屋を燃やす遊んでいた庭で
にわとりも飛ばねばならぬときがある

誰でもが作れそうな句である。この誰でも作れそうな、と思わせるところが氏の名人芸であるとも言える。岩波古語辞典の軽みは、〈修練を十分に積んだ上で、素朴真率に対象を表現しようとする理念〉とある。藻をくぐり抜けた金魚に、人間、生きものの果敢なきを、いのししが生きていけば、山も生きていく。この逞しい、おおらかな自然観。

たこ焼を旨い旨いといういのち

橋から落ちる人が揃ったロケーション
ほそほそと金の話をしているとよ
火葬場の待合室に棚があり
萬華鏡この世は夢を見るところ

この素晴らしい人間讃歌。この深さ。川柳がたのしくてたまらない、といった境地である。角川古語辞典の軽みは「平淡で軽快、かつ印象の明瞭な句風をいう」とある。

軽味とは川柳の三要素の一つではなく、川柳そのものではなからうか。究極という言葉が流行っているが、川柳の究極は軽みであるとも言える。平明にして深遠、藻介川柳はこの一言に尽きる。

中尾藻介川柳句集

■発行日 昭和62年2月15日

■B6判 183頁

■定価 二千円(送料は刊行会で負担)

〈問合せ先〉

〒564 吹田市南正雀 丁目19-6

〈川柳悠美 西川景子方

藻介句集刊行会

電話 06(381)4539

尚香のむ

小出智子選

やがて雪やがて桜を待ちこがれ
 子育てが終つてさがす道しるべ
 決着がついて食欲わいてくる
 老母の手でじっくりほどくもつれ糸
 笑い過ぎた今日を仏に詫げる夜
 むるいめの湯がいとおしく肌上添う
 山茶花が散つて一人の冬支度
 北風と約束があり寒椿
 渋柿に思いちがいがあつて冬
 精いっぱい生きてる赤い靴を履き
 白菜を漬けて妻の座つつがなし
 ホーナスが出たなと魚屋もわかり
 忘年会ジュースの芸もあなどれず
 夫とは一緒に風邪をひいている
 数学の本ひろげると眼が覚める
 手押し車のおばさんの菊待っている
 子の為にさもしいことを考える
 北風が身を責めてくる身八っ口
 生きてゆく色だとおもう足袋の白

鳥根 堀江 芳子
和歌山 山口三千子

米子 石垣 花子
高槻 河瀬 芳子
和歌山 細川 稚代

大阪 鈴木 節子

和歌山 田中 輝子

堺 高橋千万里

松原 佐藤 藤子

尼崎 春城 年代

和歌山 西山 幸

亡母の樹とひびき合つて冬木立
 穴掘りを手伝つた日の淋しさよ
 澄みきつた青空今日は赤を着る
 晩年の坂道鼻緒きつい目に
 十年先読めば背中が寒くなる
 冬の星愛は虚のまま進む
 コスモスと話した風とすれ違ふ
 ここだけの話たしかに面白い
 飛び越える筈の小石にけつまずく
 海の匂いが恋しくなると夢を見る
 木枯らしを背なに受け止め腰のばす
 嫁ぐ娘へ向ける笑顔が硬くなる
 ささめ雪女の業を積むように
 闇の底忸怩たるもの発酵す
 姑と話題が通う妊婦服
 装つてみても夫の粹の中
 浄瑠璃寺紅葉と孫と焼き芋と
 エプロンをかけるお腹が空いてきた
 サイコロのどの目が出て吉とする
 反戦歌すこし慣れ合い気味になる
 かごめの輪うしろの正面笑いだす
 目覚ましが十二月の音で鳴る
 バラバラの家族を繋ぐ母の部屋
 恙無きこと良しとして古稀の膳
 思い出の中に二人の旅がかかる

岡山 嘉数北代賀
和歌山 木本 文子

箕面 坪田 紅葉
八尾 高杉 千歩

和歌山 福本 英子
和歌山 福井 桂香

和歌山 森 茜
島根 小玉 満江

島根 松本 文子
和歌山 後藤 正子

横浜 大橋よしゑ
松原 北野 久子

岡山 灰原 泰子
大阪 西出 楓楽

新発田 上鈴木春枝
和歌山 堀畑 靖子

大阪 板東 倫子
豊中 安藤寿美子

宝塚 丸山よし津
佐賀 寺中三枝子

堺 小西 小雪
大阪 鍛原 千里

大阪 本間満津子
茨木 吉川 悦子

大阪 上江洲勝子

売り声の威勢も違う十二月

御殿毬綺麗に巻けて山は雪

幸せな夫婦を見てる冬の薔薇

じれつたい人で返事がまだ来ない

十二月無言の鹿の群れに遇う

告白をして花の香に裁かれる

つらからう最後のひと葉落とす蕨

天晴れと思う莫迦だとも思う

第九の歡喜むなしく年も暮れ

めんめんと綴れば霧が晴れてくる

寝たきりになるとは誰も考えず

ありふれた日記へ晴と書き添える

振り袖を干して女をしまいけり

お嫁さんがほしい才女の稼ぎ振り

佗しさも馴れていよいよ遠い道

漬物をどっさり漬けて初春を待つ

伏し目勝ちの瞳があたたかし晴れ姿

何時までも平行線のままの人

珈琲店の椅子はおしゃれな人がすき

影法師ひとつを連れて旅に出る

雨あがりポストに入れる招待状

アルバムの亡父の瞳が暖かい

ひとしおの風情に逢えたぶぶあられ

新春を待つ薔日ごとにふくらんで

両親に贈る言葉は元気でね

岸和田 原 さよ子

大阪 杉本智恵子

山口 結城 君子

和歌山 桜井 千秀

大阪 堀 いくの

富田林 片岡智恵子

和歌山 寺田 裕美

藤井寺 高田美代子

吹田 茂見よ志子

高槻 笠嶋恵美子

河内長野 植村 喜代

和歌山 坂部紀久子

米子 政岡日枝子

和歌山 山川 克子

京都 小林 英子

和歌山 内芝登志代

寝屋川 宮崎 菜月

貝塚 池田寿美子

米子 田中 亜弥

岡山 山本 玉恵

大阪 清水 康恵

岡山 福原 悦子

富田林 故岩田 美代

大阪 古川美津子

大阪 神夏磯道子

梅一輪咲き初めしかな誕生日

手鏡の中幸せがこぼれ落ち

傷心を癒すベンチに枯葉舞う

美容院から晴れやかに出る雨上り

十二月財布の紐をきつくしめ

おっとり型の息子が夢を書き換える

過ぎし日の暦師走に読み返す

大噴火神の怒りの声と聞き

雪の精でしようかシクラメンの白

くたびれて来たのか脇見ばかりする

おんなには白けた話しなさんな

くやしいが叱るにさえも子を見上げ

くどいとは思いつつも親心

古い二人干す大根もしれたもの

おしゃべりが好きな炬燵に上下なし

幸せのおこぼれ欲しい列に居る

日々ちぢむ手足伸して日向ぼこ

明日の米研いであしたを疑わず

足萎えて散歩がわりの医者通い

見栄を張る娘の影に添うている

男の嘘許して揺れるイヤリング

岡山 清水悠貴女

出雲 石倉美佐女

大阪 津守 柳伸

広島 藤解 小菊

宝塚 吉田 笑女

埼玉 根岸 方子

大阪 山田 妙子

大阪 天正 千梢

藤井寺 赤木 和子

和歌山 小川百合子

堺 河内 月子

寝屋川 太田 藍子

和歌山 山田 久子

川西 田中喜代子

熊本 永田 俊子

名古屋 藤井 高子

京都 山脇 タネ

羽曳野 吉川 寿美

芦屋 竹中 綾珠

大阪 西村美佐女

今治 月原つくし

ハガキに雑詠3句。毎月10日締切

投句先 下54 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出 智子

詩人の年齢

竹内紫鏘

一、詩人名簿から

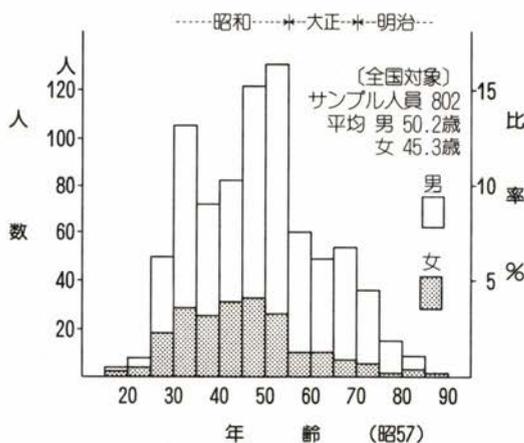
「日本現代詩人会」から名鑑が隔年発行されており、その中の個人名簿には、氏名・生年月日・所属結社・住所が載っている。俳句や川柳のように代表作を添えるスペースはないが、費用の負担は軽いようだ。一九八二年版に記載された約四五〇〇人の会員（年齢がわかるのは約八割）のうち約千人をサンプルとして、年齢別、男女別の集計を試みた。図1のような棒グラフができた。男女の比率は七一対二九ぐらいである。

この図で分かるように、年齢層の幅や平均年齢の点では、前号までに報告した俳人（指

導者級）や川柳人に比べてずっと若い方に寄っている。

すぐに目につくのは、三一―三五歳の年齢層が大勢である点で、それは戦後のベビーブームの人口に対応するような気がする。なお、国勢調査によると、終戦後の五年間に生まれた者は、その前後と比べて二割近く多い。そのピーク人口の若者たちが中学・高校の頃、詩を作る環境にいたことが考えられる。この詩人名簿には職業が大体載っており、主婦とか

図1 日本現代詩人会会員



動め先の全社的文芸誌とか社内報の編集となると、右のような俳人・歌人たちの献身的活動に負うところが大きかった。作文も、学生時代からの心掛けだけで上手になることも、「場」があれば伸びることも、二十年間サラリーマンをしていればよく分かった。

教員が割合多いように思われた。そういえば、筆者が二十年前ごろ茨城県で職場の文化会の世話役をしていたころ、新入社員（主に女性）で文芸部に「詩グループ」が作れるほどの人数が集まった。その他には地元の俳句指導者の流れを汲む形で、俳句グループが出来た。従業員一五〇〇人のうちで二―四%ほどの文芸部員がいるほか、紙上俳句大会をやると一般社員を含め二百人以上の参加があった。このちょっとした雰囲気、部課長の研修会にもつながっており、俳句の宿題で困った課長さんに代作を渡したこともある。

川柳のグループはどうしても作れなかった。その次に随筆の会を作ると、こんどは中年熟年の社員も参加した。

二、定型詩の浸透

子どもは無意識のうちに、七音五音の組合わせになじみ、暗誦してゆくように思うがどうだろう。国語の教科書で習い、そして唱歌で旋律を覚えたような詩は、軍国調もあつたが、一番よく頭に焼付いた。「鎌倉」「水師官の会見」の類だ。そのほか詩として立派であり、メロデーも完全に覚えられたが、小学生には理解困難な字句をも節にのせて頭に詰め込んでいた。

十五歳を過ぎても詩の鑑賞をする環境に恵まれなかったことが、今にして悔まれるのだが、表1は、そんな歌曲の例である。ここで作詩者が若いことにお気づきである。明治・大正の詩人たちは、初期の有名作品を発表した年齢が二〇代か三〇代だったのである。そういう手本が、七五調を中心に浸透していた。考えてみると我々が俳句・川柳の実作を始める前の、詩語受入れ期間があつたような気がする。

ふしは付いてなくとも、学童の耳は韻律感には鋭敏である。小学校の教科書に川柳が現れたのは、筆者の記憶では一つだけで、塙保己一の話題に、「番町で目明き盲にものを訊き」という句が添えられていた。

十七音はもちろん、三十一文字でも作曲の原理上は短かすぎて旋律が作りにくく、曲が少ない。朗唱の形で和歌や御製の、七音五音が頭に刻まれた。戦前の小学校には、自然界とか戦史、それらの形容語のうち、「わかるもの」が頭に残つたらしい。交通安全の標語の必要はない時代だった。

表1 有名曲と作詩の時期

曲発表年	曲名	作詩者	作詩時年齢
明 33	花	武島羽衣	28
34	荒城の月	土井晚翠	30
大 2	早春賦	吉丸一白	40
2	城ヶ島の雨	北原秋十	28
7	かなりや	西条八露	26
10	赤とんぼ	三木口風	32
10	七つの子	野口雨虹	39
12	花嫁人形	藤田芳児	25
昭 6	丘を越えて	島崎藤村	33
11	椰子の実*	島崎藤村	28
24	夏の思い出	江間章子	36

*明治33年作、「千曲川旅情の歌」「朝」と共に、最終句集『落梅集』に収載。

第10回

鳥取県川柳大会

日時 昭和62年3月29日(日)9時開場
会場 倉吉市上井 長生閣

(国鉄倉吉駅前五十米)
電話〇八五八(26)二三三三

お話し 山本朝土画伯
兼題 「湖」「光」「許す」「先輩」「しゃべる」「馬鹿」

小林由多香選
小西 雄々選
渡辺 苦句選

席題 2題 各題2句 締切11時30分
会費 千五百円(作品集・軽食呈)

投句千円(作品集呈、3月15日消印まで、小為賛希望)

懇親会 会費 二千円
投句先 千六八二

鳥取県倉吉市西福守町七二七 渡辺独歩方

第10回鳥取県川柳大会 実行委員会宛

主催 鳥取県川柳作家協会

初歩教室

題 — 言い訳 —

阿萬 萬の

初心の方々の視線はどうしても同じ所に集まるようですね。「言い訳をすればする程……」という句が多く、その殆んどは割愛しました。

言い訳をすればする程の悪さ ぶさ子
(言い訳を勧められてるまの悪さ)

言い訳をすればする程自己嫌悪 隆 積

言い訳をしたばっかりに探られる 志 重

言い訳をする度に品が落ち みのる

だが言い訳は尻からばれるものらしく、見え透いた嘘の言葉の尻がばれ 秀 香

お人好し言い訳しつ尻尾出し 信 子
(お人好しの言い訳尻尾が見えてます)

言い訳とくればご主人の掃宅のときが……
この際は下手な言い訳やめて寝る 悦 子
午前様何も言わずにそっと寝る 昭 治

言い訳を省く飲み連つて来る はお居直つて言い訳もせず黙つてる 千代女

下五「黙つてる」を何とかしたいですね。

事がばれとつきの言訳間に合わず 一 耕

(言い訳がばれて笑いでふっ飛ばし)

言い訳はせぬが妻の黙秘権 静 子

言い訳はもう沢山とふくれている 千代女

言い訳は毎度のことで聞きあきた 喜代子

だが奥さんは裏の裏を読んでるらしく、

言い訳の裏を読む妻すまし顔 恭 昌

(言い訳の裏を読んてる妻の顔)

妻の顔たてる言い訳考える 諷云児

言い訳をする夫だが又可愛い 登美子

言い訳が通りやれやれ午前様 久留美

(言い訳へご苦労さまと妻笑う)

いろいろな言い訳夫から学ぶ 芳 水

よくもまあこれ程言訳知つてはる 種 子

許してる心言訳待っている 遊 光

子供等の成長は言い訳の術も教えるのか 円 女

言い訳の術を覚えた孫の知恵 明 美

言い訳を覚えた三つ子の憎らしく (言い訳にもくらし第一反抗期)

事毎に言い訳する癖いやな人 秀 香

(事毎に言い訳をする子に育ち)

言い訳の孫の言葉にある一理 金 吾

言い訳を子供はちゃんと知っている 美恵子

(大人達の言い訳子供が知っていた)

言い訳は子供が先にしてくれる 種 子

(おしやまな子に言訳の裏ばらされる)

恩師や母の胸は広くて言訳などは許して

言い訳と解つて聞ける齢になり 凡 太

言い訳を笑つて聞ける齢になり 三千子

古く生き言訳するもとほけてる 繁 男

(年の功言い訳とほけて聞いてあげ)

一對二言い訳かばう母がいて 勝 美

言い訳はしなくてもよい母の胸 博 子

母だけが黙つて言い訳聞いてくれ 章 久

傷つかぬ様に言い訳考える 三千子

やわらかい言訳しこり消えて行く 寿美子

(京言葉で包む言い訳風ぬく)

達筆の言い訳こなごませる サワ子

(念の入った言訳きれいな文字並ぶ)

さて新人類の言訳にもいろいろな面が……

新人類先ずは言い訳先に立ち ツヤ子

言い訳もぶつきらほうに新人類 保 夫

新人類言い訳なんか考えぬ きみ子

ここで一寸目先を変えて

大惨事言い訳ばかり聞かされる 倫 子

(大惨事言い訳に似た記事も出る)

弁慶の言い訳安宅で命賭け 兼治郎

(弁慶の言い訳判官眼を伏せて)

金バッジの先生方にも言訳がつきまとい

言い訳はせずハイハイと選挙ころ 吟 平

言い訳で事が納まるお大臣 晃 世

大臣の言い訳のらりくらり逃げ 金 吾

増税の言い訳的に減税し 一 耕

(大臣の言い訳言葉を少し変え)

言い訳をせぬと大臣首になり 露 芳

ハハハ〇〇文部大臣のことですかねえ。

言い訳は何時も言うてる評論家 東 雲

(言い訳に一理を添える評論家) 昔、昔こんなこともありました。

昔なら腹切るところが世が変り 昭治

言い訳の返事は直ぐにヒンタで来 やすお

(言訳無用ヒンタが飛んで来た時代)

アリのパイの主張通じぬ刑事部屋 純子

白をとる迄は言い訳押し通し 吟平

(最高裁があると)言い訳押し通し)

言い訳も常習者になると:

言い訳の限度知ってる常習者 ただし

胸張って言訳してる常習犯 達子

(言訳無用キラリと光る黒眼鏡)

忘年会夕刊記事から言い訳す 明吉

(夕刊記事も言訳にも本音がちらちらと)

言い訳に又かと本音垣間見る トキワ

言い訳を考へつゝい本音が出る 登美子

(言い訳が詰り本音の顔覗く)

言い訳を聞かされる方も大変ですわ。

言い訳でないと言い訳してはいます かつみ

言い訳を聞かされているお人好し 博子

(言訳くどくど聞かされているお人好し)

ひと通り言訳聞いてサテと出る 鉄治

(言訳を長々無心切り出せず)

今は亡き夫への思いを込めた句も

言い訳は少しも通らぬ亡夫でした 輝月

言い訳をニッコリ赦している遺影 克子

言い訳へ父の背中が笑つてる 慶子

言訳もせず別れた人へと空白が:

言い訳もせず別れを決意する 倫子

(言い訳もせず氷雨の日の別れ)

言い訳はよそつ未練の涙壺 遊光

言い訳をしたが気まずい日が続き 美恵子

言訳にとられた口惜しさじつと耐え 有佳

(言訳にとられて冬空見つめてい)

それではそろそろいろいろな言訳を

言訳を見透かされてるへば商人 正之

(見え透いた言訳商人手をこする)

言訳ににくい言訳妻に預けとく 八重子

(言訳は妻にまかせて旅に出る)

陽だまりで言訳ばんやり考へる 久子

(陽溜りで他愛のない嘘考へる)

スパイスの効かない顔で言訳聞く たかし

(スパイスのない言訳へ外は雨)

親に似て言訳も似たひとりっ子 太一郎

結果論言訳してる方が勝ち 保夫

(世渡りも上手 言訳又上手)

言訳のうまい男のまるい背 奈美子

見猿言わ猿言い訳は聞きません 太郎

(見猿言わ猿その言訳は聞きません)

仲人が断りに来て汗をかき 新造

言訳の土産を買った梅田地下 白峰

この二句などはちよつと古い着想ですわ。

言訳と愚痴は飛ばそう冬の風 悦子

言訳はよそう明日という日あり 周三

言訳を考へているイヤリング 房子

言訳がくだいんだよと負けた方 みのる

ブライドが邪魔で言訳角が立ち 喜与志

言訳の夫婦善哉あたたためる はるお

置き忘れた心言訳うまくなり 達子

言訳の本音は出さぬかたつむり 八重子

手の込んだ言訳煮物煮えつまる てる

言訳の敷居が高い年の暮 白峰

言訳に呑まれて歩く廃止線 市雄

言訳を父にさせてる卵酒 たかし

失敗の穴に言訳のふたをする ツヤ子

言訳の愚者へ割箸又折れる 実男

言訳へ子の泣き声も出す受話器 春枝

言訳の心を鏡が覗いてる 章久

裏切りの言訳などが胃に溜まる 一郎

好きな服言訳をして派手に着る 慶子

言訳も嫁の前では口ごもり 方子

外出へ嫁の言訳うまくなり 春枝

言訳の薄い唇よく動く 喜与志

言訳の言葉を包む樹の茂り よし津

お上手な言訳コスモス開いている 奈美子

言訳もせずに見ている蟻の列 かつみ

言訳が得意で墓穴掘る蛙 隆積

ともかく川柳を作ることは、視野が広くな

ることなので色々幅広く考へてみましょう。

題「地図」 2月10日締切(4月号発表)

ハガキに5句以内

宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一一九九

「蝶」 3月10日締切(5月号発表)

阿萬 萬的

野 心

田 中 正 坊 選

陣笠の野心に遠いドンの椅子 正 豊
 作品展ひとときわ目立つ野心作 良 敏
 方舟に野心もひとつ潜ませる 緑 豊
 野心のない男で鼻毛のびている 三五島
 陶工の野心が燃える登窯 公 一
 野心無き勤続賞の父の汗 優 人
 野心だったねと鴉笑うてる 妻 子
 トップへの野心は捨てぬ兎飛び 重 人
 野心作と言う小説のいま佳境 さと美
 野心など捨てて自重の不況風 暁 明
 親切な言葉の中にある野心 元 江
 野心ある男が受ける向い風 山 久
 野心などサラサラないという野心 螢 久
 膝小僧抱いて野心の牙を磨ぐ 章 久
 野心持つ饒舌な手に握られる よし津
 野心家が単身赴任で飛ばされる 是 好
 新年に野心の牙を研ぎ直し 新 造
 縄のれん小さい野心が渦を巻く 新 造
 野心家の名刺肩書並べたて 理 恵
 野心だけ燃やして初心捨てている たつみ
 石橋を叩くと野心こぼれ落ち 蒔 菰
 野心うすれ今は定年待つばかり 素身郎

またとない話に野心燃えている 軒太楼
 ささやかに生きても野心捨てきれず 太郎
 野心家の胸にゆらいでいる不安 代仕男
 無口にも野心があった国訛り しげお
 野心家に孤独な椅子が待っている 一 郎
 野心脱ぎ捨てると丸い山が見え 克 枝
 ジョークからこぼれる野心見しまい 寿恵子
 野心家の割には下手な猿芝居 枯 柏
 三浪の野心が燃える日課表 大 柏
 野心捨てれば空は青水も青 多 駄子
 英雄の野心の如く雲走る 伊津志
 野心家にしては愚痴が多すぎる 弘 朗
 火花散る野心を誘う月桂樹 どんたく
 手鏡の中に野心が秘めてある 砥 代
 野心満々泡立草が黄に燃える 高 子
 余生なお胸にたたんでいる野心 美穂子
 あつさり捨てた野心にある未練 狸 村
 ささやかな野心も秘めて待つ異動 雄 々
 ぼつくりと逝きたい野心が一つある 文 平
 影武者がいつか野心を持っていた 成 人
 ほど遠い野心に豆の木植えている 白 峰
 少年の野心東京の地図を買う 明 水
 野心をすてると明日がよく見える 雀踊子
 野心もうとつくに捨てたベレー帽 軸

秘 密

岸 本 豊 平 次 選

風の街秘密がひとり歩きする 雀踊子
 ここだけの秘密が波紋の輪になって 節 子
 ここからは秘密老舗の味になる 重 人
 からくりを知ってしまった阿呆らしき 勝 美
 顔色はボツケの秘密見られたか よし津
 友情に秘密からんで出来た壁 智恵子
 秘密もう仕舞い通せぬ妻の勤 可 住
 秘密など持てぬ明るいお人柄 有一朗
 秘密など持たぬ夫婦でよく笑う 灸 六
 秘密にして丸くおさまる事もある 理 恵
 秘密抱く背に冷たい風を負う 元 江
 良いしらせ秘密でおれず顔に出る 是 好
 幼ない日秘密の場所の宝物 倫 子
 子の秘密知って苦勞がまたふえる ふさ子
 この秘密心の支えにとつておく 保 夫
 迫害の祈りの像よ隠れ里 高 明
 幕間の秘密は見せずピエロの眼 多 駄子
 針箱の底で秘密は風化する テルミ
 友底う秘密一緒に罰を受け 京 子
 打ちあげた秘密へ荒れる海みつめ 雄 々
 言いたくて秘密が喉を上下する 満津子
 大切に秘密をかくすもみじの手 どんたく

あたたかい布団で秘密とけてゆく
 反論の矛先秘密握ってゆく
 整形の二重瞼といつ話す
 病妻へ秘密カルテの怖い文字
 若い日の秘密月日が押し流す
 彼だけが解る伝言板の文字
 思惑があり秘密少しだけ洩らし
 本心は秘密のままで逢うて来る
 気の弱性で秘密がすぐにはれ
 白昼を楚楚と秘密を抱く淑女
 その中身知れば何でもない秘密
 ライバルの秘密を知った安堵感
 少女もう人に言えないものを抱く
 指きりの悲しきまでに細き手よ
 苦勞したことは秘密にしておこう

住 佳

昨晚の秘密知ってる靴磨く
 継母とは知らず育った愛の中
 前身は秘密にしたい揚羽蝶
 この椅子に就いて解った社の秘密
 深刻な秘密が漏れる更衣室

人

母の背を見れば秘密はもたれない
 自分史の秘密を背負い一人旅
 天 地

秘密など持たない父の太い眉
 糸電話可愛い秘密聞いてやり

軸 公 一

みどり
 さと美
 克枝
 一徳
 有佳
 虹汀
 素身郎
 玉恵
 弘朗
 本蔭棒
 あやめ
 繁男
 ちよ
 久仁於
 螢

背 ぐ

藤田 頂留子 選

背信を嫌う明治の背が光る
 背く者なき一筋の蟻の列
 おにきりが照る照る坊主に背かれる
 極道を選んで背く世捨人
 背かれて画布むらさきに塗りつぶす
 シナリオに背くと寒い風に逢う
 背く手をうまくいなした多数決
 背いてもこだまは返す母の峰
 背く程強い自立を望む親
 沈丁花春に背きて散りし人
 それからは流れに背く石となる
 背いても所詮は同じ血が流れ
 背かれて尚断ち切れぬ恋の糸
 背いても親の枠から抜けきれぬ
 音消しても親の背から抜けきれぬ
 裏切りの夜に背いた水中花
 柔らかな説に背く京女
 勤のよい妻です隠し事しない
 向う意気強くて上司に盾をつく
 土壇場でやっぱり背くバラの花
 信じてた人が持ってたふた心
 思うことあって絡んだ糸を切る

隆積
 テル
 どんたく
 洛酔
 智恵子
 三枝子
 文平
 ちかし
 みのる
 正坊
 玉恵
 素身郎
 清芳
 通彦
 明水
 久仁於
 章久
 軒太楼
 弘朗
 テルミ
 美穂子
 千秀

子に期待するから親は背かれる
 背かれてばかりの果ての犬を飼う
 親の意に背くりンクが指にある
 父さんに背いて仔犬を森で飼う
 背信の朝の鏡を恐く見る
 背信はすまじ長押の槍が泣く
 お茶うけに不倫の恋の設計図
 背かれて尚手を差しのべる親の愛
 神の手に背いて遺伝子組みかえる
 背かれた小指が疼く流れ星
 背くだけ背いて母の掌に還る
 背いても頼る程のに出会わさず
 娘が背いた日から夫の肩が落ち
 背信と言われたくなく耐えている

住 佳

骨壺の母が背いた子に抱かれ
 いつの日か解ってもらえる反旗振る
 背信の夜汽車眠れぬ闇を往く
 忠告に背いて不倫の火を燃やす
 友情に背いて渡る丸木橋

人

誰が言う女の敵は女とは
 手の中の小鳥が背く今朝の雪
 天 地

背かれて母は氷を温める
 口裏をあわせ心で反旗ふる

軸 克枝

勝美
 さと美
 裕
 規不風
 正敏
 虹汀
 四郎
 あき
 多駄子
 白峰
 ただし
 有佳
 公一
 はる子
 静子
 雀踊子
 新造
 諷云児
 たす子
 あやめ
 螢

柳界展望

集録・板尾岳人

★第36回西大寺会陽川柳大会
主催・西大寺川柳社
日・3月1日(日) AM 9時
所・岡山市西大寺向州・西大寺市民会館4F
片手おち 本田恵二朗選
ラスト 水粉 千翁選
響く 恒弘 衛山選
波乱 土居 耕花選
大地 船越 洋之選
席題二題・特別席題一題
会費(千五百円)
賞・総合10位及び各題特選句賞呈す。
投句・50円を添え、句箋35cm×18cmの句箋のうらに名前と雅号を記入2月26日必着 投句先〒704岡山市西大寺中2丁目7-8宮川陽仙迄

★番傘加越能川柳社創立20周年・田向秀史句集「起舟」 発刊記念川柳大会 日・3月29日(日)正午開場 所・金沢都ホテル金沢駅前 句集鑑賞 片岡つとむ氏 ころ 奥 美瓜露選 東京 中村 柳児選 愛妻 玉野可川人選 朝 森中恵美子選 人間 加藤 翠谷選 エース 亀山 恭太選 歴史 野口 初枝選 前進 奥田 白虎選 舟 田向 秀史選	体温 森中恵美子選 使命 龜山 恭太選 事前投句 野口 初枝選 詩り 野口 初枝選 投句拝辞・各題2句 会費・千円 事前投句〒500岐阜市真砂町7丁目 野口初枝方 岐阜川柳社 主催 岐阜川柳社 ★生駒番傘10周年故大神古梅句碑除幕記念川柳大会 日・3月22日(日) AM 9時 所・生駒市宝山寺和光殿 宿題(A)「伸びる」ハガキに2句連記2月20日迄に〒630-02生駒市本町8-15芳野村雨方 生駒番傘川柳会 宿題(B)10年・輪・坂道・縁恵み・梅・呑む・歡喜天・(各題2句) 欠席投句拝辞 会費二千円	所・岐阜市文化センター 名鉄新岐阜駅より徒歩5分 相手 田中 明治選 屋根 青木 惜春選 告白 浅野 滋子選 足跡 杉山 六夫選 突破 名和 勝選 本心 加藤 翠谷選	参加料 一口千円何口にて
---	--	--	--------------

寒中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会

事務所 岸和田市土生町1989-8

高橋操子内

電話 0724 (22) 0049

も可 締切り4月30日

投句先・千701-21愛知県知

多郡東浦町森岡字下今池5

▽69渡辺和尾方川柳みどり

▽川柳出版紹介△

■「しろつめ草」

木野 由紀子著

由紀子作品には宗教、音

楽、美術、古文化そして季

節のミックスなど西歐的な

色調で描かれ……そのB面

で白い雪の幻想譜が奏であ

れている(磯野いさむ氏の

序文より)

少年にいちばん近いキリン

の眸

火をまとう髪洗っても火の

匂い

発行所・三重県名張市桔梗

が丘四の一の十番傘桔梗川

柳会 A5判・二千円

■「浮草の根」

園山 栄著

古稀の記念に第二句集を

刊行、斯界の諸氏の序、跋、

寄稿もあつて異色の著書で

ある。

■「さくらちりぢり」

新同人紹介

可住・紫香・笑女・武庫坊推薦

脇田米朝

斎藤

一采・薫風・甲吉・五楽庵推薦

斎藤

斎藤

斎藤

斎藤

藤川 良子著

雑詠句を主とする句集は

一言一句にいのちが溢れ、

精一杯に生きる良子の輝き

がある。

火吹き竹むかし豊かな火の

ありき

ちち捨てた白からさんざめ

く日傘

B6判 千円

発行所千701-42岡山県邑久郡

邑久町山手二四四川柳岡山社

■「新興川柳運動の光芒」

坂本幸四郎著

序文―田辺聖子。反戦川柳

で検挙され獄死した鶴彬等

他に田中五呂八、剣花坊の

遺志を守った井上信子、日

本近代文学史の欠落を埋め

る意欲作、全国の書店にて

販売中。

■川柳「紋土」

紋土賞

どの彩も赦してくれる白い

皿 清水悠貴子

弓削川柳社賞

今日生きる手でカーテンを

しかと開け 窪田 和子

▽お便り及び消息△

外科へ入院、1月12日手術

をされ、その後経過良好と

のことお見舞い申し上げます。

■井上盛雄氏が雅号を森生

に、

船津重信氏はふなつ重信

とそれぞれ改められた。



私たちの虹消ゆ 嗚呼 岩田美代さん

阿部 柳 太

消えかかる虹などみてるひまはなし

それからは後ふり向かぬ縞かすり

岩田美代さんは、ほんとうにひと一倍の勝ち気で負けず嫌いの人であり、二子の母としてまたよき妻として夫岩田正男氏と共に、ヘアデザイナーとなり、戦中戦後のあの激動期を堪え抜いてきた理美容業界の婦人功労者でありました。

日々の多忙な中で、つねに前向きの姿勢をくすさない気風は、その服装からも伺い知ることができました。

洋装よし和服またよし、色白で端正な目鼻立ちに、しゃれた眼鏡を掛け、好きなコーヒ―を前にして、しなやかな細い指先で器用に

ライターでパチンと火をつけ終わり、紫煙を煙らすさまは、まるで一幅の美人画をみるようでありました。

こんな時の私が嫌いで顔洗う花芯をのぞいて花を哀しませ

それだけに自分のバックボーンとなる何かを求めたのでしよう、それが川柳との恵まれた出会いになったのです。

そのためか彼女の作品は、つねに自己を厳しく見つめ直す、男にも見紛う毅然とした句が多くみられるのであります。

消しゴムで消えたと思うエゴイズム
友だちも善人として鈴を振る

ときには、友人すらも妥協を許さない一線を堅持し、自他ともにまるで鋭い刃物で断ち切るような一面を持っていました。

沈黙が寒くてやき芋買ってくる

感受性強くて淋しいことはかり

「クイン」はつねに孤独であると申しますが、私はそのように見ておりません。

川柳の吟行グループの一員として、彼女が参加をただただで、まるでぐるりがバラにはほ笑みかけられるような雰囲気をみんなに与えたものです。

三つあみの髪そのままの盆どつろろ
お彼岸に一子なくした桜もち

二十五年前、当時中学生で十四歳になっておられた長女の時子さんを亡くされたときの彼女のショックは、たいへんなものであ

りました。時子さんのお棺に、大好きでありました「ひばりの越後獅子」のレコードを入れてやり、すがりつくように泣きくずれておられた後姿は、いまでも浮んでまいます。

子を思う愚かな今日がまだ暮れず
ゆすら梅子らも大人となりけり

それだけに後に残されました二子に対する美代さんの愛情には、全く頭のさがる思いがするほど、深く広いものでありました。

数多い作品のなかで、けり、止めの句がほとんど見受けられませんが、それだけに母の真情を、この作品から一層感じさせられるものがあります。

いまや業界の中堅幹部として、おふたりの息子さんの働きぶりには目をみはるものがあり、父正男氏も「息子らには負けずわ」とかつての商売好きも、うれしい悲鳴をあげるほど、「男爵グループ」のホープとして活躍をしているのです。

ひとつ屋根男と女とこおろぎと

晩年句会へくるにも息子さんの「孝行車」の世話となり、夫正男さんと車の日々の余儀なくされるようになりました。

「ちよつとこれしてえなあー」とたのんでも「少し待ってくれ」と夫が言うんです。こちらも腹をたててしもつて、口いっぴい言うんですが、その後で「あんたには、すまんなあー」と喉まで出かかるとやが、それが言葉となって出えしまへんや、夫婦の気やすさ

なのか、甘えだっしやろうかな」と、しみじみ夫婦愛を話してくれる美代さんは、ほんとうにうれしそうでありました。

ときに昭和六十一年十二月十八日午前五時五十分突然に昏睡状態となりました。

かすかに申されるので、次男さんが耳を近づけると「ハロー・ハロー・グッドバイ」とはっきり聞きとれるので、父正男氏に申しあげると「あの楽しかった川柳塔のハワイ吟行の夢を、おかあさんは見てはるんやな」とうなずかれました。

川柳を愛し、自らも多くのひとびとに愛さ

川柳と母

岩 田 時 哉

「お母ちゃんもつええ加減にして寝えや」

「よっしゃわかかった、これだけ書いてしまつたら寝るわな。私がまだ中学生ぐらいの頃、毎夜交わす母と私の言葉です。毎朝早く起き、店へ出て用意そして仕事、昼前には買物カゴひとつさげてスーパーへ。職人さんの分も入れて十数人分の食事を昼夜作っていました。

もちろん昼も夜も仕事、終わってからも洗濯、掃除と休む間もありません。そんな母にやつと暇ができるのが12時過ぎからのわずか

れ続けられてきた、才媛岩田美代のこれが最後の言葉となったのです。

虫の音の切れ目になった別れぎわ

岩田美代さん、お浄土で好きなコーヒーでも飲みながら私たちの来る日をお待ち下さい。それまで貴女の「縞かすり」に負けない句をつくり、見せにゆきたいと思っております。

うたかたの嗚呼哀歎の薄化粧 柳 太

会いたくばここに美代あり縞かすり」

照譽智光美芳禪定尼 行年六十八歳

合 掌

富田林市富田林町 天正山西方寺に眠る。

な時間なのです。静まった部屋で一人机に向い時々思い起こしたようにベンを走らせる母の姿を見て子供心に（また明日はしんどいのに、早よ寝たらええのに）といらだちに似た心配をされたものでした。そんな私の心に気が使いながらも句を作る母の眼は真剣そのものでした。仕事のために句会に出られない母はそうして作った句を藤岡花梢さんに持って行ってもらい、結果を待っていたものでした。

「美代さん、あんた今日はええ成績やったでえ、天の天やで。」花梢さんからそんな報告をもらった時の母は本当に嬉しそうで、特に關心のなかつた私達に一生懸命にその句の説明をし続けました。

私達がやつと母の川柳というものを仲々のものなんだと理解しだしたのは、6年程前

に路郎賞を戴いた時からぐらいいでしようか。

しかし皮肉なことにその頃から恐しい病魔が母の身体を蝕み始めたのです。筋萎縮側索硬化症という名の難病で、全身の神経が機能をなくしてしまい、すべての筋肉がやせおとろえて自分で立つことはおろか寝返りもつてなくなり、果ては呼吸もできなくなるという最悪の病気でした。最初の頃は首がだるい程度のことを言っていた母も、だんだん動かなくなっていく自分の身体にどれだけのつらさ、みじめさを味わったことでしょうか。しかしそれでも母は川柳をやめませんでした。苦痛にふるえる手に鉛筆を握り一句一句大事に大事に作っていました。車椅子に乗り月一回の句会に出る母は、終わったあとで「ほんまに楽しかった。川柳の時だけは病気を忘れるわ」といって続けていました。また川柳の仲間の人達も本当に親身になって母の世話をしていたことができました。

雲の峰 月の蒼さに予約する

昂ぶりの余白に残り火かきなぐる

亡くなるほんの少し前に作ったこれらの句を今見直して、もしかして母は自分の死が間近なことを知っていたのじやないか、迫りくる死の恐怖と一人戦っていたのじやないか、そんなふうに見えるてならないのです。宗教も何も持たない母にとつて川柳はどれほど心の支えになったことでしょうか。今はもう星よりも遠くへ逝ってしまった母の魂に「母さん本

当に川柳をやつてよかつたね。」繰り返し繰り返し繰り返して呼びかけている私です。

悼 岩田美代さん

西山 幸

電話をしてもお声が聞けないし、便りを出してもお返事が来なくなつたけれど、気力を出して地元の句会には出席されていると聞き、これは何としても富田林の句会へ行って美代さんにお逢いしたい、と思ひながら日が経つてしまつていたことを悔い、自分を責めていきます。ごめんなさい。

美代さんに初めてお逢いしたのは、たしか昭和五十二年の大萬川柳大会だつたと思ひます。大島紬をすなりと着こなして、もの静かに座つて居られました。川柳を始めたばかりの私は近寄り難い感じで、たびたび呼名されているのを聞いて、素晴らしい人だな、と憧れの眼で見つめていました。

その後、幾度か句会や旅行で一緒にの機会があつても、やつぱり遠い人で、どこか冷たいときめている先入観を拭い去れないもどかしさをどうすることも出来ませんでした。

五十八年、尼緑之助氏の句集「生かさされて」の出版記念句会に出雲へ出かける夜行バスの中で、美代さんの方から話しかけてくれたの

です。手帳の最後のページに私の句

歳月やゆるし合うより他はなし

を書きながら、いつもこんな心境を願いつづけているので、この句が大好き、としみじみ話されました。温かく優しいお人柄に触れて長い間の先入観を心の底からお詫びしたのでした。「どつつきが悪いので、いつも損をしているのです」と言われたときの笑顔が忘れられません。

そして、この時から、心の通い合うお付き合いをさせていただくようになりました。けれどもまた、この出雲行が、美代さんと一緒に最後の遠出になつてしまいました。そういえば、この旅の間も、手術後の体調が思わしくない、と洩らされていたのを憶えています。夜の宴会も早目に席を立たれて自重、帰途、弘朗さんの句碑へ立ち寄つた時も、無理をせず麓で休んで居られました。

路郎賞、川柳塔賞受賞の実力を裡に秘めながら、華々しく振舞うことなく、いつも慎み深い美代さんを、それ故にこそ尚という思いで尊敬していました。「自分を知らぬ」ことで自分を制御出来る強い女性の一面をも持ち合わせたので、本当に見習いたいことばかりだつたのです。

闘病生活の様子を聞いて、病魔が何故そんな美代さんを苦しめるのか、と想像も出来ない苦しい明け暮れを案じていたのに、祈っていたのに、一度もお見舞に行かず疎遠に過

きたことをゆるして下さい。私の貧しい祈りは叶えられませんでした。

「虚々実々の生活の中で、せめてどこかに本当の私をさらけ出してみたい、そんな毎日を送っていました。妻であり、母であり、ヘアーザイナリーでもある生活の中で、せめてどこかに安らぎのあるもう一つの私をつくって見たい、そんな毎日を送っていました。そんなある日生まれて初めて、私の十七文字が、小冊子の片隅で、小さな活字となつたのです。

何も誇るものはないけれど

これらの一句一句に

まちがいがなく私自身がいると

いう事が――

これらの一句一句が

まちがいがなく私の生きざままで

あるという事が

それがせめてもの誇りでしょっかー」

凡九郎さんを通じて届け下された和紙和綴じの、むらさきの句集「縞かすり」には、

美代さんのこんなエピソードと共に、

花芯をのぞいて花を哀しませ 美代

染め替えて羽織は過去を喋らない 美代

はもちろん、本物の輝きをもつ美代さんの

句が、静かに激しく生き続けています。

生々庵先生と再会への旅に出ています。

岩田美代さん、さようなら。合掌

喝采の過去が煌めく縞かすり

幸

本社 一月句会

一月七日(水)午後六時

メンスフアツションセンター

荒れたトラ年から、うさぎへバトンタッチ。平穩無事を願いたいものだが、「丁卯」の年は過去、国際的にも大きな事件が起っている。世界大恐慌が六十年前の一九二七年。その前の二一八七七年には徳川幕府が崩壊、大政奉還がなされた。

恒例の前年度本社句会全出席者、並びに月間賞杯永久保持者(清水健司氏)の表彰が行なわれ、おはなしは西田柳宏子氏。

紙おむつは通気性ゼロ、地獄の赤ちゃん。と題する新聞記事を紹介、大人の発想で便利さだけを追求した紙おむつが、赤ちゃんの健全な発達を妨げるだけでなく、不燃物として公害問題まで惹き起している現実に警鐘を鳴らされる。また土居耕花氏の同人吟の虫六句草六句を引用、いたすらにひとりよがりの理屈っぽい句より、このよくな句に心惹かれる、身辺の生活の中に川柳があるのだ、と自論を披露された。

一月の呼名賞は奥田みつ子、小西幹斉、佐藤藤子の三氏。

月間賞は西出楓楽さんが獲得。(S)

(進行―天笑)(受付―年代・藤子)

(記録―射月芳・健司・山久)

出席者―笛生・白浜子・杜的・飄云児・芳子・武庫坊・年代・佳秋・紀雄・みつ子・照子・藤子・萬的・紫香・千代三・東雲・喜風・春蘭・敏・律子・池田寿美子・眉水・柳伸・一郎・水客・凡九郎・柳影・メ女・英子・天笑・季柳子・光代・白洋・幹斉・三男・憲祐・楓楽・鬼遊・射月芳・泰子・頂留子・文秋・美房・薰風・智子・岳人・健司・史好・和子・月子・栗・弥生・小路・度・勝美・隆二・吐来・あいき・作二郎・重人・太茂津・三十四

正坊・狸村・悦郎・勝晴・ただし・いわゑ、はつ絵・柳宏子・章久・白峰・規不風・きよ雄次郎・たつお・英壬子・冬葉・山久・愛論

亜成・吸江・甘平・雀踊子・寿美・美代子・寿子・千賀子

席題「盛り場」 林 はつ絵 選

盛り場を抜けてお不動さんに逢う 正坊
盛り場を真直ぐ抜ける阿呆らしき 笛生
盛り場をはずれ見付けて来たグルメ 小路
盛り場に可愛い男が待っている いわゑ
盛り場で買った鶏卵生み 英子
盛り場の裏にほんとの道がある 千代三

盛り場のうらドラーンを塗っている
盛り場で夢のつづきを見て飽かず
盛り場に転落の詩集落ちていた
盛り場で青いリングが熱れていく
盛り場で女ひとりが生きている
盛り場の昼のネオンと話す
盛り場のマリアも菩薩も愛に飢え
不景気な盛り場通り抜けばかり
盛り場で別れた妻が綺麗すぎ
盛り場でマツチを売っていた少女
盛り場で合図してからの破目である
盛り場を妻は知らないほうがよい
盛り場で何故か空しい日曜日
盛り場を抜け教会に辿りつく
盛り場のお不動さまに借りがある
少女の羽根が盛り場でうすくなる
刑場の跡根が盛り場の灯は消えず
盛り場の裏口知ってる苦勞人
盛り場に魔法使いが住んでいる
正月の盛り場何となく歩く
修羅越えて盛り場に城を持つ女傑
盛り場にある私一人の置き処
盛り場の隅でちいさな火をもやす
すぐ消える噂盛り場から拾う
盛り場の路地裏にある通の店
盛り場の隅能面の娘の八卦
場末の灯ジャバゆきさんの肌に触れ
盛り場の昼を焼芋屋が通る
盛り場で売れぬ絵を描く蝸牛

水客 月子 正坊 寿美 雀踊子 佳秋 楓楽 年代 英子 作二郎 藤子 亞成 作二郎 藤子 一 一郎 作二郎 悦郎 天笑 藤子 白峰 年代 きよ 凡九郎 水客 弥生 佳秋 甘平 笛生 紫香 飄云児

近畿文字放送作品募集

題「約 束」 森中 恵美子 選

3 句 締切 2 月 15 日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
 〒540 大阪市東区谷町2丁目36
 大手前ウサミビル3階
 近畿文字放送 川柳係

盛り場の造花は喜劇演じさる 楓 楽
 盛り場の隅でもベンベン草が伸び 柳宏子
 盛り場であくびをさせるゴヤの裸婦 作二郎
 盛り場もあしたのための詩がある 幹 斉
 負け犬に盛り場があり吠えている はつ絵

席題「パワー」 梶川 雄次郎 選

円高に日本のパワー知る世界 甘 平
 全員離島自然のパワー見せられる 敏
 L1のパワー主人は押えられ 三十四
 見るだけでパワー伝わる太郎の絵 杜 的
 朝八時アラットホームにあるパワー 健 司
 あの頃はポパイのパワー読みました 幹 斉
 やっさんのパワー毒っ気に当てられる 芳 子
 娘のパワー少し息子に譲れたら 英 子
 花岡鑑春のパワーが炎えて来る 年 代
 元旦からお店を開けているパワー 律 子
 住民パワー市長を替えた原子基地 杜 的
 王様が軽くみていた歩のパワー 芳 子
 打てばひびく内なるパワー信すべし 年 代
 オールドパワーこれから恋をするつもり 智 子
 鶏のパワーで軽く開く岩戸 憲 祐
 猛妻のパワーで記録産む男 芳 子
 あすのパワーをひそかに盛つてあるお皿 年 代
 ナナハンで男とまがうギヤルパワー 小 路
 どたん場のパワー信する妻がいる 山 久
 コマーシャルすごいパワーの好きやねん 章 久
 新人類のパワーが流れ変えて行く 文 秋
 パワーアップだんだん凶器になってくる 柳宏子

朝つけた鉦をちぎる子のパワー 英 子
 御神楽太鼓間に負けない撥さばき 萬 的
 リーゼントした頃のパワーはもつてない 幹 斉
 女傑一代のれん守って行くパワー 寿 美
 飲む話とたんにパワーの出る男 吸 江
 それがパワーさ終った今日へ明日がある 凡 九郎
 おふくろのパワーをけむたがる息子 月 子
 口笛はよせよパワーが逃げるから 藤 子
 七色のパワーいっぱいレオタード 諷 云児
 恋をしてこもも変つた娘のパワー 小 路
 職ひいて残るパワーで趣味に生き 照 子
 実年のパワーは朝の茶粥から 月 子
 二十世紀ウーマンパワーが地図を塗る 佳 秋
 小錦のパワーにゆれる果て太鼓 たつお
 誠実がパワーとなった棒グラフ 正 坊
 漬物石は母のパワーを知りつくす 作 二郎
 母親のパワーで包む身障児 愛 論
 売上げへパワーわが家の皇太子 雄次郎

兼題「代表」 小 出 智 子 選

教頭に呼ばれ代表帰らない 年 代
 禁酒会の代表で来て飲まされる あいき
 代表の様に一匹だけ釣れる 耕 花
 代表の辞でボクボクと言う 耕 花
 代表のリボンがとでもうれしそう 天 笑
 代表の焼香つづく名士の死 三十四
 私の代表作です二人の子 正 坊
 代表で叱られに行く目がきれい 重 人
 代表は急きもあわてもせぬ態度 矢 名

礼服がロッカーにある事故係 鬼 遊
 言い出しつ尻が結局鈴をつけに行く 寿 美
 猫に鈴付けに行く籤ひき当てる 美代子
 選ばれて来た代表の面構え 女
 代表になって打たれる釘の数 だ だ だ
 代表に任せ暫く黙つてる 光 代
 代表がすぐに名刺を出したがる 白 溪 子
 代表を狙う男に隙がない 失 名
 反対の代表で来て丸められ 耕 花
 代表にさまざまあつた風あたり 年 代
 代表の釈知即答などしない 憲 祐
 道化師になる代表の胸のバラ たつお
 代表の座を失った不況風 一 郎
 代表であやまりに行く草野球 みつ子
 代表が右を向くので右を向く 楓 楽
 代表へ見えかくれする七光り 萬 的

代表にされて貫禄つけてくる
日の丸にかけて代表燃えている
代表に巻は寒い風ばかり
出る杭になる代表の正義感
代表は順番どんぐり仲がよい
コキ使うつもりか代表押しつける
代表が首を並べただけで済み
代表を支える縁の下に居る
代表の指の震えが見えてます
矢面に立たねばならぬ胸のバラ
代表の以下同文にいる私
代表の男が少し喋りすぎ
代表になって出費の多いこと
代表で叱られている大きい子
代表はジャンケンホイで決めてある

兼題「揃う」 辻 白溪子選

もってこい声が揃った福娘
下町が揃いのハッピを着る祭り
足なみが揃うと仮面脱ぎ捨てる
町内中揃うて知恵が浮かばない
五体みな揃うていつも肩が凝り
金とヒマやっ揃うたくすり瓶
全菓を揃えて飾る鬼小屋
悪友が揃うて冬の橋わたる
足並の揃った雑兵怖くなる
片方の靴が揃えてくれという
めったに来ん顔も揃ったてっちり屋
手も足も揃うと阿呆になる踊り

三十四 笛生 作二郎 甘平 はつ絵 太茂津 水客 和子 天笑 和子 藤子 月子 律子 正坊 智子 敏 雀踊子 重人 文秋 太茂津 柳伸 敏 作二郎 雀踊子 度 天笑 千代三

養殖のハマチ大ききよく揃い
年金の札は揃える程もない
一族が顔を揃えて春の猪口
おしゃべりが揃い中味のない会話
六地蔵の前掛け揃うぬくい路地
三拍子揃うと油断など出来ぬ
善人が揃うてドラマ終らない
サングラス揃い無気味な街になる
二人揃うて来たのは理由がありそう
売れない役者も揃うお正月
なにもかも揃うとむほん考える
メンバーが揃うと決まる呑むはなし
パーセント突破防衛費が揃う
婚約発表芸能記者がみな揃う
花びらが揃うと棘が深くなる
断崖に靴が揃えて置いてある
負け越しも混る三役揃い踏み
粒揃いなど新人おだて上げ
膝がしら揃えて娘らしくなり
土壇場で口を揃える策を練り
冬鳥が揃う昆陽池雪になる
一族が揃うと先祖の灯がゆれる
終電に見なれた顔が揃うてる
初会議見飽きた顔がまた揃う
大物が揃う目白の三が日
嫁ぐ娘に団地に似合う荷を揃え
家族みな揃う土曜の鍋料理
喪服まで揃えて縁を待っている
金のいる話になると揃わない

笛生 耕花 射月芳 楓楽 たつお 柳影 水客 佳秋 いわゑ 冬葉 柳影 いわゑ 笛生 たつお 健司 射月芳 眉水 萬好 史好 小路 紫香 幹齊 山久 諷云児 たつお 喜風 智子 智子 雀踊子

二次会は足が出そうなのが揃う
兼題「耳」 笠原吸江選 白溪子

耳学問女のうぶ毛光つてる
地獄耳滑った口を受け止める
わだかまり解けて素直な耳になり
野仏もきき耳立てている噂
背信の足音を待つ冬の耳
耳たぶに甘いことばを溜めておく
後家さんが孕んだそうな地獄耳
耳栓にしても聞こえる神の声
雑音で重たくなった耳の穴
神様のミス福耳の下足番
王様にしては哀しい地獄耳
耳底に侮辱はしかと溜めている
熱い吐息も受けている耳飾り
耳をすませば二人の伸へ雪が降り
耳もてでノラが私をそそぐのかす
凡人の耳は雑音ばかり聴く
善人の飼う番犬の耳が垂れ
都合よく聞えぬふりが出来る耳
損になる話は耳に溜めておく
福耳と言われ不渡りつかまされ
檻の象人間不信の耳を振る
眼と耳をふさいで明日を考える
おびんづる様の耳は午後から温うなる
聞いてなかったとやさしい耳になる
難聴になって元気な顔の艶
補聴器をはずしてしらん顔をする

重人 庸佑 美代子 玉恵 たつお 楓楽 耕花 博子 健司 雄次郎 幹齊 笛生 千代三 千代三 藤子 楓楽 耕花 白溪子 狸村 岳人 美房 健司 作二郎 幹齊 規不風 雀踊子

耳打ちの秘策はあてにせぬがよい
聞き耳へ世間の灰汁が寄ってくる
補聴器を外して神の声を聞く
イヤリング二人の秘密見ていたり
善人の耳は騙され易い形
福耳があてになつたり外れたり
明日の地球を唾つてるパンの耳
宰相の耳に届かぬ民の声
銃声が耳底にある父の耳
王様の耳税の重さは聞こえない
聞くだけの耳で頼りにされている
福耳に晩年の夢描いてみる

兼題「初」

西尾

菜選

六十二年のロボットになる初仕事
割烹着はずした頃に初明り
初釜に理屈は要らぬ湯がたぎり
初デート終始無口で時がたち
いまさらにこんな初夢見ようとは
てつちりを初めて食べて眠られず
初鏡八十の顔は皺ばかり
百万の詣でに神の痴呆症
初対面大阪弁ではとす
初心者素質を見抜くいいコーチ
初めからピエロ演じて負けている
初春がずらりと並ぶ書道展
初対面の人と思えぬ趣味仲間
初会議正月ボケがまだ続き
初日記命だんだん重くなる

佳秋 芳子 武庫坊 いわゑ 三十四 年代 律子 和子 隆二 みつ子 年代 吸江 千賀子 美代子 吐来 愛論 年代 耕花 綾珠 笛生 愛論 千代三 楓 美房 智子 月子 みつ子

初場所の柁に和服の似合う女性
初雪は昔むかしを恋しがる
喪に籠るおんなへぬくい初便り
初釜へ精一杯を着せて出す
初版本僕にも値打ち分らない
旅立ちの朝にしつけの糸を切る
退院日初めて癌と知らされる
初対面すでに氷山ゆれ動く
初めから親をあてにせぬ事だ
初心者へ山のタブーが厳しすぎ
初詣で金婚ですと申し上げ
初めから破綻の見える恋でした
初夢も見ず美しく老いてゆく
茜雲初心の頃を懐しむ
初便り母にとどいて蜜柑刺く
初めての出逢い乾いた声だった
賽銭が背中当たる初詣
初釜をおえてペーターベンをきく
一駅を歩いて山の初時雨
初耳でなんと女将にとほけられ
初日の出だけは拝んでみる無職
初舞台それは天満のストリップ
初詣の列に交つて考えず
永字八法初心に還る墨の色
初めから神の死角で生きている

英壬子 幹齊 たつお 庸一 史好 健司 市雄 寿子 雀踊子 千代三 三十四 和子 水客 智子 作二郎 英壬子 柳影 藤子 池田寿美子 杜的 月子 鬼遊 柳影 小路 楓 樂

〈訂正〉1月号92P中段「宴」の第一句
十二月八日偲んでいる宴 英子 ↓ 英壬子

川柳わかやま
一二百号記念川柳大会

とき 昭和62年4月5日
ところ 紀の国会館 2F

兼題 「愛」 「星」 「花」 「男」 「面」 「女」

特別課題 (事前投句・3月10日〆切)
「これから」 野村太茂津選
出句締切 一時(各題2句)
席題 なし・投句拝辞

小出 智子選
中田たつお選
黒川 紫香選
森中恵美子選
田中 好啓選
橘高 薫風選

主催 川柳わかやま吟社



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

菜の花句会

高杉 鬼遊報

コンニャクは三角に切る関東煮
さかさまに電池を入れる老眼鏡
取り立てへかたちを変えて攻めてくる
乾電池とても正直だと思ふ
十万円金貨手放すクリスマス
世間みな敵にまわして子をかばい
クリスマス男を変えらることにする
子を産んだひげめが親にちよつとある
流された街で独りのクリスマス
卵抱く親鳥の目が綺麗だな
電池切れ石器時代の絵に戻る
かたちだけ守る船場の三代目
無精卵知らない儘の市場籠
京菓子に四季の味あかたち
卵酒恋になりそつ導火線
髪形を変え休日顔になる
聖しこの夜尼僧とワイン飲み明かす
ひげ半分剃った処で電池切れ
蟻の列動かかたちを崩さない

健司 律子 鬼遊 頂留子 冬葉 射月芳 糸葉 柳宏子 雀踊子 喜馬子 勝美 悦郎 柳伸 壮之助 蕉露 美幸

尼崎尾浜川柳會

春城武庫坊報

年末の五分が長いバス乗場
借金をやつと返して年の暮
あれからは子育てだけの三面鏡
あれからは病みつきとなる馬券買い
孫誕生あれから軽い姑の靴
迷ったがやはり月並な柄にする
ネクタイの売場で迷うアレセント
迷うてる熱いお茶でも入れようか
三味線を弾く女マッシュョンに越して来る
診察の医者のおくしやみを見てしまふ
公園を借景にして兎小屋
神様はときどき願い破ります
約束を破ってからの旅の風
頑固さを破ると青い空がある
野良猫に破れ世帯を覗かれる
新聞紙破るのが好き二つの児
鍛練でまたもや破る新記録
一枚の切符を破る待ちぼうけ
宅配のおせち料理に決めている

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

雁がきて越後は雪を深くする
老化した目にうつくしいひとばかり
歴史にも白い頁のままがある
割り勘のデパートで着つ若い恋
敗戦の歴史に飢えた日の日記
一本杉村の歴史を空にする
新薬の街に歴史の虎張り子
あなたと私の歴史が揺れるカフェオーレ
戦国の歴史見て来た野の仏
裏面史の謎を喋らぬ女墓
権力がまた書き変えている歴史

十四郎 よしつぐ 佳秋 いわお 弘治 貞吉 江美 夢之助 紫香 すみ 昌子 寅之助 牧郎 武庫坊 貞男 向西 文人 札子 歌子 慶三 湖風 雅士 美影 弧舟 章久 律子 勝美 雀踊子 柳宏子

焼芋をふところに入れ夜学の子
焼芋屋ギヤル大声で値切つてる
焼芋が飽食時代に生き残り
焼芋で喚声あがる保育園
やきいものうまさ知ってるレオタード
売り声もテロップまかせの焼芋屋
割勘に女ジョッキを空にする
義理でする祝割り勘の仲間入り
京都塔の会 松川 杜的報
宿の灯を映すほかなし雨の湖
逆ろうて構えてみても歩は歩なり
秋の仏に少しロマンを聞かされる
国宝の屋根愛の巢にして鳩平和
セールスマン街の乾きにはや気づき
喫茶店家での話まだ続き
朝からの木魚誰かのお命日
引つ込みのつかぬ頭を撫でておく
水々しさが足の裏から失われ
風呂敷から秋がコロコロ零れ出す
抜け殻の様に浮いてる朝の月
精一杯泣いて笑うて乳を吸う
運がよくバスが遅れて来てくれる
京料理秋の深さを彩にする
立て膝の色香の芸も村芝居
ジパンでは娘の立て膝もただの脚
立て膝の仏異郷を想う顔
背かれて泣く立膝に秋の風
立て膝のきげんがわるい長火鉢
立て膝の女に出逢う夜の画布
立て膝になれた飯場のコップ酒

綾珠 三十四 千代子 喜一郎 度 頂留子 喜風 愛論 求芽 諷云児 達子 和友 芳的 紫香 年代 武庫坊 花代子 花村 はつ絵 水客 三求 美徳 め女 為子 静子 静江 かすみ

湯上がりの立て膝妻もまだ女
柿の葉すし南朝悲話の沁みる味
齡とつた磁石南を向きたがり
ヤシの実が南の童話棄せて着き
ガイドブックの手に洛南の秋深む
南の里惚ぶみかんの皮を剥く
南の陽射さぬ住まいの置き棄
来た嫁は新人類です気楽です
貧乏と同居して居る楽天家
ひとりぼっちの気楽さと淋しさと
一歩引き眺めてからは楽になり
楽に死ねる薬は医者が握ってる
築山が優雅な歴史物語る
楽水苑紅葉がこころに欲しい池
お茶の木の種拾うのも京の庭
楽水苑春のさくらを幻に
楽園の入口にある落とし穴

打吹川柳会

奥谷

春子 栄 満津子 飛鳥 光代 英子 シマ子 笑女 三男 紀美女 白李 佳秋 白溪子 萬的 光子 千寿子 弘朗報 節子 早苗 美智子 英治 亮二 舍人 高代 佳女 康子 雄々 善政 梅朗 道子

式急ぐ待つては呉れぬお腹の子
近づいた故郷信号の長い赤
急いで女のみ紅を引く
白無垢を若さが彩を塗り急ぐ
父危篤特急便もどかしい
一度吹かぬ人生だ急ぐまい
打吹川柳会 奥谷
石一つ投げて波紋を確かめる
白鳥の波紋大きく飛来する
たまに着る紋付見とれ母惚ぶ
大詰めは葵の紋を出す場面
受け継いだ家紋重たい鬼瓦
野次だけの議員も金のご紋つけ
骨董の古提灯で紋威張り
旧地主時は色あせ倉の紋
ネクタイに家紋の由緒まで示し
大砂丘紋残す風の私語
菊花御紋知ってわが家の紋知らず
北風に風紋千変万化する
傷つけてならぬ家紋は姑が拭く
風雪に耐えた家紋の鬼瓦
英才教育の紋がもの言う家の格
風才教官だけ重くのしかかり
机上プランだけで波紋おこらない
縫紋に母の願いをこめておく
由緒ある家紋老舗の顔となる
川柳高知 川竹
論ずるに足らぬ男と見た中座
忠告と言うにはとげがありすぎる
留守番のたいくつがさす耳掃除
老人のパワーを試す歩道橋

菊枝 宗光 白峰 巡歩 弘朗 規仔 舍人 幸枝 善政 宗光 梅朗 吉朗 柳風 節子 英治 巡歩 早苗 白峰 高代 雄々 とみお 道子 弘朗 佳風 房恵 竹萌 かず子

にくい人おんな心を知りつくし
古時計ねじ巻く父も達者です
五分がゆに不満がつる快復期
食うだけの暮しへ重い交際費
食飲の秋減量に背かれる
ご近所の義理でしばて町議選
ご近所の噂も提げば市場籠
ご近所の葬式一日休まされ
真夜中の近所気つかう救急車
知らぬ人らしい近所の犬が吠え
川柳ささやま 脇田 米朝報
振り上げるその手にもある母性愛
無器用な手を慰める千羽鶴
転んでも素手では起きぬ意地一つ
耕せば土に詩あり農夫の手
面影は野菊のままの恋であり
面影をしのべば何時も亡母がいる
面影が残った父のちびた鍼
面影は尽す女の箱枕
退屈を安売りしても売れ残り
退屈が退屈連れて来る碁石
退屈に立てば退屈など出来ぬ
退屈を憶え退屈間近なり
若い時これで人気ありました
人気も何処へ行ってもソツがない
片言で茶の間をわかつ人気者
好きやねんおかげでえらい人気です
Y・F・C川柳会 人見 翠記報
枯葉ふむ足につたわるハーモニ
初詣で兎の袴巻き手を引かれ
卯の年や平穩であれまめであれ

俊子 春枝 節子 菊野 朱坊 千功 松風 草風 三吉 文平 靖子 米朝 朝子 越山 久乃 エキオ 百合子 ひか平 千代子 富子 久美 八重 栄太郎 和子 可住 紅葉 房子 泰州

サイコロのどの目が出ても吉とする
波の音風の音かとハワイの夜
士一升金一升の兎小屋
風邪引きの孫へつくった雪兎

川柳ねがわ

高田

博泉報

運動会ハイハイしてた孫の顔
野ら夫が人を追い抜く赤信号
七草に汗ばみもなく秋のよき
月あかり虫のお宿はどこにある
古都ゆれて坊さん合わす手もそぞろ
隠居してからが人生忙しく
人生のインターチェンジを降りたまま
隠居まだするには早い父の腕
辞表出す決心出来ている口調
電話ではやさしい嫁で病んでいる
逢うひとが居てご隠居のベレー帽
決心をしたのか階段降りて行く
隠居だからとて耳は遠くない
日曜の朝を高鳴る洗濯機
核ボタン押す決心はせぬように
国鉄も遺産仕末でもめてます
能力はないが大坂で活かされる
大阪へ帰つてうどん食べ直し
天皇と財テク金貨で結びつけ
けんかして東京に勝てぬ大阪弁
実印はしかと納つてある隠居
隠居したのに恋人できちまい
人妻に泣かれシャックリ止まらない
よく見ると金貨がボクを嗤つてる
お隣の隠居が菊を見せにくる
六十年ご苦労さまと出る金貨

よし津
翠記
豊平次
節子
友子
吉峰
紀代
なつみ
権太
よしひろ
山久
創吾
曲ん手
杜的
勝美
眉水
一菁
敬山
波留吉
菜月
藍子
勇太
君子
とし
敏夫
速水
勝一
まさお
一途

自販機の夢に金貨で出るビール
決心も早いが諦めも早い
宅急便ちよこちよこ届き樂隠居
なにことも無ければないで酒を酌み
盆栽が父の隠居を待つている
欲が深くて妻を娶らぬことにする
真中へ隠居の座る場所を取り
子を五人連れて金貨の列にいる
ペンダントの金貨冷たい顔でいる
決心がつくまでお茶を継ぎ足して
深い訳ありそうでお茶を継ぎ足して
道具屋筋歩いて脱サラしたくなり
金貨には縁なし朝の定期券
だみ声の大坂弁を厭うなり
金貨手に未来の歩合い試算する
大阪で儲け京都で暮す夢
大阪で咲いた恋ならすぐ萎む
日なたはご隠居のミイラ出来そうに
隠居してゲート・ボールに忙しい
真つ白の障子へ信じ合う夫婦
離職の決心ついて男の顔になり
更年期らしく勘忍してくれず
金貨の列を鼻で笑って出社する
隠居さんですかと女中酒を酌ぎ
人妻と画像ならば見に行こう

あやめ
かすみ
光子
てまり
冬葉
シマ子
鉦平
萬的
博泉
亞成
頂留子
静歩
英壬子
晴風
吉之助
三千子
度
亜鈍
磯
あいき
小路
柳宏子
紫香
薰風
植山
武助報
狸村
加代子
浪速子
一弥
希久志

能弁の話に心奪われて
ここだけの話がここでおさまらず
年月が笑話にしてくれる
寒い話をジツと聞いている水中花
夜の庭金木犀のほしいまま
モーツアルト独りの夜長満ちている
酔い醒めの柿甘かりし紅葉狩り
大島はもう御神火ではない恐怖
女ばかり男の旅は絵にならぬ
有難くない誕生の新火口
地獄絵と見まごう噴火の三原山
生き伸びただけの哀しい冬の蚊よ
郷土愛からめてローカル線を死守
一步譲つて話のもつれ解きほぐす

暁子
富志子
武助
甘平
圭一
寿美子
実
ゆずる
通彦
春榮
ひで
佳生
白光子

佳句地10選 (前月号から)

有働芳仙選

遮断機が降りて約束重くなる
奥様がお産みになったような狝
木枯らしがあなたの声で戸を叩く
耳栓が優しい顔にして呉れる
能面を眠らせ蔵の戸を閉める
喝采の影でピエロの素顔みる
冬の絵に亡母が渡つた橋がある
そろばんに合わぬ律義が捨てられず
辻褄は終焉までに合わせます
好きやねんそれは素顔でいう台詞

糸葉
佳代子
千万子
昭代
好啓
由梨
雀踊子
俊子
博子
鬼遊

悲しみがまつわりついでいる民話
御在位の金貨は一枚だけでいい
客筋がそれぞれ違う港町

むらくも川柳会 藤井 明朗

伴せは美人の妻がいてくれる
ふくよかな心の美人誰も好く
旧友の顔はわかるが名を忘れ
舌つづみ味が疲れを忘れさせ
茶話がはずむ炬燵の大笑い
箱の底しまつて置きたい夢がある
忘れぬ悲しみ抱いて年を越す
年越しのそばを重けて共白髪
笑つたびのぞく糸切り歯がいと
忘れろと言われたい想いなおつる
嫌な事忘れて早く立ち直り
世は豊か忘れた物も探さぬ子
女客部屋中笑いひびかせる
笑い声勝つた負けたのかるた会
もてもての美人噂の中にいる
父親の偉大さ小さな箱で抱く
好きな蕎麦一番先に箸をつけ
につこりと笑つてみたが何処の人
景気とは別にそば屋の大晦日
幸せをそつと小さな箱に秘め
握り箸挿へするする蕎麦が逃げ
わがままを許さぬ母のよい躰
愛という一字が心配消してくれ
万引もスリもお客の顔でくる
地球から松が消える心配し
心配がふえて娘も年頃に
わがままな患者看護婦こまらせる

射月芳 さまよ子 操子 朗子 文朗 明朗 竹乃 林蔵 是代 マサコ 延子 みどり 秀一 よし子 福子 ヤス子 千里 武衛 吉野 和幸 百代 義良 明朗 正朗 芳子 峰雪 ゆき子 由郎 三津江 雪路 昌子

客の舵上手に取つてバーのママ
里帰り充分わがままに帰る
客もなく一人静かにお茶を酌む
客は神心で信じてお茶を入れ
わがままに育てて困る親の愚痴
わがままな娘嫁がせ心配し

熊本川柳会 有働 芳仙

友情は口約だけで質してくれ
横文字が田舎をすつかり変えにくる
咲いたから待合所にいる植木鉢
解らないまま宿題と子と眠り
レストランのいびつな席の温かみ
手づくりのいびつな籠でほかする
吉報へきさら光る茹で卵
頑張つてと肩を叩かれハネムーン
混浴の穴場で売れる週刊誌
妻の座につくや飼育の鞭握る

高槻川柳卯の花 辻 白溪子

ベッドでは言えず廊下で拭く涙
病院の廊下どこまでも静かなり
廊下のカメラが忙しむ牡丹園
足音をさせず廊下を通る義母
出世頭はいつも廊下に立つた子
廊下より新生児室のぞかされ
廊下側の椅子で老後を考える
産声を遅いと待っている廊下
聞き捨てにならぬ噂を聞く廊下
病院の廊下で鬼とすれ違ふ
マンションを降りて来ました回覧板
おだやかな顔で人生の幕降ろし
婦唱夫随の妻から先に旗降ろす

巡歩 克子 よし美 緑水 ふみ水 幸子 幸子 真吾 アヤ子 宵草 伊佐美 幸子 昭代 俊一 一進 満雄 芳仙 陽露子 彰一 花代子 越子 河瀬芳子 よ志子 百合子 勝一 風云児 如洲 実男 草木 白李

肩の荷を降ろす障子の白い部屋
肩の荷を降ろしたどうし会う歯医者
終生を腰を降ろせる町に住み
とうの昔に降ろしています父の旗
児を降ろし背中へ寒い風を負う
肩の荷をおろした夫婦のまるい肩
荷を降ろす事をためらう父の肩
金借りた時は焼酎に湯豆腐と
湯豆腐で気楽に飲める友を呼び
湯豆腐を一家で囲む声になる
湯豆腐と酒と友あり京の冬
湯豆腐へ女将のきれいな京言葉
湯豆腐の湯気が結論急がせる
湯豆腐で妻もほんのりいける口
湯豆腐が冬の旅路をしめくくる
湯豆腐で温め合つてる国訛り
湯豆腐へ坐つて外人京が好き
湯豆腐へ遠慮しがちな母の箸
レンタルで親子着飾る七五三
浜辺には自辞書一人の海がある
もどかしい辞書だ深くを知りたくて
もうこれが最後最後に祖母が来る
初せりの蟹親孝行また遠く
病む母へ薬師如来の慈悲をこつ
道化師の鼻で今年も冬になる
茶を立てる余裕が出来てしを着る
利口ぶることを止めたら薬になり
金を追ひ金に追われる風の街

曲ん手 とおる 節子 智子 満喜子 萬的 斯ミ 市雄 勢鬼 散歩 紫香 杜秋 里子 英子 さと美 白溪子 松川芳子 種子 盛雄 杜的 秀男 惠美子 作二郎 房子 求芽 鬼遊 富枝 夕子 花子報 石垣

傷ついた犬にミルクをやつて見る
檜山へ白い道だけ辿ります

東の間に山を着せ替へ白い雲

自分史のページに故郷の雪しぐれ

水引草心の傷を抜糸中

傷ついた深さを思ふ桃の種

秋の眼に茶碗の疵が目立ちます

夕渚流木の傷やわらぎぬ

深手なら覚悟を決めて旅支度

傷ついた鹿が視野から消えてゆく

青柿の疵は哀しい口を利く

母の役目で天井の疵覆われる

疵口よ眠つてくれてありがと

風呂場から他人の傷を見てしま

創口にもう日ノ丸が立っている

白紙一枚白い樹海のまだ底に

西宮北口川柳会

奥田みつ子報

コーヒーへ誘ひ名曲聞いている

ハンカチがカラフル過ぎて泣けません

当然ころげ込む遺産目当てに来る養子

まわる寿司三回まわってきたのです

鍵っ子の絵ほのぼのと冬休み

遊び疲れて冬を迎えたギリギリス

緊張の放屁満場シンとなり

くれてやる娘の荷物運ばされ

洗たくの好きな女でよう翔ばず

当然の報酬妻は待っている

迷つて迷つて手袋やはり黒を買う

博識と優しさに打たれ読み終わる

遠く近く良い友達が居る余生

当然の粹が嫌いな青リンゴ

八重子

とも子

ふみ

瑞枝

登栄

伊都

時子

より子

花子

田鶴

てい子

日枝子

玲子

荒介

なみ

千代

白溪子

恵美子

千世子

しげお

照子

英子

三男

みち子

いわゑ

君子

てる

よし津

光代

春子

荒れた過去当然ツケが身を責める
ところどころインクの切れた闘病記

故郷の風が運んで来た噂

アルバムの昔は仲の良いふたり

誕生日のカード可愛いのを探す

まだ少し余裕があつて旅に出る

当然の人が見えない通夜の席

当然を当然と煮つまり要る勇氣

芋大根あぶく煮つまり冬おわる

当然のごとくに気付かぬ青いとき

献体の手続き終えた寒椿

当然がすんなりいかぬ浮世風

年ごとにむなしさを増す師走風

ニュートンに勝てず木から落ちた猿

もつれ糸解けないままに愛おわる

妻一人説得してる暇がない

友達は何のような人ばかり

すぐに緒がゆるむ一つの女下駄

師走風第九でゆるむ街の音

将棋下手考える余裕二歩を打つ

母の字で故郷の秋が運ばれる

運んではボヤかれ運ぶ孫の家

屋根の風季節を運ぶ音になる

当然の老いに落ち葉の違つて色

一円の釣りの当然祖母が待つ

悔しさを奥の奥歯に噛みしめる

吊り皮がみん欠伸をする余裕

ぬくぬくの味噌汁運ぶ何かある

晩学と言ふ名で余裕埋めてゆく

減量が過ぎてすこし目が廻り

充実の銀杏は踊つて地に還る

かすみ

半歩

園歩

笑女

静子

礼子

佳秋

紀雄

はつ絵

年給

きよ子

武庫坊

一郎

正坊

颯云児

太茂津

紫春

幸

よ志子

伊升

杜的

保蔵

求芽

和友

陽露子

幽香

散歩

正一

新造

俊子

鋤鎌を握つた頃の米の味
しゃべり過ぎ当然まねく勇み足

灯に寄れば人間らしい語がもどる

仏法は知らねど説こう人の道

にこにこと巽にはまつてやる余裕

真つ直にいつて当然ボリスの子

真ん中で尻尾振るのがいる不安

好きな酒好きな旅です自分流

人間の顔で私に意見する

又一歩の顔を見たら当然鬼が狂い出す

葉ぼたんの色冴えている今朝の霜

里帰りの土産は重い孫一人

当然の中に住んでた指定席

奈良の寺朱色柿の木よく似合い

ゼロよりの出発神と共にあり

振り向くと変な男が側にいた

横に振るのんは嫌いな首でして

定年の定期きつちり今日終わる

蛇口から水が出るとは限らない

設計図竣工祝いの床の間に

絵の中の少女に出会う散歩道

惚れられているので遅れて来る女

血が通う鬼だ当然泣きもする

神様の横顔を見て今日終わる

左遷地へ運ぶ荷物は何も無い

川柳後集

井上柳五郎報

二枚舌日本の政治支配する

客引きに使われ御神火が怒り

税制に粗い網目も用意する

減税の財源名を変え品を変え

テレビの外であればちゃんかかせたけし君

千秀

文夫

高子

ノブ

芳仙

一進

三枝子

盛雄

良征

百合子

勝美

市雄

静江

六郎太

博子

眉水

朝

曲手

みつ子

善太郎

貴代子

水声

萬的

水客

紫香

榮義

信義

葵丘

進平

浄美

やすえ

新しい気持ちにさせる白い紙
 新しいクレヨンで書く夢の城
 しつけ糸切れは新しい道があり
 新しい挑戦余命が鼻で笑み
 新しい母で馴染めぬ子守歌
 論されて流す涙に嘘はない
 母一人紅涙流していた昨夜
 流れつく岸には母の手がのびる
 みすばらし姿に昔の影とどめ
 慈母観音へ重なる母の姿こそ
 醜い神の姿に騙される
 索かれ行く牛の群れに西映え
 美しく映る鏡を信じよう
 故郷の水面に映る都落ち
 この扉開けると温い母がいる
 扉押す向うの顔はどちらかな
 手術成功扉の向うの笑い声
 決心がついて重たい扉押す
 左遷でも雑巾かけて出る心
 雑巾が孫のはだしを追いかける
 幸せな雑巾美人の足をふく
 馬鹿になれなれと雑巾に言われ

拓治 敏和 照路 たけ志 桃風 青銅 博友 柳五郎 紫峰 典子 草風 玉水 美智子 佐加恵 中 建 栄翁 鮫虎狼 秋月 吟平 哲郎 健一 小路報 柳右子 幸治 新造 国公 隆二 文秋 柳影 美代

記憶から消せぬ女の果し状
 老兵の記憶はお国なん百里
 義理欠いた友の表を遠回る
 敬遠をしない若さが勝っている
 トップの座譲ってからは病気がち
 トップ行くのレールは光ってる
 へソの緒に頼り胎児は鼓動する
 微笑んでおどけて雨の日の鏡
 鉢に水注いで妻のいい微笑
 あんたしかおまへんのやと頼られる
 悪友の記憶勘勘利しも添え
 記憶力ママは貸付忘れでず
 敬遠は飼犬だけのせいでない
 敬遠をされた理屈屋隅で飲む
 友達が来ないトップになってから
 屋台骨ゆらぐトップが決まらない
 落ちぶれた俺だが妻が居てくれる
 甲斐性ない兄で頼りにされている
 微笑せず喋らず飲んでばかりいる
 ライバルを軽くいなしている微笑
 斬り捨てた男に微笑だけがある
 青いリングを記憶からとりのぞく
 出雲路に記憶の中のかね雲
 敬遠はよう知っている咳払い
 ビフテキを食べてトップの座を狙う
 鎌倉に頼れる穴を掘っておく
 微笑する男を哀しいなと思つ
 蘇える記憶に補聴器掛け直す
 二次会のメモが回ってこぬ一人
 トップから降りると楽になれるのに
 頼るものがあるから島の舟に乗る

雀踊子 善信 美幸 凡子 素灯 甘平 市章 恒明 喜風 花仔 美津枝 美一 八重野 柳宏子 覚然坊 笛生 千代三 あおい 壮之助 冬葉 勝美 翠公 智子 東雲 曲ん手 眉水 恭太 重人 作二郎

目立たぬように微笑んでいる夫婦
 執念とも見える老婆の記憶力
 引退の時期考えるトップの座
 秋の天よと頼り切る話すこと
 一枚の葉に笑り切る池の蟻
 懲りもせずまた頼まれたお人好し
 鬼の目に記憶は悲しいものばかり
 ラブになる予感敬遠する誘い
 喝采の中に微笑を忘れない

久世川柳クラブ 二宗 吟平報

白兔 頂留子 浩一郎 惠美子 博子 庸佑 萬的 柳伸 小路 甫正 藤江 静香 千代女 光水 さわえ 江山 保恒 英峰 山人 禅心 妙誠 種子 勝子 寿楽 吟平 つた子 美恵子 志重 定山

クリスマスカードを添えてプレゼント
一枚のカード人生狙わせる
花カード咲かせて帰る元気な子
商品券好みに合せてよろこばれ
採血の結果案じて待つカード
人事課のカード本音をみな話し
初霜に一人映えて滝紅葉
木枯しが惜しい紅葉を持って行き
低い鼻愛嬌あつて親しまれ

川柳わかやま

堀端 三男報

納まりが付くお腹が空いてくる
納めるもの納めた胸へ空の青
腹の虫納める酒を飲んでます
納骨の高野は斜めに雪が降る
何事もまるく納めて母は古い
ぼろぼろの扇子で今年の舞い納め
千羽ツル納めて奇跡へ千祈る
人形がまた売れ残る年の暮
日暮れから夢ふくらまず花もある
終幕の素顔に戻る暮れは古い
暮れ残る陽を恋うるかに船をまつ
何事も無かつたように年が暮れ
日本中の時計が暮れへ身構える
祈りにも似た瞳で暮れてゆく詩集
好調の路線に小石置かれてる
好調は尚も続くと見る誤算
好調へ浪費する人貯める人
好調になつてボツボツ人の世話
病床の好調順に朝の声
儲かりまへん肚ではにっこり好調で
好調に行けば嫉妬の風が吹く

知代子 伊久栄 雅紅香 秀ゆ草 虞人 ぶさえ 邦人 雪花 三男報 正男 克子 登志代 雀踊子 雅子 三男 忠雄 武幸 太茂津 つる子 白光子 寿子 狂虎 栄美子 凡太 正博 千寿子 信子 恭子 政一

絶好調の手からこぼれるボカが好き
鼻唄で敵が王手をかけてくる
好調なクラブにはずむチビの靴
快食快眠ジョンガラの俺のもの
好調へ便乗出来ぬ一本気
好調の笑顔へ忠告言いそびれ
自画像に自分を裁く目を描く
海あおくふかく裁かれまいとする
退屈な私を裁く冬の薔薇
自らを裁く一つの業を負う
良心の裁きに眠れぬ夜が続き
自らを裁くに灰汁も枯れて古希
先ず自分裁いてからの一言ヨ
神だつて人の世ばかり裁けない
裁くのは私聖書を読みかえす
裁かれて償いきれぬ傷を管め
曲げられた歴史を裁く筆冴える
裁かれて暫く続く食養生
ユーマアを混ぜて裁いたお人柄

わかあゆ川柳会

小砂 白汀報

言訳に御樽一荷ついてくる
ひとり住む母を助けぬ天才児
言い訳は困る誠意を見せてくれ
沙魚のバカおんな子供に騙されて
食卓の上でも睨むハゼの目よ
沙魚釣りの糸にまつわる鱗雲
言い訳を四捨五入して受けておき
手応えが沙魚と異なる期待感
デートするハゼを夢中にさせた罪
言い訳に一本釘を差しておく

康勝 英秋 佳秋 きみ 紀久子 保夫 萬的 道夫 紀美女 柳宏子 凡九郎 隆積 緑良 精彦 天彦 輝子 公子 照子 ヒテ子 三和 翠星 世似 聖子 笑子 民子 英子 鈴江

沙魚を釣る親子に断絶などはない
老いれし生きとればこそ友來る
ポケットのマツチに言訳裏切られ
ハンドルを離せばやさしい目に戻り
ハンドルにあそびがあつて疲れない
和解除する鍵がどこにも見あたらぬ
幸福の扉の鍵は感謝です
神様も養銭箱は鍵をかけ
歳の鍵番頭老いて別れ告げ
嫁ぎ行き重たい鍵を持たされる
カギのない戸口ツパリうんと押す
一杯の酒が心の鍵を開け
玄関のカギはしつかり首にかけ
医師の掌の中に一つの鍵がある
急げども忘れてならぬ鍵とガス
幾久し老母が鍵盤鳴らす朝
口説き上手に大事な鍵を盗まれる
隠居部屋孫が騒ぐと鍵を掛け
川柳唐津支部 久保 正敏報
自然保護鶴も安塔の里を知る
筋道を通せば謀叛の旗になる
青春のロマンを秘めた桜貝
土器も光つてみたい釉
例により数が合わない年賀状
白髪が研修会を支えている
タレントは涙上手に使い分け
発禁の伏字あるから読みたがり
日が落ちて鴨帰れぬ波浮港
水入らず男一人の疎外感

聴障川柳 豊作報

久保 正敏報 掬水 久仁於 朴竜 多駄子 四郎 あき 虹江 旭明 恒敏 正敏 河内 月子報

挫折して花屋の花で眼を洗う
 毛虫にも望みがあつて木に登る
 遭難の垢ふかぶかと湯にひたる
 千日回峰垢がまぶしい紅葉期
 花の実は開かぬままで職を引く
 お喋りの隙間タバコがうめてくれ
 散歩道ゆきずりなれどいつも逢う
 妬くそぶりたまたまは見せて蛇をとり
 つまずいた女の足袋は喋らない
 もう一度喋ると怖い父となる
 垢を見てまだまだ生きたい欲を出し
 パートです笑顔もここで時間切れ
 ショーで見るアクロバットの鮮かさ
 花活けて献体の記事読みかえす
 病院のベッドで涙もろうなり
 悪がきの面影消えて孫なつく
 ばん鐘へ心の垢を流す古都
 孫が来て部屋の掃除を置いて行き
 無病息災南天の実が赤い
 堰切つたように時効が喋り出す
 色の無い空気がうまい里の秋
 擬宝珠の乾漆剥けてお喋りな

三幸川柳教室

桜井

千秀報

静夢 礼子 天樹 作二郎 諷云児 文夫 玉子 みち子 かすみ ときお 幸次郎 かね子 晴子 定人 美代子 春子 伊三郎 杜的 伊升 佳秋 はつ絵 千秀報 玉枝 みね 愛子 孝子 千香子 美子 千枝子

長男の糸目黙って切つてやる
 翔ぶだけは翔ぶが長男はばたけず
 兵役もなくて長男漫画みる
 長男は腕こまぬいているばかり
 豪華船入港私は明日の米を研ぐ
 思い出は今も港の見える丘
 バタヤんが立つとかもめが飛んでくる
 帰る日を待つて港の灯を消せず
 がむしやらに漕いで港が遠くなる
 少年の港でいつも帆を上げる
 無精者めくれるペーリ顎でとめ
 遺産分け無言で腹のさぐり合
 無医村だけれど長寿の山の里
 本当の怒り無言で通し切る
 木槿散る諸行無情というけれど
 年中無休妻の寝顔をそつと見る
 川柳塔まつえ(12月例会) 恒松町紅報
 忘年会みんな揃つて呑める顔
 集合に遅れた家に走らせる
 集合時はばむラッシュに気のあせり
 集合をすれば一杯のむはなし
 集合に遅れ運よく生き残り
 集合に遅れて輪からはみでてる
 駅集合表と裏でまごつかせ
 八百万神集合の稲佐浜
 淋しくて花に集まる仏たち
 集合にやつと間に合う妻を持つ
 集合時間律義で靴の光り増す
 鈴つけた財布は子供のポケットで
 男気を出して財布に笑われる
 大金を抱いた財布の不眠症

三千子 隆行 静 智水庵 百合子 鉄治 重次 和子 桂保 力 忠昭 靖子 千秀 文子 邦郎 寿美子 市雄 笑円 ノブ 雄々 美治 鳳人 吾作 昭二 正朗 嘉寿子 みえ 貢範 桂子

不景気の風は知らない子の財布
 ふところの中で冷たくなる財布
 家計簿に財布油断を指摘され
 財布だけ立派で中味は乙なもの
 松葉がニ食える身分かと財布言
 孫の顔見れば財布がゆるみ出す
 遊び呆けサラ金沙汰の空財布
 財布とは名ばかりつけの溜まる場所
 枯れてゆく花の余韻を大切に
 長い橋渡つて余韻まだつづく
 木魚の余韻悲しく母は逝く
 梵鐘の余韻に冬の雲走る
 入賞の余韻に酔って歩けない
 美しい余韻を秘める花言葉
 終着駅余韻のリズムで電車着く
 釘一本たらぬ余韻が遠ざかる
 また逢うて見たい余韻をくれる人
 短冊の裏に余韻がにじみでる
 感激の余韻にひたるとじ楊枝
 枕交わし忘れられないひととなる
 ドンチャンで今年も終る年忘れ
 うき事をみんな捨てたい忘年会
 忘れ難いものが心の髻にある
 花言葉すこし離れた冬の壺
 古里に埋めた名前忘れられない
 宅配の夢が檜山まで続く
 親の脛噛む宅配から抜けず
 宅配で届いた柿は裏年か
 宅配と一緒に帰つて来た息子
 宅配が届く淋しい母の膝

ちかし 醉夢 多賀子 翠星 静翁 満江 育子 友子 弘円 静江 登美也 妻恵 静恵 天痴人 三男 代仕男 愚童 患子 巡歩 風子 長三 千秋 千代 荒介 瑞枝 壮樹 鶴丸 町紅

城北川柳会

神夏礎道子報

十二月忠臣蔵がまだ映る
酒好きは泣くも笑うも酒にする
おたかさん真似る熟女のイヤリング
恥ずかしい茶席の客にかしこまり
トネルを抜ける時雨でいる湖北
忘年会拍手だけでも芸の内
正論を言えば困った奴にされ
顔見世にだらりの帯や京師走
師走の声耳もせわしくなつて来る
血圧の薬も飲んで旅の夜
耳が鳴る他人に言えぬ音がある
二度聞きがいやで頭を振つて置く
家計簿に予定が狂う十二月
たわいない兎で妻は年女
漬物も心の味を伝えたい
散る紅葉みんな絆をたしかめる
帰郷して四人の友がまだ残り
席ゆずる娘は菩薩かも知れぬ
世間から騒がしく成る十二月
合掌の間聞てエゴが覗き込み
夫立て自分の株も上げ先の妻
日曜も母はやつぱり先に起き
来年の暦へ黒丸信じない
散歩道秋の名残りの菊かおる
砂舟の暮しを覗く天満橋
綻びも精巧に老母の針たしか
言訳につまんで眼鏡ばかりふく
達者だけ取柄で幸せだと思つ
絵心をゆさぶる雲が美しい
縄電車皆んな淋しい鍵を持つ
冬至来る南瓜柚子湯と亡母恋し

綾珠 繁子 トキヲ 佐津乃 節子 文子 ふみ 祥恵 炉斉 新一郎 正之 温之 市郎 類一 晃世 テルミ 仙吉郎 久留美 道子 悟郎 明美 ふさ子 純子 寿美礼 達子 登志代 右近 倫子 静子 静歩 有佳

丸まった背からロマンが消えて行く
干柿のゆらゆらゆらと冬陽抱く
寝る姿覚える姿も見せぬ母
約束を覚えて居るのは小指だけ
みとや川柳会 山根 峰雪報
貧しくも鯛一切れの大晦日
寒鯛のトロで一杯舌鼓
日本海魚のうまさも鯛で知る
鯛一本老人二人もて余し
故郷の鯛の粕漬け舌鼓
年漁しへ欠かせぬ一つ鯛を買つ
大越の鯛で賑わう浜の朝
柿年でカラスも飽食して残し
柿の木を記念に植えて子に伝え
廃屋の庭にたわわの柿かなし
木守柿烏がお礼を言つて鳴き
不運でも根生一筋世を渡り
幸運に酔つて不運に気がつかず
豊ともくせい川柳会 田中 正坊報
目をとじて帯を解く音聴いてます
細帯になつて自分を取り戻す
女一人灰皿を出す客もなし
重役会社長禁煙したという
コーヒもいいが玄米茶の香り
花時計可愛い嘘にだまされる
身を徹し貫く嘘の崖つ湖
嘘で済む事なら母をだましとく
嘘ついた事を女はもう忘れ
嘘の知恵妻か借りつてついで見る
大相模あとも一つも一つ

白峰 ただし 公一 満津子 峰雪報 ふみ女 緑水 梅園 三津江 よし美 みどり 文子 峰雪 なつえ 巡歩 蚊声 克子 明朗 正坊報 博史 眉水 よし子 寿美子 英子 慶子 洋子 明子 花村 紫香 福一 房子

もう一言足せばすんなりゆく話
健康で美人センスがもう一つ
もう一つ下さい最後の石を積む
一病をもちりハビリはまじめなり
杭打ちはも一つおまけにエンヤコラ
中風はいや寺まいりして大根たべ
紀州路は山のみかんでこぼれそう
もう一度征服したい夏の富士
老婆をバカチヨンカメラよく写し
顔見世の樹にかんざし脂粉の香
おだてられ買ったアラウス五枚あり
秋の野は菊の白さと流れ雲
忍の字を只管抱いて金婚式
酒と一緒に流れ続ける夜の蝶
黒が基調のファッション喋らぬ方がよい
冬日和無人の島に咲く椿
顔見世かそうかですます老夫婦
南大阪川柳会 中川 滋雀報
いざごに特効薬がない雑居
たそがれて戦闘開始雑居ビル
雑居ビルお互い様が通らない
和洋中華新人類と雑居する
下積み雑居生活にも馴れる
雑居ビル火事の責任なすり合い
今のカネにすればと値打ちつけたがり
柿の色時価では言えぬ有田焼
女です時価が気になるこのダイヤ
階段のどこかに時価が置いてある
時価五億私に縁の無い数字
随意焼香小さな義理を果たしとく
ベレー帽随意の風の中が好き

武庫坊 正坊 千歩 登志実 隆 喜代子 富子 市雄 曲ん手 典子 つえ子 美祢子 萬の女 きのこ 薫風 恒伸 柳仲 覚然坊 頂留子 智恵子 綾珠 文秋 千里 章久 曲ん手 三恵子 重人

団体で随意にされては困ります

筏師の竿が随意に弾む頃

ご随意にせよと仰裁背を向ける

時効には絶対させぬ含み針

絶対の形に菩薩の指がある

絶対に勝てると読んでいた誤算

絶対に裏切らない母の小指

絶対に押さない絶対の声を張り

出来さうもない絶対にお核ボタン

楽しみの増えた背筋が伸びている

のんびりと生きてても白髪増えている

鍵の数だんだん増えて行く不信

水増しをされても知らぬ程に酔い

増収へハッパをかける棒グラフ

川柳泉尾

吉川

寿美報

修羅阿修羅女に渡る橋がない

アルパムがふえて老後も日々多彩

趣味の欄無難な読書と書いておく

孫五人錯覚でした猫五匹

しつけ糸嬉しい慶び待っている

国会解散どうしてバンザイせにやならん

万葉が稲穂の風に乗って来る

かび生えたお琴の爪にある昔

あかね空冬の鴉が消えてゆく

草の実が靴にこぼれる野辺の道

年輪の重さを語る顔のしわ

漁火の無事を祈った冬の旅

鴉鳴いて無理やり輪を足しに来る

母の肩わがゆく末の姿かな

後輩の励みになった勲六等

式場のビデオ気になりおちよば口

ハル子

喜風

新造

雀踊子

洋子

庸佑

公一

善信

しんじ

滋雀

智子

信治

慶三

勝美

美代子

シメ子

恭子

昭子

葉子

和子

淑子

伴子

義一

トミ子

シマ子

三世

満州子

清子

白水

はつ子

雑草はぬくまいこおろぎさみしがる

子供との太刀打夫と密談し

定年のひまをプランで埋めつくし

青畳謹しんで待つ華の宴

病む人になぼたん桜は重たすぎ

眉作る鉄おんなの色匂う

送別の旅は九鬼水軍の夢の跡

千の罪人の情を畳む傘

川柳大阪

山下みつる報

表面合わせることはやめにする

見どころがあるから小言多くなる

松茸にふれることなく秋終る

暑かった道をふるえるもう師走

萩の花露の重さでこぼれ散る

円高の素顔が覗く十二月

虚勢張る男の背中淋し過ぎ

相場師が指で商う億の金

そのうちに子ども連れて来る餌づけ

法の日もつまい詐欺師に歯が立たず

飽食の街で不況の噂聞く

いやなことまかされて来た気の重さ

妻の尻漬物石より重くなる

敏感にわかればなかつた仲たがい

敏感な野鳥が逃げ出す三原山

逆らわず川の流れに乗る落葉

かなづちが川で覚えて平泳

敏感な捨て身の技で勝ち拾う

福の神たまにはこつちも向いてんか

幸せの満ちてる部屋で眠くなる

水がめに水を満たしている誇り

広子

三千代

文子

弘子

道子

美子

敏

寿美

与呂志

雅集

我勝

比呂志

しげお

喜酔

洛酔

希久志

本蔭棒

みつる

重人

醉舟

眉水

虎酔吟

柳弘

哲流

鉄心

天平

金太

天樹

笑風

川柳たけはら

森井 菁居報

ハイキングいこうしたらあめがふる

せんきよせん朝早くからうらさいな

海には冬と夏の顔がある

いやだつたクラブたのしくなってきた

ふしぎだなんて地きゅうはまあいいの

願いごとかなつたのうまら十で

いやな夢見た日の朝のつまらなさ

コヒーのお世話になるも試験中

ウインドに着せて抱きたい服ばかり

鎖にも似たりポケットベルが鳴る

趣味多忙ちよびりすねてる旦那さま

追い込みへ返事はしとくアカンペー

いざこざをじつと聞いている床柱

観劇の余韻家まで持ち帰る

夜型のわたしは二十五時が好き

落葉掃く心豊かに秋深し

考への甘さへ寒波つきささる

みの虫の噂は聞かぬふりをする

日々好日ゆつくり回れ走馬灯

ぜい肉をとり贅沢な汗をかき

食卓を荒して回る豆ギャング

だんだんにありがたくなる説経かな

夕顔の哀しい性よ闇に咲き

出しを解放された髪洗う

一しやべりどうしようもないネアカ節

発表会のピアノまじめに間違える

お客様もいいなあ掃除機つなり出す

おっぱいがまだ欲しそうなの二男の瞳

酒宴たけなわ私一人が寿司を食う

小一昌之

中一由博

中二美保

中三早代

中四三幸

中五二貴子

中六三恵子

高二紀

みつ穂

菁居

康子

静水

天石庵

栄恵

こうじ

比呂子

太虚

淑子

富勲

愛子

静風

喜久枝

房久枝

由枝

蘭幸

令子

白狐

清水

静雨

両方に両親娘は果報者

その言えば作者に似たる案山子なり
酢のものは柿の甘味を入れて秋
今日は母あしたは父となる海で
唇を閉じてひとりの唄うたう
逆境に立ちよく見える遠めがね
句ころを温めながら湯に浸り
眠れない一室街の灯と語る
三食へ健康な歯のありがたさ

翠洋会

中西兼治郎報

母ちに指図している年の暮れ
新人類激辛究極年は暮れ
買う客の目ばしへ店員はなれない
小春日の空に師走を忘れてる
あたふたと鳥もせわしい十二月
アザレアの赤中心に冬の庭
歳月が傷を深めることもある
四捨に五捨切り捨て御めん年のかず
年忘れ忘れたくないことがある
ライバルもきつと疲れているだろう
コロンの香バラの毛布の温かさ
大寅も明けて可愛い兎さん
ポケットの薬忘れて梯子酒
寄せ鍋に隙間風ない温かさ
欠点が見え過ぎ眼鏡はずしとく
地球儀が欲しいと爺が言うている
特価品ばかり着せたが親おもしろ
信号を渡るマジメな人はかり

川柳藤井寺

赤木

湯はてりの風邪を二人で持ち帰り
いたわりの風の音きき秋遍路

和子報

与呂志
きよし

房子
操子
貞子
一路
西合
博子
シゲヨ
臣子
かつ子

兼治郎

萬里
さとし
美津枝
春子
君子
宏子
為子
良江
楓楽
照子
東雲
綾子
光子
みつ子
登志実
鬼遊

うず潮を眼下に渡る島の秋
騒がれて豪華結婚すぐ離婚
うぬばねにまだ気付かないうしろ指
晩秋の月と二人の露天風呂
松茸のつもりで食べる栗御飯
年金の利子が化けてる露天風呂
雑談も三役だけが残り居り
張本人あんたが騒ぐ事はない
雑談に本音は出さぬ控室
目的を袋につめて行く出湯
敵攻めて来ても反戦ですか君
赤い服作ってほしいカラスの子
保母さんと並んで語る七五三
五具足を彩を添えてる菊の花
騒がれる内が花です適齡期
フルムーンポスター避けて行く出湯
長い列並びこの列なんどすか
名湯の湯にもつからず二日酔
スマイルで一千万ドル借りてゆく
厳肅な顔で肝吸い注文し
ポリニュームをばいあげて軍歌去る
温泉に行ける楽しみ鎌が冴え
如才なし先ず玄関の菊を誉め
せがまれて読んだ童話を読み返す
カレンターあと一枚を風が繰る
公平と言うて福祉は削られる
騒いだあと吹き抜けていく秋の風
心ふたつ触れてひとつになる手紙

川柳はびきの

田中

三食が四食になる秋の夜
拡大鏡をそえて初版の広辞苑

隆二報

田中

優
子

つや
ときお
治樹
重洋
志洋
吸江
三郎
美代子
作秀
須美
本蔭棒
伴一
末一
秋園
ふみ
うめ
みのも
祐二
麻雄
和美
雅美
彩美
正人
ふゆ
清心
昭子
和子

隆二

コスモスがゆれて噂が通り過ぎ
レイキャビク期待はずれて大騒ぎ
病める姉生あるかぎり車椅子
花のバリ肩で風切る大銀杏
庭師来てやつと育てた枝を切り
庭とろりと枯葉の落ちる音
ぼつぼつと袋詰めするサンタさん
おしゃべりも静かに聞かす話し好き
りんどうの露をぬすんで秋を恋う
金の成る木せめて一本あれば良い
京阪神微妙に違う味と人
ロンヤスの魔法がとける二枚舌
逃げ隠れさせぬのれんの酒を酌む
年金の隠れらし赤字を許さない
イヤリング恋のささやき覚えている
おとこ船おんなが歌って酔っている
圧巻は立往生の段返し(菊人形展)
大秦の侍たこやき食べて立ち
分校の秋先生も稲を刈る
兄思い弟思いのいさかいで
土瓶蒸し松茸威張る旅の膳
暗がりで明るい約束する二人
足音をききわけて鳴る胸の鈴
真夜中の電話のベルに胸さわぎ
騒々しいとこへ近火御見舞
ヒットする歌の題名みごとなり
四割のヒット飛ばして二億円
ムニエルの鏝がヒットした夕餉
ヒットしたかけにきびしい師匠の瞳
コーヒの香りたどって路地の店

末一

敏

重樹
和子
美子
清子
昭子
美代子
白水
志洋
キミ子
昇
ケイ子

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6日(金) 午後1時半より 空想・慣れる・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎下車南西徒歩3分 〒660 尼崎市昭和南通8丁目201 福田礼子 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	9日(月) 午後1時より 見栄・痛い・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料60円切手4枚
菜の花	10日(火) 夕6時より 葉・縄・方角・列	八尾神社境内西郷会館2階 近鉄大阪線八尾駅南西徒歩5分 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	14日(土) 午後1時半より 耳・傘・蕎麦	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	14日(土) 午後1時半より ありがとう・血・刻む・光	堺総合福祉センター 南海高野線堺駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 わかやま	15日(日) 午後1時より 叱る・買物・見通し	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
川 柳 ねやがわ	15日(日) 午後1時より 変化・行動・新鮮・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	16日(月) 午後1時より 秘密・はるか・残る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南徒歩5分 〒561 豊中市島江町1-3,5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(木) 夕6時より 話相手・まとも・野心・ライバル	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
南海電鉄 川 柳 会	19日(木) 夕6時より メモ・雪・明日(アス)	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木) 午後1時より 鉢巻・溢れる・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電鉄高槻下車徒歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻白漢子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富 柳 会	19日(木) 午後1時より 予感・たっぷり・裏	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
駒つなぎ 川 柳 会	23日(月) 夕6時より 坂・口止め・誘う・縁	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より徒歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
川 柳 東 大 阪	28日(土) 夕6時より 読む・一本気・傷・ながれ	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手3枚

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

本社2月旬会

日時 二月七日(土) 午後六時
 会場 メンズファッションセンター3階
 東区内本町一丁目 電話06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角
 おはなし
 兼題 「蜘蛛」 阿 萬 萬 的
 「合唱」 河内 月子 選
 「氷」 玉置 重人 選
 「子供」 野村 太茂津 選
 席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
 会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
 各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
 投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

3月の兼題 「雀」 「大明事」
 「痛い」 「日」

本社3月旬会は7日(土)

「夜市川柳」募集

第9回 「水」 正本水客選
 3句・締切 2月末日
 第10回 「銀」 橘高薫風選
 3句・締切 3月末日
 投句先 〒593 堺市堀上緑町一十九一
 河内天笑方
 堺川柳会

● 募 集 ●

四月号発表表 (2月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞 選
 水煙抄(10句)黒川 紫香 選
 愛染帖(3句)橘高 薫風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「旗」 高田 博泉 選
 「顔」 山本 規不風 選
 「芯」 浜本 義美 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

五月号発表表 (3月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞 選
 水煙抄(10句)黒川 紫香 選
 愛染帖(3句)橘高 薫風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「鯛」 高須賀 金太 選
 「胸」 舟木 与根一 選
 「走る」 河井 庸佑 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

2月の常任理事会は2日(月)

定価 五百円(送料50円)

半年分三千二百円(送料共)
 一年分六千三百円(送料共)

昭和六十二年一月二十五日印刷
 昭和六十二年二月一日発行

編集兼 西尾 巖

印刷所 藤原 童心 社

〒545 大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 ☎六九一六九一四番
 振替口座大阪 8133368番

編集後記

☆元日の午後、便で秋田へ飛んだ。雲の上は快晴、アールプス連峰や富士山が頭を雲の上に出して、小さく端正な姿を見せたが、秋田空港へ一時間近くも遅れて到着すると、下界は猛吹雪で、プロペラ機がよく着陸したものだと思ふ。暗い中を角筈へ。

☆翌日は好天で芭蕉の史跡、象瀧の鮎滴寺を見る。松島は笑うがごとく象瀧はうらむがごとし、との「奥の細道」の風情は皆無で、宝暦十三年に建立された水戸の老公光圀書の句碑のみ私の心をとらえた。「象瀧の雨や西施がねむの花」私にはてなと思う。「象瀧はなかつたか。ああそうか。芭蕉が曾良と元禄二年に象瀧を訪れたときの句が前者で、後年推蔵を重ねて後者に定着させ「奥の細道」に登載発表したのであろう。☆死ぬ直前まで推蔵に心を砕いた芭蕉を、この地で再

確認したわけである。☆雪景の最上川舟下りは舟が芭蕉号であるのはお笑いだが、慈恩寺、立石寺の雪中の法燈とともに心に染み

た。山形のそばは美味い。☆国鉄の広告のフルムーンという感触はなく正に旧婚旅行、夫は妻と十年年ぶりの旅をしたのである。今後は幾年、この世を去るまでよろしく頼むという求婚旅行であつたかも知れない。☆岩田美代さんは、川柳塔の女流の個性派の五指に入る作者だつた。「まばたいて星は墜死を考ふる」「恐ろしい夢のふとんを叩き干す」などの句は、作者の翳を引きずりながら隙が風をい。ご子息から「母は薫風さんを心の恋人としていたようです」との便りを頂いたがサークル柳様には最後まで出席され、十二月五日一同でぜんざいを食べて別れたのだつた。電波川柳以来のご厚誼に合掌した。☆徹夜明けての寝不足の目で日展を見ていて、堂木元次画伯の作「懸空寺」に目が

(薫)

覚めた。中国旅行を共にした皆さん、ご覧になりましたか。▼親方日の丸と言われるほどの国鉄が、またたくうちに解体されるハメとなつた。ここを職場に選び、自他ともに喜びとした者たちにとつて、青天のへきれきとしか言ひようのないなりゆきである。この世に絶対はないと何度も聴いていたが、さもありなんとならずかざるを得ない。▼四十数年前に、神国日本が連合軍に敗退した事実を体験したにもかかわらず、今また何かを信じた自分の愚を悟るべきである。▼人はなべて何かを信じて生きていく。その信じるものが当てにならなかつた時にはどうすべきか、その対策は各人の配慮に待たなければならぬ。それが今の世の中である。▼ある人を、ある党を信じてたばかりに痛い目に会つたれなのである。今は数字の上だが、月日と共に厳しく

なつて来る。これをいじめと誰も言わない。

▼学校で、地域で、いじめ対策を講じている。小さなことには目くじらを立てるが、大きなことには何も言わない。これがいじめの体質なのである。▼現代川柳に諷刺がすくなくいのは何故か、それは体制に対する無力感なのではないだろうか。長いものに巻かれる聰明であれば結構なことだが。諺に「雉も鳴かざれば打たれぬすまい」と謂う。本当は一生一度の人生を楽しく暮らしたい。(き) ☆もう少し男女ノ川。(き) ☆川のことを書かせていただく。☆横綱を引退、しばらく協会の理事をつとめ昭和十九年廃業した男女ノ川のその後的人生は、まことに波乱に満ちたものであつた。大政翼賛会に入り、衆議院議員や町会議員に立候補したり、映画に出たり、何かと話題をまいたが、次第に世人に忘れられ、職業も土建業、金融業、私立探偵など

転々とした。晩年は養老院に入り、最後は川魚料理屋の下足番となつて昭和四十六年死んだ。

▼何かが彼の運命を狂わせたのか、要因はいろいろあるであろうが、私は、どうしても、そこに同時代の双葉山の影とあったのを感じずにはおれないのである。☆プロ野球の世界でも、昨年清原に明け、清原に暮れた一年であつたが、その蔭で口惜し涙を流した選手が一人いた。阪急ブレーブスの福良選手。内野手として打率三割をマーク、打点・本塁打とも万人が認めながら清原というウルトラスーパースターが同じバスター・リーグにいたことが彼の不運だつた。生涯に一度しかチャンスのない新人王のタイトルをとり逃がしてしまつた。

☆運命のいたずらに泣く者笑う者、今年もまた、数々の人間模様が続くであろう。(史)

千歩の絵個展

ギャラリー ミツワ

大阪市南区心齋橋筋1丁目1

(そごう北角の辻東へ2軒目)

TEL 06 (271) 4382

2月24日(火)から3月1日(日)まで

(午前11時～午後7時)

(最終日は午後5時まで)

絵を描くことの喜びと楽しさ嬉しさにあれども
これもと余生を一途におぼれております明け
暮れ。この辺りで筆をとめて千歩の絵と名付
け皆様の御批評を頂き、これからの糧とさせ
て頂きたく存じます。お恥かしい絵ばかりで
すが御高覧賜りますよう。

二兎三兎 追うて果なき絵具皿
いくばくの余生一途な白い画布 千歩

〒591八尾市中田2-302 高杉 千歩

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



ほうらい



TEL641-0551

なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ